南知多町天神山遺跡の調査メモについて

小澤一弘*・川添和暁
*愛知県埋蔵文化財センター専門委員

南知多町所在の天神山遺跡は、縄文時代早期末土器の標識遺跡として広く知られている。天神山遺跡の調査は知多半島で最も早い時期に行われた学術調査であったこともあり、調査の内容については文字記載で示されているもののみであった。この度、調査当時のメモを報告することによって、その記載内容を模式図として確認することができた。この情報により、天神山遺跡の堆積状況を可視的に検討できるとともに、今後、出土状況を勘案して遺物検討ができるものと期待されるものである。

1．はじめに

半世紀も前の天神山遺跡発掘調査の土層が書かれた３枚の切り取られた野帳片について、本稿に入る前に、その経緯を回顧する。

昭和53（1978）年、名古屋大学考古学研究室で、楢崎彰一先生の指導により、天神山遺跡の整理に入った最初に土偶を見た時の感激と、これがおせんべい土器かとその薄さと緻密に焼きしまった土器片を見て驚いたことを今でも記憶している。

整理用の木箱に入った入海式、石山式、天神山式の土器片、新聞紙に包まれた魚骨（マグロやタイの椎骨）の出土品を、土器片については分類と厚みをラベル毎に計測していた。

陳列室で学生と整理をしていた時に、大参義一先生より、「澄田正一先生より預かったもので、役にたつのでは」と野帳を切り取った３枚のメモを手渡された。メモには天神山遺跡発掘調査の土層概略図が書かれていた。

また名古屋市博物館で昭和57（1982）年『東海の縄文時代』が開催されたが、開催前に、整理中の天神山遺跡の土器の中で、ほぼ完形品になる深鉢を安達厚三氏に見せると、みずから復元すると持っていかれ、展示されたことが懐かしく想いだされる（図1）。

結果的に続けていた整理が頓挫、整理は終了することもなく、遺跡にとって重要な記録の土層概略図が手元に残ったが、この野帳のメモのことは30年近くまったく忘れていたのである。

退職、センターを離れる時に、天神山遺跡の重要性を考える時、手元にある土層図を、今後公表する機会の可能性がある川添和暁に託したのが今回の発端でもあった。

天神山遺跡の発掘調査関係者でもあった紅村弘氏を江﨑　武氏の紹介により平成28(2016)年１月26日３名で紅村邸を訪ね、当時の話を

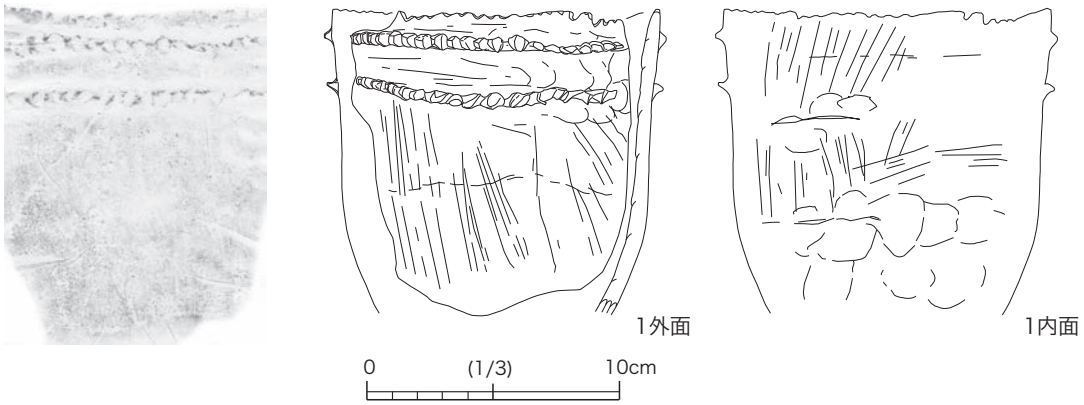


図１　天神山遺跡出土入海Ⅰ式土器（名古屋大学文学研究科考古学研究室 蔵）

聞く機会を得た。その後、岩野見司先生が調査に参加されていたことを知り平成 28 年 4 月 30 日に荒木集成館において当時の話を聞き写真を見せていただいた。

かつて愛知県埋蔵文化財センターの理事・専門委員としてご指導いただいた鬼籍の澄田正一先生、楢崎彰一先生、大参義一先生に関わるこのメモをセンターの紀要で公表するのも不思議な巡り合わせである。これを期に今後天神山遺跡の研究が進展することを期待しています。

（小澤一弘）

2．天神山遺跡について

天神山遺跡は、愛知県知多郡南知多町大字大井に所在する、大井漁港側の南東方向へと延びる細長い丘陵端部上に立地する。天神山遺跡は、この丘陵端部でも標高 15m 前後の西側傾斜地に位置し、東側傾斜地には天神山Ｂ地点が、北東側約 100m の東側傾斜地には塩屋遺跡が位置する。これらの遺跡は、同一丘陵上に近接して群をなしており、2km ほど南にある新津遺跡・同（第２地点）・同（第４地点）も同様のあり方を呈している。

天神山遺跡はかつては入道遺跡として紹介されていた (磯崎・杉崎・久永 1965)。遺跡の発見は、昭和 30(1955) 年 4 月に地元在住の上田公治・山本善輔らによって遺物採集されたことによる。同年 8 月に、上田・立松宏・楢崎彰一により 1 ㎡の試掘調査が実施され、翌昭和 31(1956) 年 1 月に上田・楢崎・立松・紅村弘らにより発掘調査が行われた。調査は、凹地のほぼ中央部の上方に第Ⅰトレンチ、その下方南寄りに第Ⅱトレンチが、それぞれ長さ 8m・幅 1.5m で東西方向に設定された (岩野 2002)。

1956 年の調査では、土器・土製品・石器・骨角器 *・獣骨・魚骨が出土しており、現在も名古屋大学文学研究科考古学研究室をはじめ、南知多町教育委員会・愛知県陶磁美術館で遺物が収蔵されている。ところが調査時の図面類は、現在所在不明となっており、当時の調査方法などは、上述したような文字記載のみが知られる程度であった。

このような状況にあって、本稿で紹介する調査メモの存在は極めて貴重な情報と考え、まずはこの内容を報告することにした。

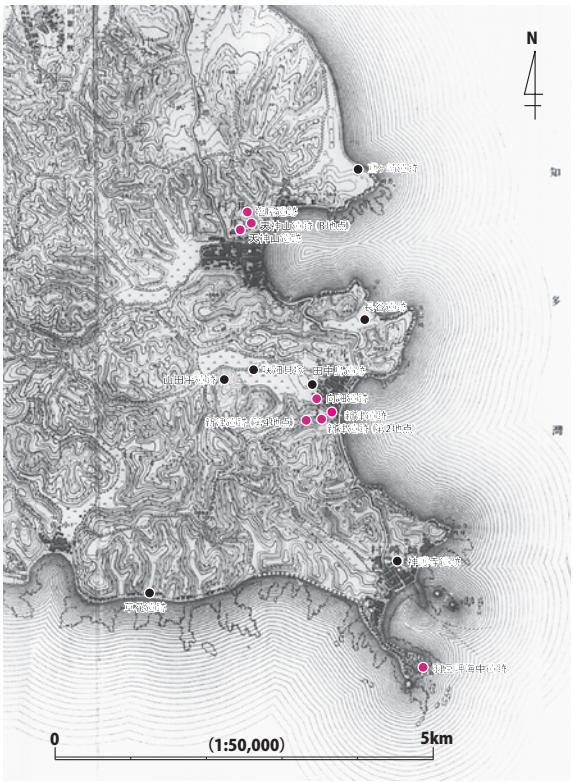


図２　天神山遺跡と周辺の縄文時代の遺跡
（赤色の遺跡位置が縄文時代早期の遺跡位置）
明治 24 年 陸地測量部「師崎」より

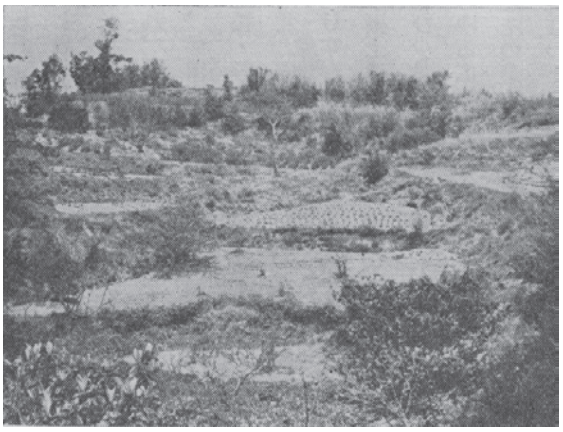


図３　天神山遺跡全景写真（紅村 1963 より）

* 骨角器については、別稿で取り上げたので、参考にされたい（川添 2018）。

3．天神山遺跡調査メモについて

図４・図５に、野帳に記された調査メモの全ページを掲載した。調査メモは７枚分 14 頁あるが、白紙頁が２頁分あるので、実際には 12 頁に記載がなされている。平成 27(2015) 年に実見した際には、３部に綴じられており (図４左上)、さらにクリップで一つにまとめられていた。７枚分それぞれには紙の片面に No. が記されていた。調査メモの順番を示すもので、記載内容からして、すべてが綴られた順番を示している可能性がある。調査メモの主な記載は黒鉛筆が主で赤鉛筆も用いてられている。これらは筆跡などから同一人物によるものと考えられる *。一方､No. の記載はインクペンによるもので、同じインクで「30 年」と記載されているものもある。No. は遺跡や内容による順番ではなく、もともとは記載年別に付された (あとで整理された) ものの可能性もある。以下、No. 別に記載内容を見ていくことにする。便宜的に､No. の付されている面を No. □ -1 として、その裏面を No. □ -2 とする。

○ **No.1-1**　(立松宏君談)【赤字】
知多郡師崎町大字大井字入道 (通称天神山)
非貝塚
包含層厚約 1m
-70cm 位で５～ 10cm の中間層を挟在して上下両層に分層される。
機械的に９層に分層し最下部 118cm。
上下両層を通じて尖底

○ **No.1-2・No.2-1**
1st　耕作土　-10cm　小破片多し。
Ⅱ nd　黒色粘土 (炭化物多し)　破片大型となる。
Ⅲ rd　黒色粘土 (粘土力強くなる)
-25cm 鹿角
Ⅳ th　下端　-40cm　Ⅲに同じ
Ⅴ th　遺物少なくなり礫多くなる。
(厚５～ 10cm)
Ⅵ th　遺物多くない
下辺部より小兒頭大の礫塊不規則出土
-55cm
Ⅶ th　褐色土層　爪形文土器多くなる。
Ⅷ th　同上
Ⅸ th　突帯（圧痕）多くなる。
地盤は岩盤の凹凸あり。

○ **No.2-2**
丘陵突端付近で
丘陵をはさんで
東西の斜面にあり。
西を第Ⅰ地点　東を第Ⅱ地点
付近にておせんべい土器片採集
scraper（硬砂岩　chert）3
無茎石鏃（chert）1
下層―早期末【赤字　「子母口式」を消す】
上層―前期初【赤字　「茅山式」を消す】

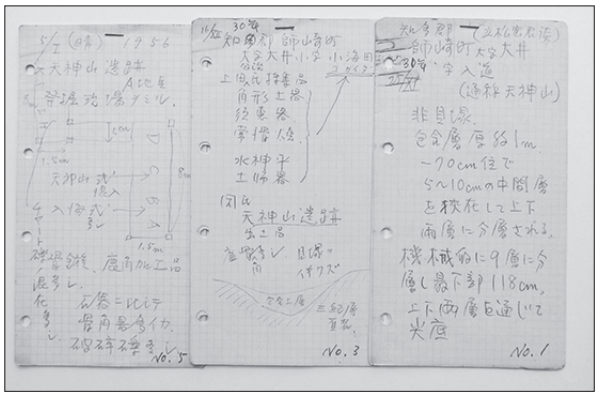
○ **No.3-1**
知多郡師崎町大字大井字小海田（コカイダ）
上田公治氏採集品
角形土器　須恵器　常滑焼　水神平　土師器
同氏　天神山遺跡出土品
鹿骨角多シ　貝塚ヲ伴ワズ
【土層断面模式図】

○ **No.3-2**
12 月 27 ～ 28 日
測量（楢崎・立松・紅村）
27 日　幻燈二より座談会
1 月４～８日
発掘（澄田・楢崎・紅村・立松・大参）
４日　午前到着　午後より発掘
８日　午后報告会（大井町ニテ）

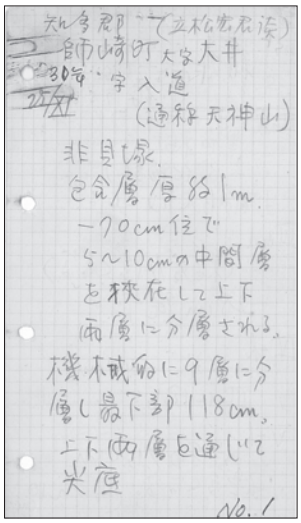
○ **No.4-1**
遺物保管場所　師崎中学校（磯部幸男教官）
【遺跡位置略図】

○ **No.5-1・No5-2・No.6-1**
5/I【1 月５日のことか】(晴）1956
天神山遺跡 A 地点　発掘現場ヲミル
【グリッド配置図：図６】

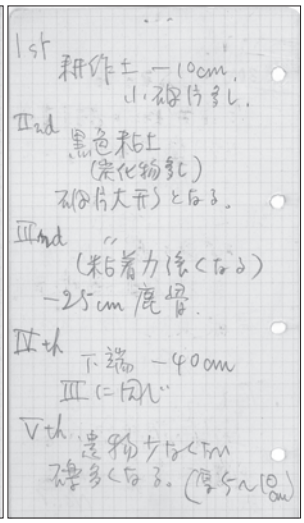
* この調査メモの筆跡については、岩野見司先生から、澄田正一先生によるものである、との見解を頂いた。



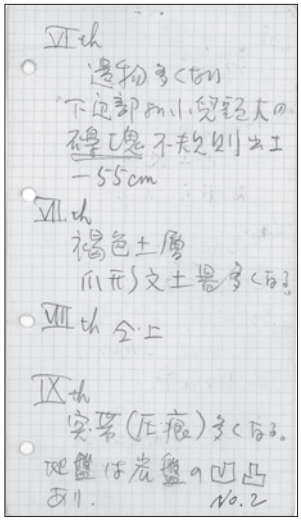
天神山遺跡調査メモ _ もとの状態
N0.1 ～ 2、No.3 ～ 4、No.5 ～ 7
で綴じられていた



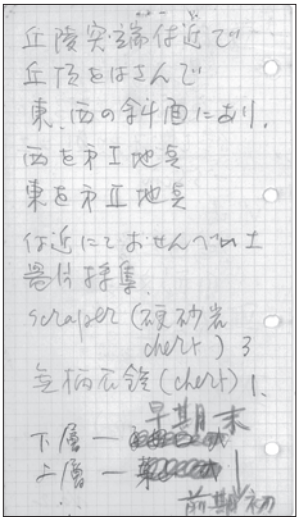
No.1-1



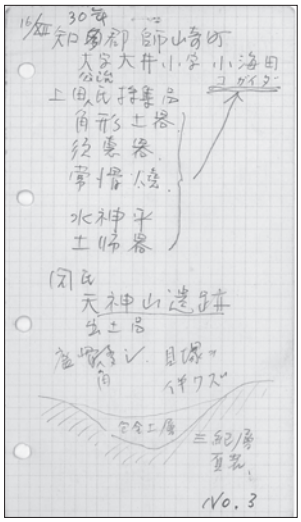
No.1-2



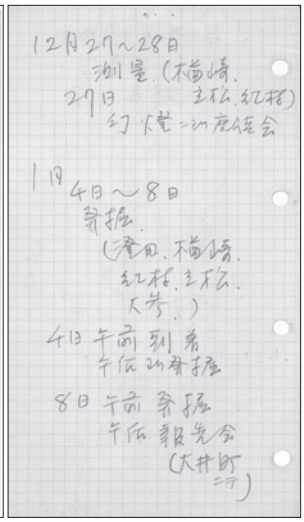
No.2-1



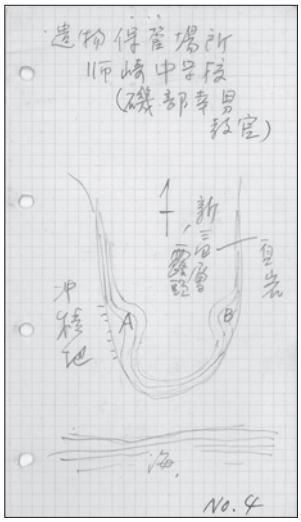
No.2-2



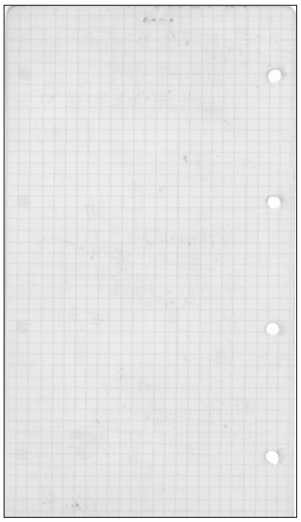
No.3-1



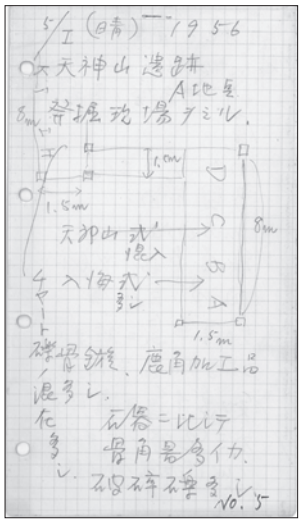
No.3-2



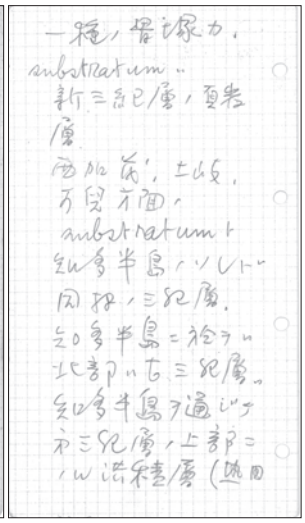
No.4-1



No.4-2

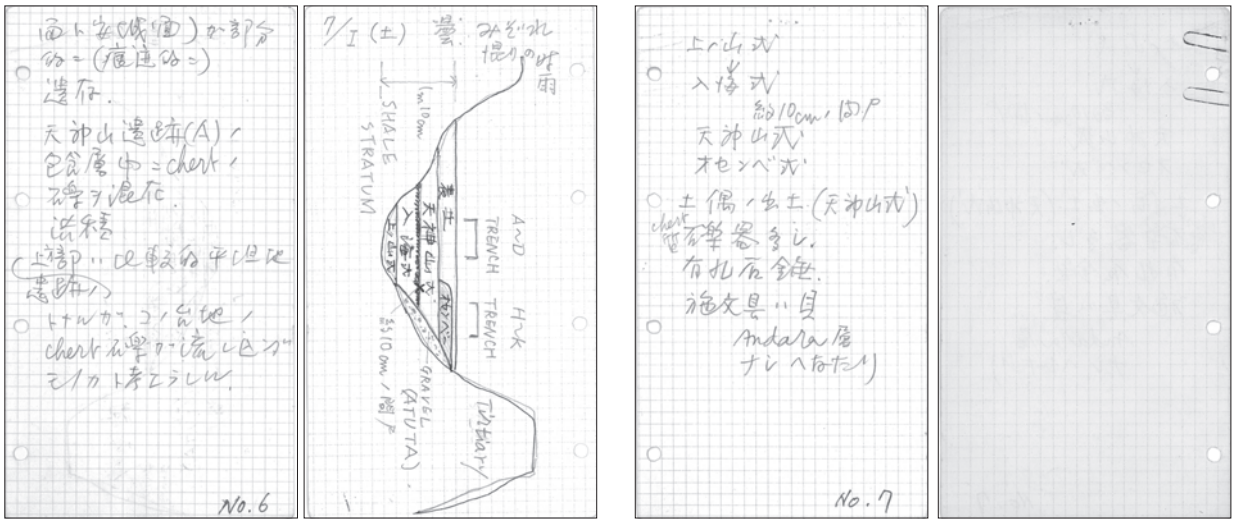


No.5-1



No.5-2

図４　天神山遺跡調査メモ１



No.6-1　No.6-2　No.7-1　No.7-2

図５　天神山遺跡調査メモ２

図６　天神山遺跡 1956 年調査風景写真（岩野 2002 より）

骨鏃・鹿角加工品多シ
石器二比シテ骨角器多イカ
破砕礫多シ
一種ノ骨塚カ
新三紀層ノ頁岩層
西加茂・土岐・可児方面ノ nubst ratum ト
知多半島ノソレトハ同様ノ三紀層。
知多半島二於イテハ北部ハ古三紀層。
知多半島ヲ通ジテ第三紀層ノ上部二ノル洪積層（熱田面ト安城面）ガ部分的二（痕跡的二）遺存。
天神山遺跡（A）ノ包含層中二 chert ノ礫ヲ混在。
洪積
遺跡ノ上方部ハ比較的台地ノ chert 礫ガ流レ混ンダモノカト考エラレル。

○ No.6-2・No.7-1

7/I【1 月 7 日のことか】
曇 みぞれ混りの時雨
【土層断面模式図】
上ノ山式
↓
入海式
約 10cm ノ間層
天神山式
オセンベ式
土偶ノ出土（天神山式）
chert 質礫器多シ
有孔石錘
施文具ハ貝　Anadara 属　ナシ　へなたり

以上、内容を概観した。

No.1-1 ～ No.3-1 までは、1956 年 1 月の調査に入る前の記録ではないかと推測され、特に No.1-1 ～ No.2-1 は、1955 年 8 月の試掘調査の成果である可能性がある。No.2-2 では遺物採集地点が 2 箇所あること、No.3-1 は上田の採集資料の記録で、遺跡発見時の様子が記されているといえる。

1956 年の調査記録としては、No.3-2 ～ No.7-1 が当たると考えられる。No.3-2 は、天神山遺跡 1956 年調査の日誌に当たる内容が記されている。No.4--1 には、天神山遺跡の位置略図記されている。No.2-2 で、第 I 地点としたものが A に、第 II 地点としたものが B と記されている。発見当初、入道遺跡として紹介されたこの遺跡が、昭和 30 年 12 月に文化財保護委員会宛に出された発掘届け（図 7）では、「天神山遺跡」と呼称されるに伴い、天神山遺跡 A 地点と天神山 B 地点という名称になった。

No.5-1 ～ No.7-1 は、1 月 5 日および 7 日に、調査の経過と所見が記されたものである。No.5-1 には、調査区の配置図が記されている。幅 1.5m・長さ 8m のトレンチが東西方向に 2 本設定されたことは知られていたが（岩野 2002）、この調査メモによって、トレンチの中が、それぞれ A ～ D と H ～ K の区に分けられていたことが判明した。恐らく A ～ D の方が第 I トレンチ、H ～ K の方が第 II トレンチであろう。この調査メモには両トレンチ間の距離の記載は無いが、トレンチ設置方向（東西方向）に幅 1.5m の横長の区域が設定されていたようである。筆者はこの区画も調査トレンチではなかったかと、推測している。その理由は以下の 3 点である。1 点目の理由は、調査メモに記されていた区画の形状である。2 点目の理由は、現状では E ～ G の区の記載が欠落している点である。3 点目の理由は、調査風景を記録した岩野見司先生の写真（図 6 左）にある。この写真は、第 I トレンチ（A ～ D 区）を中心として南東方向から撮影されたものと考えられる。写真の中央左側付近で、トレンチが 90 度クランクした状態で掘削されており、その長さは少なくとも 4m 以上はあったものと推測される。すなわち第 I トレンチ D 区に向かって直交方向にも掘削された調査トレンチであった可能性が高い。そのトレンチの規模については確実な証拠はないが、E ～ G の 3 区分であったことを想定すると、長さは 6m であった可能性があろう。以上のことを踏まえて、図 8 に想定される調査トレンチ配置図を示しておく。

遺跡の所見については、熱田層相当の第三紀層で形成された凹地形に土器・石器・骨角器の包含があり、一種の骨塚ではないかとの所見が示されている。包含層中にはチャート礫が多く混在しており、台地上方からの流れ込みであろうと推測している。土器については、上ノ山式→入海式→約 10cm の間層→天神山式→オセンベ式が層位的な関係をもって出土したと記されている。

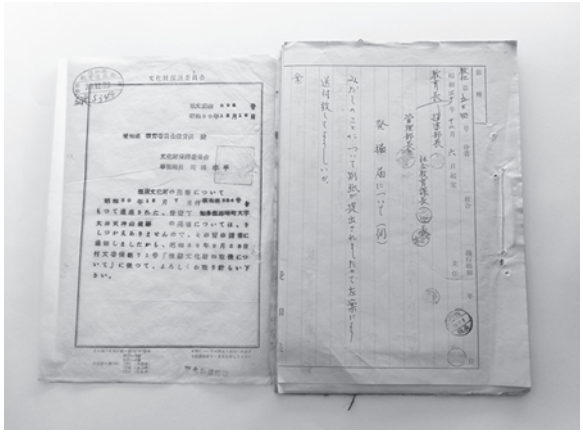


図 7　天神山遺跡 1956 年調査発掘届関係書類写真

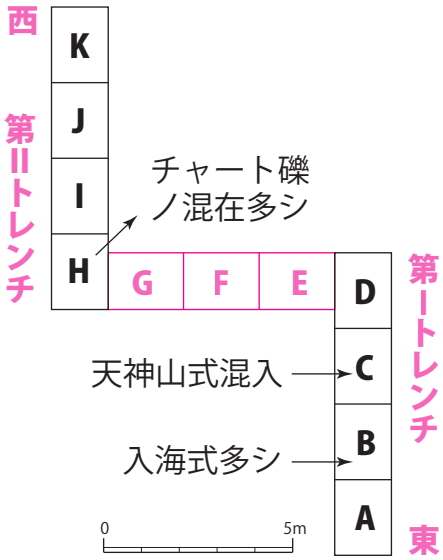


図 8　天神山遺跡調査トレンチ配置想定図

No.6-2 には、調査成果を踏まえた土層断面模式図が記されている。この模式図は野帳のマス目を用いて記されたもので、用紙に入るように縦横変倍の状態となっていた。この縦横変倍を等倍にして、上述したトレンチの位置を補正したものが図 9 で、凹地の南北断面を西側からみた図となっている。調査時の層序については以下のように言われている（岩野 2002）。

○第Ⅰトレンチ

第 1 層：表土および粘性の強い黒色土（層厚約 50cm、土器・石器・骨角器多量包含、層下部には多量の魚骨）

第 2 層：砂混じりの土層（層厚 10cm ほど、土器の包含少ない）

第 3 層：粘性の強い黒色土層（層厚約 40cm、土器・石器・骨角器包含）

第 4 層：地山（岩盤）

○第Ⅱトレンチ

表土および第 1 層：礫混じりの褐色土層（層厚約 30cm、多量の土器・石器・獣骨・魚骨を含む）

第 2 層：第Ⅰトレンチ第 1 層土器少量出土

Ⅰトレンチ第 1 層は天神山式の層で第Ⅱトレンチ第 2 層と同一、第 2 層は間層、第 3 層が入海式・上ノ山式の層にあたる。第Ⅱトレンチ第 1 層はオセンベの層に相当する。

4．おわりに

本稿では天神山遺跡の調査メモを報告して、調査の方法や経過について可能な限りの復元を試みた。これまで文字記録のみであった内容について、視覚的に追検証することができた。これによって天神山遺跡出土資料について、遺物の注記をたどることで、遺跡との関連で検討することがよりできるようになったといえる。

天神山遺跡の立地する段丘上には、天神山 B 遺跡・塩屋遺跡の所在が知られている（図 10）。これらはそれぞれ活動の場とする遺跡群として捉えられるものであるが、そのためにも、各遺跡の内容について詳細に検討を行わなくてはならないと考えられる。

天神山遺跡の調査が行われて 60 年が経過している。本遺跡が、当地域を代表する縄文時代早期末の標識遺跡であることからも、今後も継続した調査研究が必要になるといえよう。

（川添和暁）

本稿を草するに際し、以下の方々からのご教示・ご配慮を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。

岩野見司・江崎　武・梶原義実・紅村　弘・杉本真由・山本直人

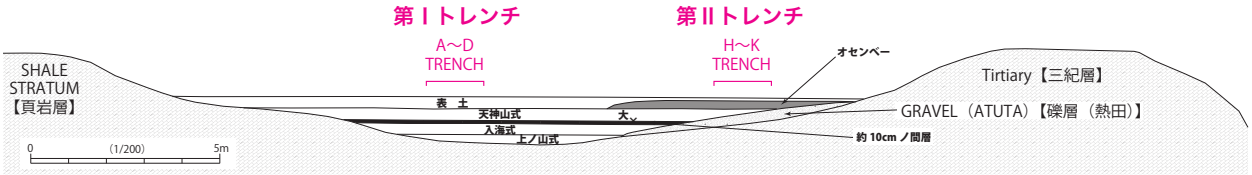


図 9　天神山遺跡土層断面模式図（調査メモ No.6-2 を補正）

参考文献

磯崎幸男　1984 「塩屋遺跡出土の縄文土器」『知多古文化研究』1.1 ～ 28 頁　知多古文化研究会

磯崎幸男・杉崎　章・紅村　弘　1965 「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41.1 ～ 12 頁　古代学研究会

岩野見司　2002 「天神山遺跡」『愛知県史　資料編 1　考古 1　旧石器・縄文』245 ～ 251 頁　愛知県

川添和暁　2018 「東海地域・関西地域における縄文時代早期骨角器の様相」『考古学フォーラム』24. 考古学フォーラム編集部

紅村　弘　1963 『東海の先史遺跡　綜括編』 名古屋鉄道

山下勝年ほか　1997 『南知多町誌　資料編 6』 南知多町

図 10　天神山遺跡・塩屋遺跡の位置と天神山遺跡調査トレンチ位置想定図

大名倉遺跡の研究

永井邦仁・川添和暁

愛知県北設楽郡設楽町に所在する大名倉遺跡は、縄文時代早期～晩期の土器や石器が出土する集落遺跡として東海地域で屈指の存在である。本遺跡では、大正年間から地元で続けられてきた遺物の地表面採集や早稲田大学による発掘調査を経て、近年には愛知県埋蔵文化財センターが 223 か所の試掘トレンチによる範囲確認調査がなされている。本稿では主に範囲確認調査から得られた地層や地形のデータと出土遺物の検討によって、縄文時代遺跡の立地に関する見通しを得ることができた。

1．はじめに

愛知県北設楽郡設楽町大名倉滝ノ上・滝ノ下・下谷・南貝津に所在する大名倉遺跡は、同町指定史跡である。本遺跡では後述するように大正年間から縄文土器や石器が多数採集されており、三河地域山間部の縄文時代を代表する遺跡として知られている。また戦前と昭和 43（1968）年には、学術目的の発掘調査も行われている。

その一方で近年、本遺跡を含む設楽町大名倉地区においても、設楽ダム事業に関連する各種工事計画が進められている。それに伴って、愛知県埋蔵文化財センターでは各遺跡の範囲確認調査を行い、このうち西地・東地遺跡では平成 27・28 年度に本調査を実施した。本遺跡では、縄文時代後期初頭を中心として近世に至るまでの遺構や遺物が多数検出されている【川添 2018】。これに対して大名倉遺跡では、5 か年度にわたる範囲確認調査を経て、ようやく縄文時代の集落遺跡としての輪郭がみえてきた。本稿では、これまでの調査で蓄積された地層や遺構のデータの統合と、出土遺物を整理・検討した成果を総括する。それによって、大名倉遺跡における縄文時代集落の立地する地形および包含層の分布状況がどのように広がり、そして時間的な変化をみせるのかを明らかにしたいと考える。なお、地層データを永井が扱い、遺物の整理は川添がおこない、文責は文末に記した。

2．大名倉地区の遺跡と地形

大名倉遺跡の所在する設楽町大名倉地区は、豊橋市で三河湾に注ぐ豊川（寒狭川）の上流域にあたる（図 1）。同川流域は河口から中流域の新城市域までは谷底平野を形成しているが、上流域は三河高原（主に標高約 400 ～ 1,000m）の山間部にあって、大半が渓谷の中を流れている。しかし一部には狭小な河岸段丘が形成されて遺跡が分布している。設楽町内に

図 1　大名倉遺跡の位置（1:500,000）

はそのような河岸段丘のある谷地形がいくつかあり、同町大名倉地区もその１つである。

大名倉遺跡から約 2km 下流には、東方の八橋地区・川向地区から流れてきた境川との合流点がある。そこから上流側約 1km の間は遺跡がみられない。そして椹尾谷との合流点を過ぎるあたりから大名倉丸山遺跡、胡桃窪遺跡、ハラビ平遺跡、日掛遺跡が豊川に面して立地する。ただしこれらの遺跡の地形は大半が斜面地となっており段丘の発達はわずかである。よって地区内で比較的段丘が発達しているのは大名倉遺跡を中心とする一帯が唯一といってよいであろう（図 2）。

大名倉遺跡は豊川右岸に位置する。遺跡の北西方向から流下してきた豊川が段丘崖にぶつかって、一旦東方向へ屈曲した後に再び南東方向へと延びている。それに面する幅約 80m の段丘面は、北西から南東へ約 300m にわたって広がっている（図 3）。段丘崖は明瞭で氾濫原との高低差は約 5m ある。現河道は氾濫原からさらに数 m 河床を抉りこんでおり、近年は氾濫原の一部も水田として使われていた。

段丘面は比較的緩斜面であることから耕作地として利用されていた。耕作地から西側および南側では等高線が密になっておりその境界を昭和 36（1961）年に廃止された森林鉄道段戸山線（田口本谷線）の後身である道路（東海自然歩道）が延びている。等高線は、大名倉集落の宅地付近からさらに間隔が詰まっており、一段と傾斜が強くなることを示している。そして山林となっている山地斜面に至る。このように等高線に基づいて区分される大名倉遺跡の地形は、豊川河道→氾濫原→段丘崖→段丘面→丘陵端部緩斜面→丘陵斜面→山地斜面へと移行する。

そして等高線からもう１点読み取れるのが土石流の痕跡である。それは弓なりに張り出した等高線に表れており、大名倉遺跡では３か

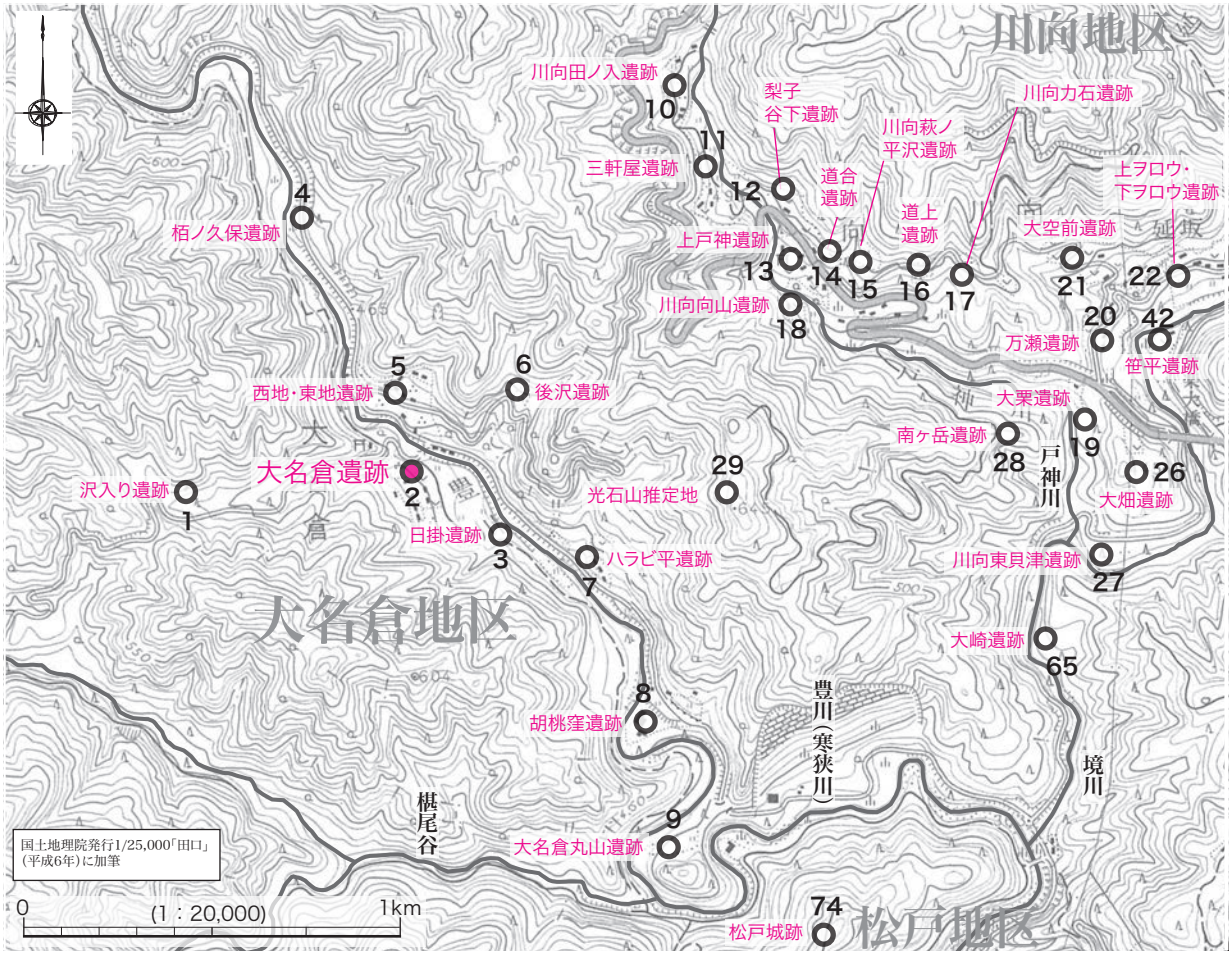


図２　大名倉遺跡とその周辺の遺跡分布

所にみられる。いずれも西側背後に細長い急傾斜の谷地形があるので、そこを経由して流出した土砂が堆積したものと考えられる。このうち南の土石流地形では、地元での聞き取りによって20世紀前半にもそれと推測される土砂流出があったということから、沢づたいに頻発していたものと思われる。

以上のように詳細地形測量図から読み取れる部分もあるが、全体が宅地・耕作地化している以上、特に埋没した谷地形やくぼ地は見えにくい。また土石流堆積もその広がりや厚さは地表面観察だけでは不明である。こういった点は、発掘調査によって地層断面を確認することであきらかになる場合もある。

3．大名倉遺跡における考古学的調査

（1）地元考古学者による発掘調査

大名倉遺跡では、大正元（1912）年から地元在住の伊藤正松氏が、耕作中に出土した縄文土器や石器を採集したことでその存在が知られるようになった【岩野2002】。その後、夏目一平氏の報告に基づく北設楽郡内の先史・原史時代遺物発見地名表【小栗1932】では、「名倉村大字大名倉」として縄文土器片ほか7種の石器が列記されており、既に豊富な遺物の所在が明らかになっている。

初めて発掘調査が行われたのは昭和14

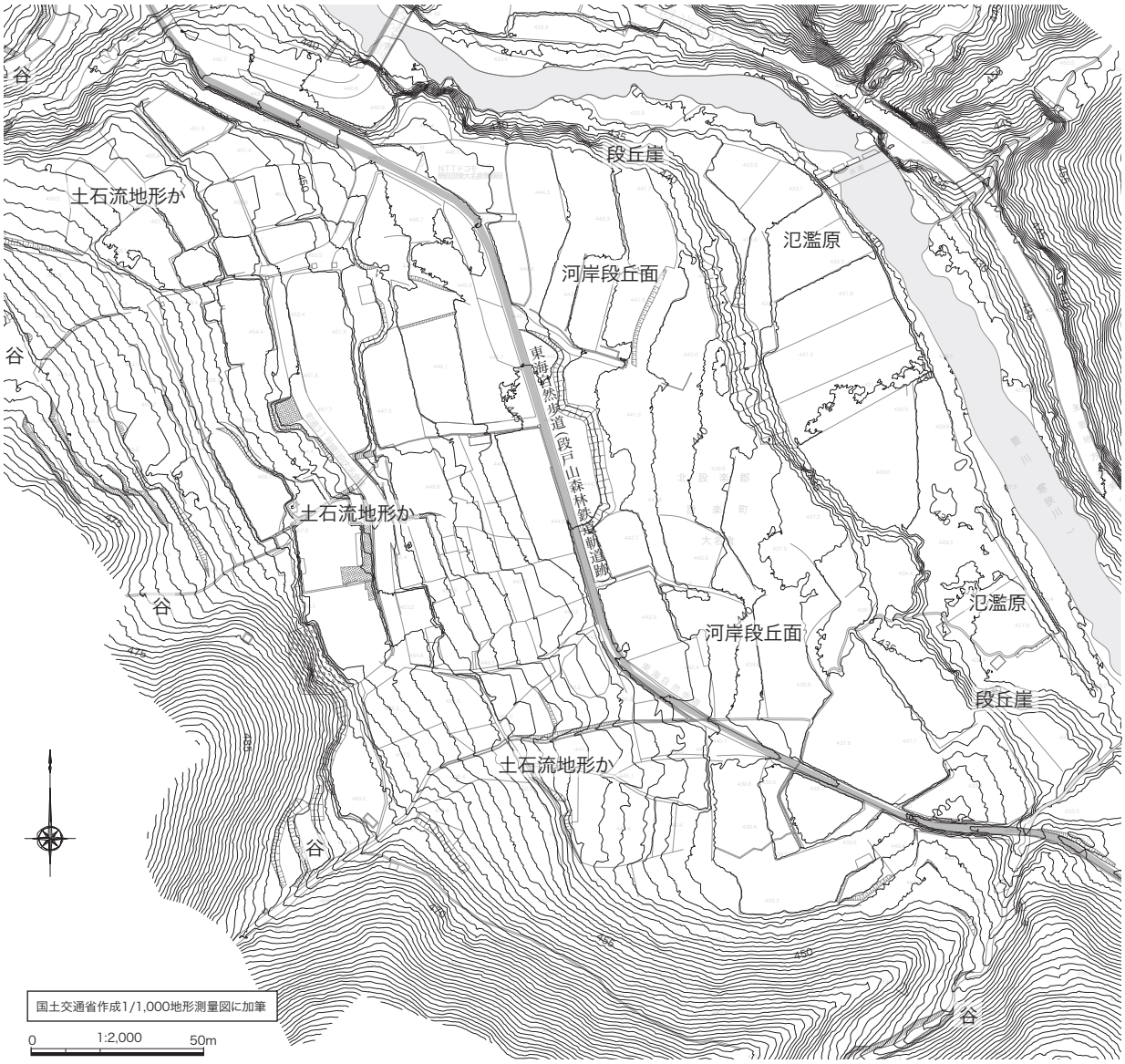


図3　大名倉遺跡の地形

(1939) 年で久永春男氏を招聘して行われた【大橋 2005】。鈴木冨美夫氏によれば「この調査の結果、同遺跡からの出土遺物は、縄文早・前・中・後・晩期の各期にわたり、土器も 20 形式以上に及ぶ県内稀な大複合遺跡であると」【鈴木 1997】評価され、東海地域屈指の遺跡として周知されるようになった。ただしこの時の発掘調査報告作成は戦時により中断したらしく、昭和 22 年 10 月に久永氏が再び当地に来訪して伊藤氏・沢田久夫氏らと作業を行っているが【森田 2013】、未完のままとなっている。

（2）早稲田大学考古学研究会による発掘調査

昭和 35 年に奥三河郷土館が開館し、故伊藤氏の遺志により採集遺物は町に寄贈された【岡田ほか 1968】。紅村弘氏は同館陳列の遺物から、縄文時代早期～晩期の各期で土器の量に増減があることや、後期（安行式・宮滝式）、晩期（大洞式）の詳細について述べている【紅村 1963】。

また昭和 25 年頃には、設楽町やその周辺地域において早稲田大学教授（当時）の桜井清彦氏や後藤淑氏（同）による遺跡踏査が行われ、遺跡地図の作成が進められた。その後 1960 年代には、桜井氏とともに平野吾郎氏ら早稲田大学考古学研究会によって静岡県西部から愛知県東部における縄文時代後・晩期の遺跡踏査が行われ、昭和 41 ～ 43 年には、静岡県浜松市天竜区水窪町の向市場遺跡や、設楽町内では神田中向遺跡（昭和 41 年 3 月）、神谷沢遺跡（昭和 42 年 3 月）、下谷（大名倉）遺跡（昭和 43 年 3 月）、麦田遺跡（昭和 43 年）において発掘調査と報告がなされている【桜井・平野 1966・1968・1971】。

早稲田大学による発掘調査は、段丘面の北端で行われ、道路を挟んで西側の A・B 区と東側耕作地の C 区でトレンチが設定されている（図 4）。A・B 区では黒色土などがみられたものの撹乱が及んでいたのに対し、C 区では礫の多い黒色土が堆積しており、同層から土器が多数出土したことから包含層と認識され、計 8 か所のトレンチ調査がなされている。土器の多くは縄文時代後期に相当する【平野 2005】。なお、この頃までは大字大名倉地内の字下谷をもって「下谷遺跡」と呼ばれていたが、昭和 43 年刊行の『北設楽郡史』からは「大名倉遺跡」の遺跡名に変更されている【岡田ほか 1968】。

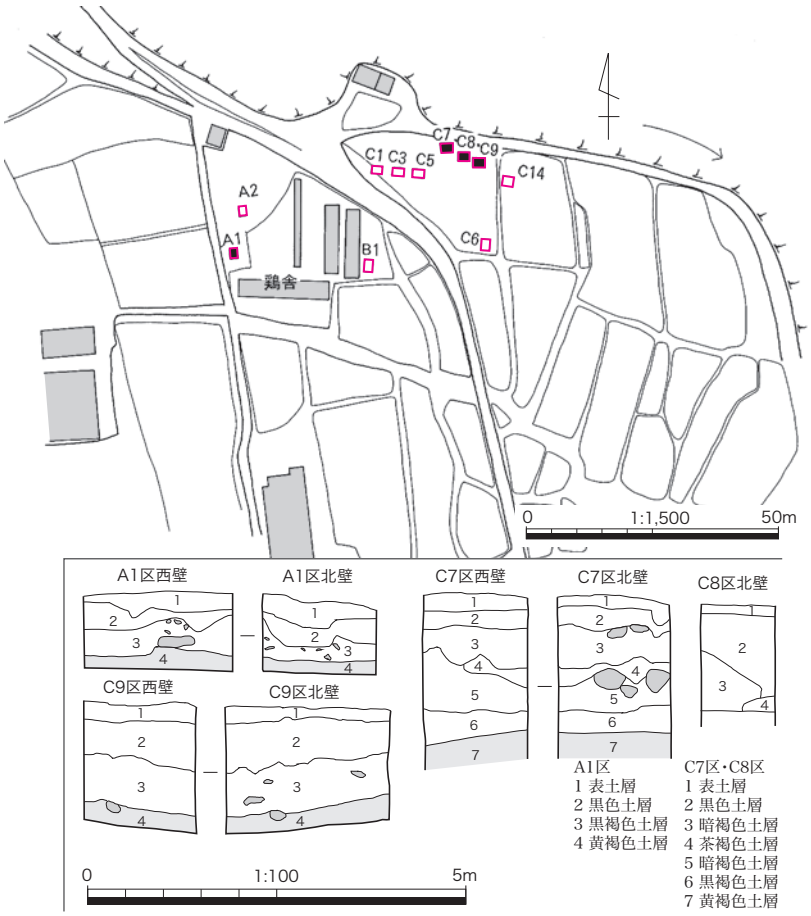


図 4　早稲田大学考古学研究会の発掘調査地点（平野 2005 を改変）

（3）愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査

『北設楽郡史』刊行から 30 年以上の間は、大名倉遺跡を含む設楽町内における考古学的調査の進展はなかった。しかし設楽ダム建設工事が具体化してくると、愛知県教育委員会は該当地域における詳細遺跡分布調査を行い、各遺跡の推定範囲を明示した遺跡地図を作成した【愛知県教育委員会 2007】。またそれと同じ頃から愛知県埋蔵文化財センターでは、国

土交通省からの委託事業として設楽ダム関連遺跡の範囲確認調査を開始した。大名倉遺跡では、平成 19・20・25 ～ 28 年度に実施されている。

範囲確認調査は、1m×2m を基本とするトレンチ（テストトレンチ =T.T.）によって、遺跡の各所を試掘していく調査手法である。大名倉遺跡における範囲確認調査は、構造物や土地利用の状況によって調査不能な地点以外で行われ、推定遺跡範囲約 53,300 ㎡に対して 223 地点のトレンチ（総計 516 ㎡）による調査がなされている（図 5）。

4．範囲確認調査の概要

範囲確認調査の目的は、主に地表面の地形観察と遺物散布状況から推定された遺跡の範囲をより明確化することにある。具体的には、(1) 遺構・遺物を検出し、遺構面と遺物包含層の所在と規模を明らかにすることと、(2) 可能な限り基盤層を検出して遺跡の原地形の理解につなげることの 2 者に重点が置かれる。特に (1) については、トレンチ調査の可能区域が限られることや撹乱などによって該当地点のみが滅失している場合もあるので、隣接するトレンチの調

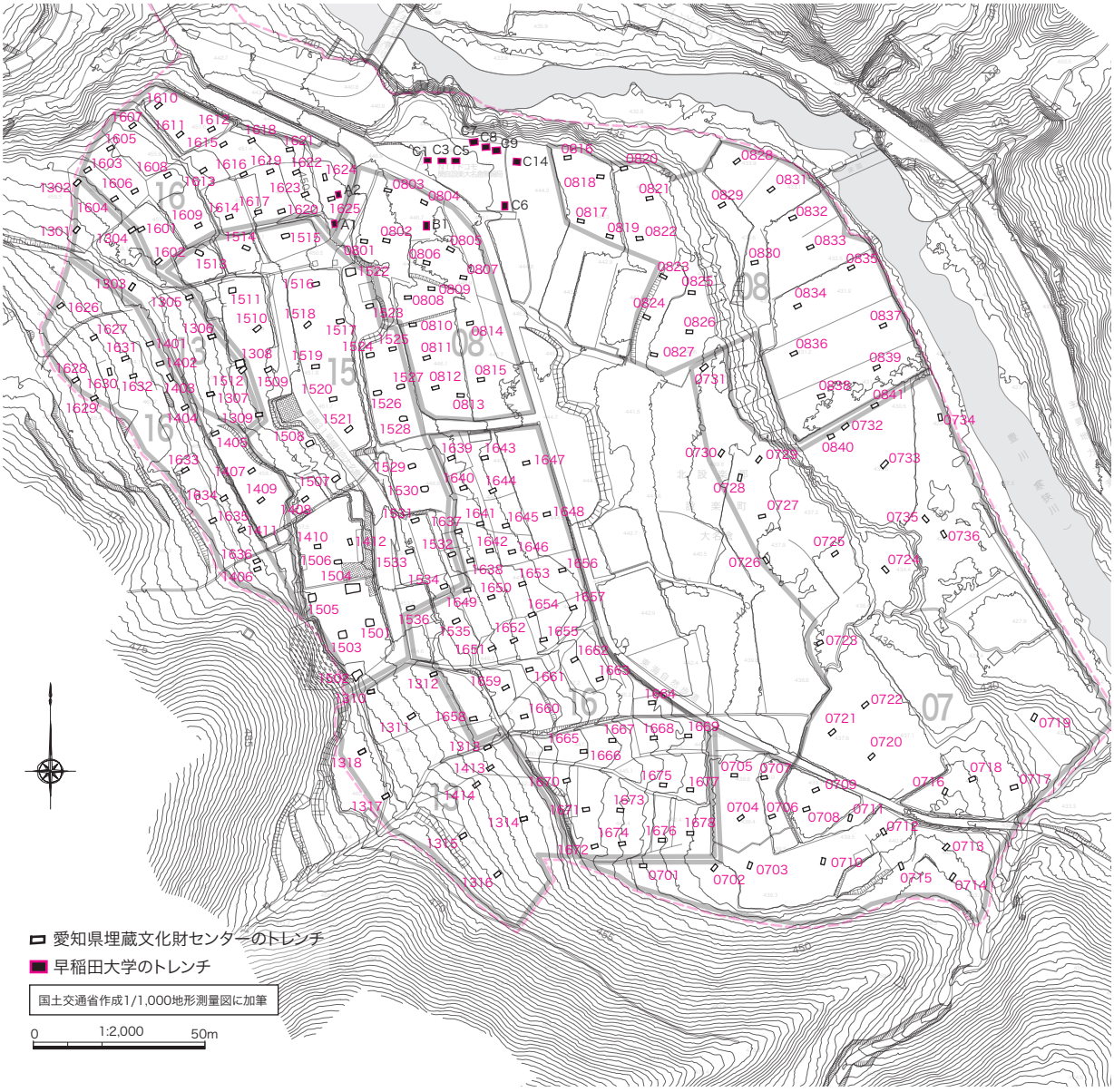


図 5　大名倉遺跡における発掘調査トレンチ配置

査成果を援用して状況を理解する必要がある。以下、年度ごとに概括する。なおトレンチ名は調査年（西暦下２桁）＋各年度の番号の４桁で表示している（表１・2）。

平成 19 年度　遺跡南端の丘陵端部から氾濫原を対象とし、出土遺物はわずかである。丘陵端部では基盤層面で湧水がよくみられる。また氾濫原は巨礫混じりの砂層となっている。

平成 20 年度　遺跡北部の段丘面と氾濫原を対象とし、段丘面では早稲田大学調査地点 B1 付近から多量の土器が出土している。土器はトレンチ上層からも多数みられるが、近世陶器も混じっているので後世の撹乱を受けている可能性が高い。それに対して砂質の段丘面基盤層直上の黒色・黒褐色土層は混入がないことから縄文時代の包含層と位置付けられる。

平成 25 年度　遺跡西部の斜面地が対象である。北端 (T.T.1301・1302) と南端（T.T.1311 ～ 1313）で土石流に関わる角礫主体の層がみられる。縄文土器は出土していない。

平成 26 年度　前年度と同様の地形が対象で、近世陶磁器の出土が目立つが、戦国時代の陶器も混じっている。

平成 27 年度　遺跡北西部の緩斜面地が対象である。当該地点は地表面から基盤層までが深くなる傾向にあり、耕作土・造成層下の黒色土層が数層に分かれる。その上層は礫が極端に少なく、対して下層では礫が多い。T.T.1515 では下層に掘り込まれた遺構とそれらを覆う上層の関係が明らかである。

平成 28 年度　遺跡の北端と中・南部が対象である。中部（T.T.1639 ～ 1657）は広範囲に削平されており、出土遺物もない。南部（T.T.1658 ～ 1678）は土石流堆積である。一方北端では土石流堆積は T.T.1603 ～ 1609 にとどまり、厚い黒色土が検出される傾向にあるが、平成 27 年度同様にその上部は比較的新しい時期の可能性がある。下層では早期の土器が出土し、T.T.1625 では土器埋設遺構から後期初頭の深鉢底部が出土している。　（永井邦仁）

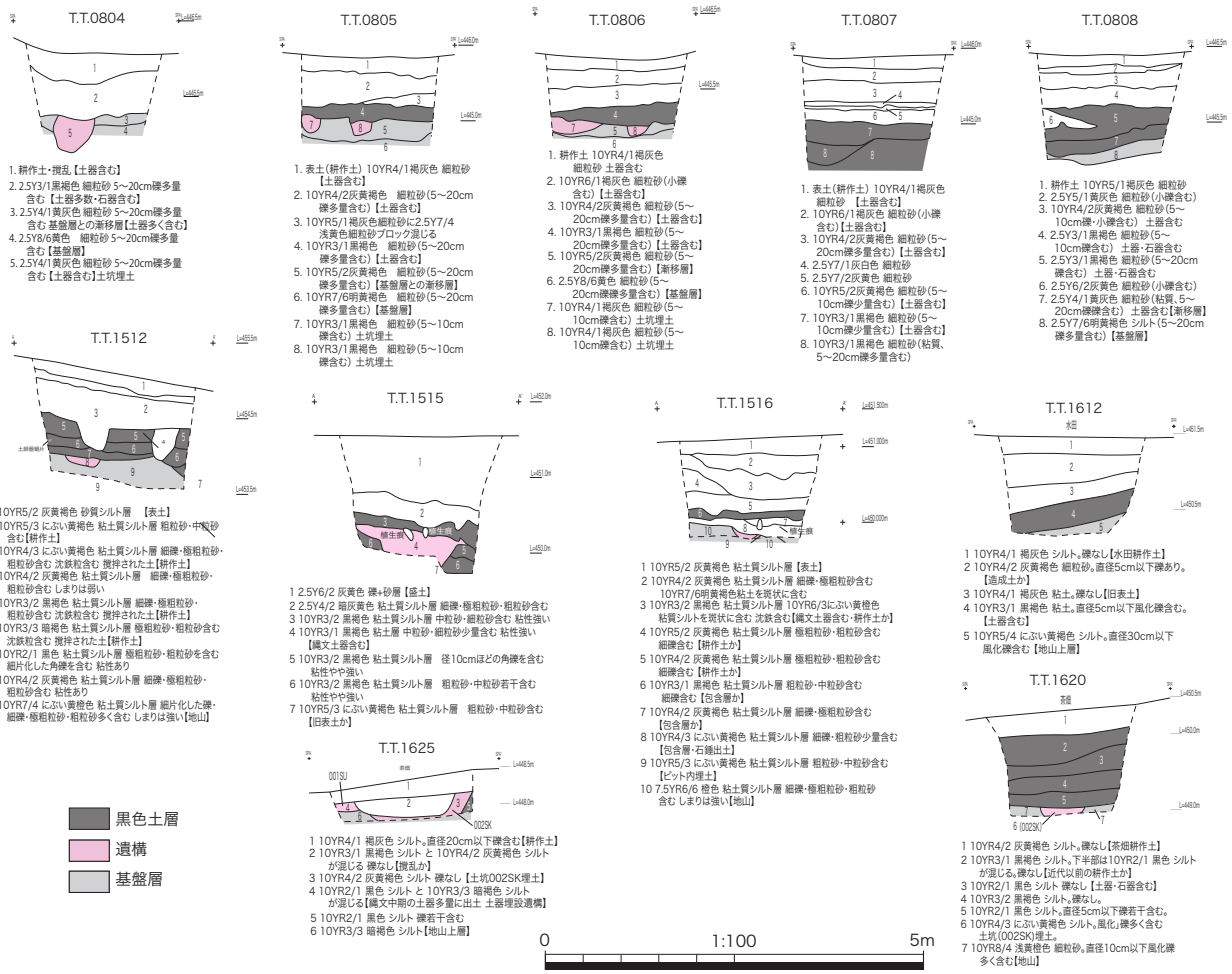


図６　主なテストトレンチの土層断面

表１　範囲確認調査トレンチ一覧（平成 19・20・25・26 年度）

T.T.	面積(㎡)	地表標高(m)	基盤層面標高(m)	遺構	遺物	基盤層(礫含む)	地形	土層概要
0701	2㎡	442.9	442.5	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端の谷	表土（灰オリーブ色シルト）+2層
0702	2㎡	440.1	439.6	なし	なし	灰黄色シルト,湧水	丘陵端の谷	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0703	2㎡	439.2	438.9	なし	なし	灰黄色シルト,湧水	丘陵端の谷	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0704	2㎡	439.2	438.8	なし	なし	にぶい黄色シルト,湧水	丘陵端の谷	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0705	2㎡	439.2	438.8	なし	なし	灰黄色シルト,湧水	丘陵端の谷	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0706	2㎡	438.4	438.0	なし	なし	灰黄色シルト,湧水	丘陵端の谷	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0707	2㎡	438.6	438.2	なし	なし	灰黄色シルト	丘陵端の谷	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0708	2㎡	437.7	437.1	なし	なし	灰黄色シルト	丘陵端の谷	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0709	2㎡	437.7	437.0	なし	なし	灰黄色シルト	丘陵端の谷	水田耕作土（褐灰色シルト）+2層
0710	2㎡	439.4	438.6	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端	水田耕作土（褐灰色シルト）+3層
0711	2㎡	438.7	438.4	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端の谷	表土（灰オリーブ色シルト）+1層
0712	2㎡	440.1	439.9	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端	表土（灰オリーブ色シルト）+1層
0713	2㎡	441.9	441.6	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端	表土（灰オリーブ色シルト）+1層
0714	2㎡	442.9	442.6	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端	表土（灰オリーブ色シルト）+1層
0715	2㎡	442.5	442.1	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端	表土（灰オリーブ色シルト）+1層
0716	2㎡	439.6	439.4	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端	表土（灰オリーブ色シルト）
0717	2㎡	440.1	436.9	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端	表土（灰オリーブ色シルト）
0718	2㎡	439.0	438.8	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端	表土（灰オリーブ色シルト）
0719	2㎡	433.5	433.3	なし	なし	浅黄色シルト	丘陵端	表土（灰オリーブ色シルト）
0720	2㎡	436.9	436.7	なし	なし	灰黄色シルト	谷地形	水田耕作土（褐灰色シルト）
0721	2㎡	436.9	436.1	なし	なし	灰黄色シルト,湧水	谷地形	水田耕作土（褐灰色シルト）+3層
0722	2㎡	436.9	436.7	なし	なし	灰黄色シルト	谷地形	水田耕作土（褐灰色シルト）
0723	2㎡	436.8	436.2	なし	なし	灰黄色シルト,湧水	谷地形	水田耕作土（褐灰色シルト）+2層
0724	2㎡	434.1	433.8	なし	なし	灰白色中粒砂	段丘崖	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0725	2㎡	436.7	435.8	なし	なし	灰黄色シルト,湧水	段丘崖	水田耕作土（褐灰色シルト）+2層
0726	2㎡	437.9	437.6	なし	土器片×2(常滑産赤物？)	灰白色中粒砂	谷地形	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0727	2㎡	437.7	437.4	なし	なし	灰黄色シルト	段丘面	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0728	2㎡	438.4	437.9	なし	なし	灰黄色シルト,湧水	段丘面	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0729	2㎡	438.2	437.9	なし	なし	浅黄色シルト	段丘面	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0730	2㎡	439.2	438.7	なし	なし	灰白色中粒砂	段丘面	水田耕作土（褐灰色シルト）+2層
0731	2㎡	439.8	439.1	なし	なし	灰黄色シルト	段丘崖,谷地形	水田耕作土（褐灰色シルト）+2層
0732	2㎡	430.4	430.0	なし	なし	灰白色中粒砂	氾濫原	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0733	2㎡	430.1	429.2	なし	なし	灰白色中粒砂	氾濫原	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0734	2㎡	429.3	429.1	なし	なし	灰白色中粒砂	氾濫原	畑耕作土（灰色中粒砂）＋1層
0735	2㎡	-	-	なし	なし	未検出,湧水	氾濫原	水田耕作土（褐灰色シルト）+1層
0736	2㎡	428.9	428.5	なし	なし	灰白色中粒砂	氾濫原	水田耕作土（褐灰色シルト）+2層
0801	2㎡	447.7	446.7	なし	磨石１	明黄褐色シルト	丘陵端	耕作土/造成土？
0802	2㎡	447.6	446.1	なし	土器７	（未検出）	丘陵端	耕作土/撹乱/黒褐色細粒砂(上は礫少なく遺物包含,下は礫多い)×2層
0803	2㎡	447.8	446.2	なし	縄文土器５	黄褐色細粒砂	段丘面	耕作土/黒褐色細粒砂(礫あり)/黄灰色細粒砂
0804	2㎡	445.3	445.2	土坑２	縄文土器×51（後期後半～晩期）,敲石×１,石器剥片×2	黄色細粒砂	段丘面	耕作土/黒褐色シルト(遺物多数包含,礫多い)/黄灰色細粒砂
0805	2㎡	445.9	444.8	土坑	縄文土器×5		段丘面	耕作土/造成土？(灰黄褐色細粒砂,遺物包含),黒褐色細粒砂(礫多い,遺物包含)
0806	2㎡	446.2	445.2	土坑	縄文土器×12(後期後半～晩期),近世陶磁器×1	黄色細粒砂	段丘面	耕作土/造成土?(遺物包含)/黒褐色細粒砂(礫多い,遺物包含),灰黄褐色細粒砂
0807	2㎡	446.1	444.6-	土坑	縄文土器×37,近世陶磁器×1,敲石×2	（未検出）	谷地形か	耕作土/造成土?(遺物包含)/黒褐色細粒砂(上は礫少なく遺物包含,下は礫多い)
0808	2㎡	446.8	445.3	なし	縄文土器×5,敲石×1,石器剥片×1	明黄褐色シルト	谷地形か	耕作土/造成土?(遺物包含)/黒褐色細粒砂(上は10cm以下礫,下は20cm以下礫,ともに遺物包含),黄灰色細粒砂
0809	2㎡	446.4	444.8	なし	縄文土器×53(後期後半～晩期),近世陶磁器×3,磨石敲石×4,石器剥片×5	（未検出）	丘陵端	耕作土/造成土(遺物包含)/黒褐色細粒砂(20cm以下礫,遺物包含)/オリーブ褐色細粒砂(10cm以下礫多い)
0810	2㎡	446.4	444.9	土坑	縄文土器×3,近世陶磁器×1,石核×1,石器剥片１	明黄褐色シルト	谷地形か	耕作土/黒褐色細粒砂/褐灰色細粒砂
0811	2㎡	446.2	445.2	土坑	なし	明黄褐色細粒砂	谷地形か	耕作土/造成土?/黒褐色細粒砂
0812	2㎡	446.5	445.4	土坑	近世陶磁器×3	明黄褐色細粒砂	谷地形か	耕作土/造成土?(近世包含)
0813	2㎡	446.2	445.0	土坑	なし	明黄褐色細粒砂	谷地形か	耕作土/造成撹乱?(黄灰色細粒砂)
0814	2㎡	445.3	444.0-	なし	縄文土器×2	（未検出）	段丘面か	耕作土/造成撹乱？/旧表土？（黒褐色細粒砂)
0815	2㎡	445.4	444.2	土坑	なし	明黄褐色細粒砂	谷地形か	耕作土/造成撹乱？（黄灰色細粒砂)
0816	2㎡	443.0	442.1	なし	磨石？×1	（未検出）	段丘崖	耕作土/造成土?
0817	2㎡	443.1	442.6	なし	縄文土器×3,石器剥片×1	明黄褐色細粒砂	段丘面	耕作土(削平地)
0818	2㎡	443.3	442.4	なし	なし	黄色細粒砂	段丘面	耕作土(削平地)
0819	2㎡	442.9	441.4	なし	縄文土器×7(晩期)	黄色細粒砂	段丘面	耕作土(削平地)
0820	2㎡	441.9	441.3	なし	縄文土器×1	黄色細粒砂	段丘崖	耕作土/巨円礫多い
0821	2㎡	441.7	440.9	なし	なし	灰白色細粒砂	段丘面	耕作土/巨円礫多い
0822	2㎡	441.6	441.0	土坑（礫抜痕？）	なし	黄橙色細粒砂	段丘面	耕作土(削平地)
0823	2㎡	441.4	440.7	なし	石核1	灰白色細粒砂	段丘面	耕作土/巨礫多い
0824	2㎡	441.1	440.4	なし	なし	明黄褐色シルト,湧水あり	段丘崖	耕作土/褐灰色細粒砂
0825	2㎡	440.8	440.2	なし	なし	灰白色細粒砂	谷地形	耕作土/巨礫多い
0826	2㎡	440.5	439.8	なし	なし	（未検出）,湧水あり	谷地形	耕作土/褐灰色シルト
0827	2㎡	440.7	440.1	なし	なし	（未検出）,湧水あり	谷地形	耕作土/褐灰色シルト
0828	2㎡	440.2	439.0	なし	なし	（未検出）	氾濫原	耕作土/オリーブ黄色細粒砂(巨円礫含む)
0829	2㎡	434.4	433.0	なし	縄文土器×3,近世陶磁器１	（未検出）,湧水あり	段丘崖	耕作土/灰オリーブ色細粒砂(巨円礫含む)
0830	2㎡	433.2	432.8	なし	なし	（未検出）,湧水あり	氾濫原	水田耕作土(削平地)
0831	2㎡	433.0	432.1	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/オリーブ色細粒砂
0832	2㎡	432.6	431.7-	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/灰オリーブ色細粒砂/灰白色中粒砂
0833	2㎡	432.4	431.0-	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/灰オリーブ色細粒砂/灰白色中粒砂
0834	2㎡	431.7	430.8-	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/灰オリーブ色細粒砂
0835	2㎡	431.9	431.0-	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/灰黄褐色細粒砂/黄褐色中粒砂(巨円礫含む)
0836	2㎡	431.3	430.3-	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/灰オリーブ細粒砂(巨円礫含む)
0837	2㎡	431.2	430.4-	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/暗黄灰色中粒砂(巨円礫含む)
0838	2㎡	430.8	429.5-	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/灰白色中粒砂(巨円礫含む)
0839	2㎡	447.9	446.8-	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/灰白色中粒砂(巨円礫含む)
0840	2㎡	430.4	429.4-	なし	土器×１	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/灰オリーブ色中粒砂(巨円礫含む)
0841	2㎡	430.4	429.5-	なし	なし	（未検出）	氾濫原	水田耕作土/にぶい黄橙色中粒砂(巨円礫含む)
1301	2㎡	460.5	459.7-	なし	なし	（未検出）	山崩れ	耕作土（黒褐色シルト）/灰褐色礫/黒色土
1302	2㎡	460.5	459.8-	ピット×2	なし	（未検出）	山崩れ	耕作土（黒褐色シルト）/灰褐色礫
1303	2㎡	460.6	460.3	なし	なし	粘土	小尾根	耕作土(黒褐色シルト)
1304	2㎡	457.7	456.8	なし	なし	粘土	谷地形？	耕作土(黒褐色礫)/黒色シルト
1305	2㎡	458.0	457.8	なし	近世陶器,現代磁器	粘土	丘陵端	耕作土(黒褐色シルト)
1306	2㎡	457.2	456.7	ピット	なし	粘土	丘陵端	耕作土(黒褐色シルト)
1307	2㎡	458.0	457.8	ピット×2	なし	粘土	丘陵端	耕作土(黒褐色シルト)
1308	5㎡	455.4	454.5	ピット、礎石？	礎石【地山直上】	粘土	丘陵端	耕作土(黒褐色シルト)
1309	2㎡	455.0	453.8	なし	なし	粘土	丘陵端	耕作土(黒褐色シルト)
1310	2㎡	456.5	456.3	ピット	近世磁器	粘土	丘陵端	耕作土(黒褐色シルト)
1311	2㎡	455.5	455.1-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	灰褐色礫/土石流堆積(礫多い)
1312	2㎡	453.4	452.7-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	灰褐色礫/土石流堆積(礫多い)
1313	2㎡	455.5	454.9	なし	なし	礫	丘陵端	灰褐色礫
1314	2㎡	452.7	452.5	ピット×3	近世磁器	粘土	丘陵端	灰褐色土
1315	2㎡	457.9	456.8	なし	近世陶器【灰黄褐色シルト層】	粘土	丘陵端	灰褐色土
1316	2㎡	455.6	455.2	落ち込み地形	なし	粘土	丘陵端	灰褐色土
1317	2㎡	460.0	459.7	ピット×2	なし	粘土	丘陵端	表土（黒褐色土）
1318	2㎡	460.0	459.6	土坑	近世陶磁器	粘土	丘陵端	表土（黒褐色土）
1401	2㎡	461.8	460.9	なし	近世陶磁器×1(美濃産染付19世紀),近代陶器×1（常滑産）	明黄褐色シルト	丘陵端	畑耕作土/黒褐色細粒砂
1402	2㎡	461.5	460.8	土坑1	近世陶磁器×3(瀬戸産こね鉢,美濃灯明皿,関西系白磁)	褐色シルト	丘陵端	畑耕作土/黒褐色細粒砂
1403	2㎡	461.4	460.7	なし	近世陶磁器×4(美濃産箱形湯呑,関西系染付皿,猪口)	褐色シルト	丘陵端	畑耕作土/黒褐色細粒砂
1404	2㎡	461.1	460.6-	なし	近世陶磁器×3(美濃産箱形湯呑,関西系染付碗)近代陶磁器×8点	（未検出）	丘陵端	畑耕作土/〆竹根により掘削不能
1405	2㎡	458.8	458.1	なし	戦国陶磁器×2(常滑産,土師器皿か),近世陶磁器×2(瀬戸産擂鉢,灰釉碗),近代陶磁器×5点,不明×2	褐色シルト	丘陵端	水田耕作土/造成土(灰白色粘土)
1406	2㎡	461.7	460.8	なし	なし	オリーブ褐色細粒砂	丘陵端の谷地形	耕作土/黄褐色細粒砂
1407	2㎡	458.6	458.0	なし	室町陶器×1(古瀬戸後期四耳壺),近世×2(関西系染付)	暗褐色細粒砂	丘陵端	水田耕作土/灰黄褐色シルト
1408	2㎡	456.2	454.6-	なし	なし	（未検出）	丘陵端の谷地形	灰黄褐色細粒砂/黄褐色細粒砂
1409	2㎡	458.5	458.0	なし	石器×1(大潟剥片),近世陶磁器×2(瀬戸産こね鉢18～19世紀、肥前産染付箱形湯呑),近代陶器×1	黄褐色シルト	丘陵端	水田耕作土/灰黄褐色細粒砂
1410	2㎡	455.4	453.7-	なし	近世陶磁器×1(瀬戸・美濃窯産染付広東茶碗19世紀)	（未検出）	丘陵端の谷地形	表土/黄褐色細粒砂
1411	2㎡	461.2	460.5	なし	なし	明黄褐色シルト	丘陵端	表土(褐色極細粒砂)/にぶい黄褐色細粒砂
1412	2㎡	455.2	453.5-	なし	なし	（未検出）	谷地形	表土(灰黄褐色シルト)ほか4層
1413	2㎡	452.9	452.4	なし	なし	黄褐色シルト	丘陵端	表土（褐色細粒砂)
1414	2㎡	454.9	454.8	なし	なし	黄褐色シルト	丘陵端	表土（褐色細粒砂)

表２　範囲確認調査トレンチ一覧（平成 27・28 年度）

T.T.	面積(㎡)	地表標高(m)	基盤層面標高(m)	遺構	遺物	基盤層(礫含む)	地形	土層概要
1501	4㎡	455.3	453.7-	なし	近代陶磁器	（未検出）	丘陵端	造成土/旧表土
1502	4㎡	455.3	454.2-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	造成土
1503	4㎡	457.0	455.3-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	造成土
1504	8㎡	455.2	454.0	なし	近世陶器,砥石	浅黄色粘質シルト	丘陵端	近世後半以降の耕作土
1505	2㎡	455.3	455.1	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	造成土
1506	2㎡	455.4	454.2	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	造成土/土石流堆積(10cm以上礫あり)
1507	2㎡	452.9	452.6	なし	近代陶磁器	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	表土/土石流堆積(10cm以上礫あり)
1508	2㎡	453.4	453.0	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	表土/土石流堆積(50cm以上礫あり)
1509	2㎡	453.6	452.6	なし	なし	にぶい黄橙色粘質シルト	丘陵端	表土/暗褐色粘質シルト/黒褐色シルト(礫少ない)
1510	2㎡	454.2	452.9-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	耕作土(造成土下旧耕作土)の下まで掘削達せず
1511	2㎡	454.3	453.7-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	表土_土石流堆積(10cm以上角礫多い)
1512	2㎡	455.1	454.0	なし	戦国土師器鍋	にぶい黄橙色粘質シルト	丘陵端	近世後半以降の耕作土/黒褐色シルト/暗褐色シルト(戦国期土器包含)/黒色粘質シルト
1513	2㎡	460.0	455.2-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	表土/造成土/土石流堆積
1514	2㎡	453.1	452.2-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	水田耕作土/造成土/旧耕作土/土石流堆積(50cm以上礫含む)
1515	2㎡	451.5	449.7-	なし	縄文土器	（未検出）	丘陵端	造成土/黒褐色粘質シルト(縄文土器包含)×4層
1516	2㎡	451.1	449.8	ピット2・土坑1（竪穴建物跡か）	縄文土器（中or後期）,打欠石錘,黒曜石剥片	橙色粘土質シルト	丘陵端	造成土/旧耕作土(縄文土器包含)/灰黄褐色シルト/黒褐色シルト(礫少ない)/にぶい黄褐色シルト(石錘包含)
1517	2㎡	451.1	449.6	土坑?1	石器	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	造成土/旧耕作土/にぶい黄褐色シルト(遺物包含)
1518	2㎡	451.1	450.3	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	造成土/旧耕作土？(黒褐色シルト)/にぶい黄褐色シルト
1519	2㎡	451.2	450.6	なし	なし	にぶい黄褐色粘質シルト	丘陵端	表土(灰黄褐色シルト)
1520	2㎡	451.1	450.2	なし	なし	にぶい黄褐色粘質シルト	丘陵端	表土(灰黄褐色シルト)/明褐色シルト/黒褐色シルト
1521	2㎡	451.1	450.2	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	表土(灰黄褐色シルト)/灰黄褐色シルト(10cm礫含む)
1522	2㎡	449.4	447.6	なし	近代陶器	灰白色砂	丘陵端	造成土/旧耕作土
1523	2㎡	449.2	447.7	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	造成土
1524	2㎡	447.7	446.2	なし	なし	（未検出）	丘陵端	攪乱
1525	2㎡	447.3	446.0	なし	縄文土器・近世陶器	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	造成土(灰黄褐色シルト)/黒褐色シルト(礫少ない,遺物包含)×2層
1526	2㎡	447.5	446.5-	なし	近世後半以降陶器	（未検出）	丘陵端	土坑状攪乱
1527	2㎡	447.3	446.2-	ピット1	縄文土器	（未検出）	丘陵端	造成土/黒褐色シルト(遺物包含)
1528	2㎡	447.3	446.7-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	造成土/旧耕作土/土石流堆積(50cm角礫多い)
1529	2㎡	448.6	447.8-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	造成土/土石流堆積(10cm以上礫多い)
1530	2㎡	448.5	448.3-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	攪乱/土石流堆積(10cm礫多い)
1531	2㎡	450.1	449.5-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり)
1532	2㎡	448.7	447.9-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり)
1533	2㎡	451.0	450.3-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり)
1534	2㎡	450.1	448.5-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり)
1535	2㎡	450.7	450.0-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり)
1536	2㎡	453.6	451.8-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	造成土/旧表土？
1601	2㎡	457.8	456.7	なし	近世後半陶器 【1層】	（未検出）	丘陵端	水田耕作土/造成土/旧表土
1602	2㎡	457.8	457.5	なし	なし	黄橙色粘土	丘陵端	水田耕作土/造成土
1603	2㎡	457.3	456.1	なし	なし	浅黄橙色粘土	丘陵端	茶畑耕作土/造成土/旧表土
1604	2㎡	457.5	456.5	なし	なし	浅黄橙色粘土	丘陵端	茶畑耕作土/造成土/旧表土
1605	2㎡	455.5	455.1	なし	なし	黄橙色粘土	丘陵端	茶畑耕作土/旧表土
1606	2㎡	456.3	455.7	なし	なし	浅黄橙色粘土	丘陵端	茶畑耕作土/旧表土
1607	2㎡	453.7	453.1	なし	なし	浅黄橙色粘土	丘陵端	茶畑耕作土/土石流堆積(50cm以下角礫多い)
1608	2㎡	454.5	453.8	なし	なし	黄橙色粘土	丘陵端	茶畑耕作土/造成土/旧表土
1609	2㎡	454.5	453.8	なし	なし	浅黄橙色粘土	丘陵端	茶畑耕作土/旧表土
1610	2㎡	451.5	451.2	なし	なし	浅黄橙色中粒砂	丘陵端	水田耕作土/造成土
1611	2㎡	451.5	450.9	なし	なし	浅黄橙色中粒砂	丘陵端	水田耕作土/造成土
1612	2㎡	451.5	450.4	土坑1、ピット1	縄文早期押型文土器×1、剥片 【4層】	にぶい黄褐色シルト	丘陵端	水田耕作土/造成土/旧表土/黒褐色粘土（遺物包含）
1613	2㎡	452.2	451.9	土坑×1,ピット×2	なし	黄橙色細粒砂	丘陵端谷地形	畑耕作土/黒褐色シルト(遺構埋土)
1614	2㎡	452.4	451.3	土坑×2	なし	黄橙色粘土	丘陵端	水田耕作土_旧表土/黒褐色粘質シルト(礫なし)/黒色粘質シルト
1615	2㎡	450.7	450.0	土坑	石器？	明黄褐色細粒砂	丘陵端	茶畑耕作土/造成土
1616	2㎡	450.9	450.4	なし	なし	にぶい黄橙色細粒砂	丘陵端谷地形	耕作土/旧表土
1617	2㎡	451.1	449.9	ピット×2	縄文土器？小片 【ピット】 縄文土器×2 【3層】	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/旧表土/黒褐色シルト(遺物包含)
1618	2㎡	449.6	449.1	ピット×1	なし	明黄褐色砂質シルト	丘陵端	耕作土/造成土
1619	2㎡	450.1	449.3		なし	明黄褐色砂質シルト	丘陵端谷地形	-
1620	2㎡	450.4	449.1	ピット1,土坑×1,落ち込み×1	縄文土器1点 【検出面】、縄文土器6点 【3層】、磨石？ 【3層】	浅黄橙色細粒砂	丘陵端谷地形	耕作土/黒色シルト(礫なし,遺物包含)
1621	2㎡	448.8	448.5	なし	なし	明黄褐色細粒砂	丘陵端谷地形	耕作土/造成土
1622	2㎡	449.2	448.9	ピット×5	なし	明黄褐色細粒砂	丘陵端谷地形	耕作土/黒褐色シルト(礫少ない)
1623	2㎡	449.1	448.5	ピット×1	縄文土器×1 【2層】,石器剥片	黄橙色細粒砂	丘陵端谷地形	耕作土/造成土/黒褐色シルト(礫なし)
1624	2㎡	448.2	448.0	ピット×2	なし	明黄褐色砂質シルト	丘陵端	耕作土
1625	2㎡	448.3	447.9	土器埋設遺構001SX	擂石？×1,剥片？×1 【1層】,縄文中期土器多数 【001SX】	暗褐色シルト	丘陵端	耕作土/黒色シルト(礫少ない,遺物包含,001SX)
1626	2㎡	465.2	465.0	なし	なし	黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土
1627	2㎡	465.0	464.9	なし	なし	黄橙色粘土	丘陵端	耕作土
1628	2㎡	468.1	467.8	なし	なし	黄橙色粘土	丘陵端	耕作土
1629	2㎡	466.9	466.3	なし	なし	黄橙色粘土	丘陵端	耕作土/造成土/灰黄褐色シルト(遺構)
1630	2㎡	464.8	464.1	土坑×2	近世～近代陶磁器×2	黄橙色粘土	丘陵端	耕作土/造成土/灰黄褐色シルト(遺構)
1631	2㎡	463.8	-	土坑×2	なし	黄橙色粘土	丘陵端	耕作土/造成土
1632	2㎡	463.8	462.7	土坑×1	近世磁器×1 【2層】	（未検出）	丘陵端	耕作土/造成土
1633	2㎡	462.6	462.2	なし	近代磁器×1 【1層】	黄橙色粘土	丘陵端	耕作土
1634	2㎡	460.6	459.7	なし	近世陶器×1 【2層】	黄褐色粘土	丘陵端	耕作土/造成土/旧表土
1635	2㎡	462.6	461.3	なし	戦国陶器×1(瀬戸・美濃窯産端反皿) 【1層】	にぶい黄褐色シルト	丘陵端	耕作土/造成土/角礫多い土石流堆積
1636	2㎡	461.0	-	なし	近世？陶器 【1層】	（未検出）	丘陵端谷地形	耕作土/造成土/角礫多い土石流堆積/沢地形の堆積
1637	2㎡	448.0	447.4	土坑×1	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/旧表土
1638	2㎡	448.0	447.4	土坑×3	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/旧表土/灰黄褐色シルト(遺構)
1639	2㎡	447.0	446.2	なし	近世陶器	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土
1640	2㎡	447.1	446.5	ピット×2	近世陶器 【1層】	明黄褐色シルト	丘陵端	耕作土/造成土/旧表土
1641	2㎡	477.0	476.4	ピット×1	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/旧表土
1642	2㎡	447.0	446.4	溝×1	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/旧表土
1643	2㎡	445.8	445.1	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土/旧表土
1644	2㎡	446.0	445.5	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土
1645	2㎡	446.1	445.3	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土/旧表土
1646	2㎡	446.3	445.6	土坑×1	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土/旧表土
1647	2㎡	444.4	443.6	ピット×4	なし	明黄褐色粘土	丘陵端	耕作土/黒褐色粘質シルト(礫なし)
1648	2㎡	444.4	443.7	溝×1	なし	明黄褐色粘土	丘陵端	耕作土/黒褐色粘質シルト(礫なし)
1649	2㎡	449.2	448.5	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土/黒褐色粘質シルト(礫多い,下方で現代のタイル)
1650	2㎡	448.4	447.7	なし	近世～近代磁器 【2層】	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土/黒褐色シルト(礫多い)
1651	2㎡	449.0	448.5	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土
1652	2㎡	447.9	447.6	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土
1653	2㎡	446.5	445.8	なし	なし	明黄褐色シルト	丘陵端	灰黄褐色シルト(礫なし)
1654	2㎡	446.7	446.2	なし	なし	明黄褐色シルト	丘陵端	灰黄褐色シルト(礫なし)
1655	2㎡	446.5	446.1	なし	なし	明黄褐色シルト	丘陵端	灰黄褐色シルト(礫なし)
1656	2㎡	444.8	444.0	なし	なし	（未検出）	丘陵端	-
1657	2㎡	444.8	444.4	なし	なし	明黄褐色シルト	丘陵端	灰黄褐色シルト(礫なし)
1658	2㎡	452.5	452.3	なし	なし	にぶい黄橙色シルト	丘陵端	灰黄褐色シルト(礫なし)
1659	2㎡	449.5	448.9	なし	なし	明黄褐色シルト	丘陵端	茶畑耕作土/灰黄褐色シルト(礫なし)
1660	2㎡	450.3	449.1	なし	近世～近代陶磁器	明赤褐色シルト	丘陵端	灰黄褐色シルト/5cm以下礫多い沢の堆積/60cm以下礫多い土石流堆積
1661	2㎡	448.3	-	なし	なし	（未検出）	丘陵端	茶畑耕作土
1662	2㎡	446.1	445.5	なし	なし	明赤褐色シルト	丘陵端	耕作土/灰黄褐色細粒砂(礫多い)
1663	2㎡	445.4	444.8	なし	なし	明黄褐色細粒砂	丘陵端	耕作土/鈍い黄褐色中粒砂(20cm以下角礫多い)
1664	2㎡	442.9	442.3	なし	なし	にぶい黄褐色シルト	丘陵端	土石流堆積(20cm以下角礫多い灰黄褐色細粒砂)/灰黄褐色シルト(礫なし)
1665	2㎡	448.3	448.0	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土
1666	2㎡	446.6	445.6	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/土石流堆積(15cm以下角礫多い)
1667	2㎡	445.3	444.1	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/土石流堆積(15cm以下角礫多い)
1668	2㎡	443.0	442.3	なし	近世～近代陶磁器	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/土石流堆積(20cm以下角礫多い)
1669	2㎡	441.6	440.9	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/土石流堆積(20cm以下角礫多い)
1670	2㎡	446.9	445.9	なし	近世～近代陶磁器	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/土石流堆積(15cm以下角礫多い)
1671	2㎡	445.7	445.2	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土
1672	2㎡	445.5	445.1	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/造成土
1673	2㎡	443.9	443.1	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/土石流堆積
1674	2㎡	443.8	443.3	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土
1675	2㎡	442.6	441.6	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/土石流堆積
1676	2㎡	441.9	441.3	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/土石流堆積
1677	2㎡	441.5	440.8	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土/土石流堆積
1678	2㎡	440.9	440.5	なし	なし	明黄褐色粘質シルト	丘陵端	耕作土

5．範囲確認調査出土遺物について

ここでは、大名倉遺跡の出土遺物について、範囲確認調査資料を中心に報告する。

表３は、範囲確認調査出土資料すべての集計結果をトレンチ（以下 T.T.）別に示したものである。集計に際しては、土器・陶器は、時代別に点数と総重量を示している。出土点数が多いところは、黒塗りに白文字で記し、点数は少ないものの大型破片が出土したところには赤字で示した。石器については、器種と出土点数を示した。

T.T.0802 ～ 0809 では、集中して縄文時代後期中葉～後葉の土器が出土している。その一方で、T.T.1516 や 1625 では、中期後半～後期初頭の遺物の出土がまとまっており、周囲の試掘坑でも早期前半～後期初頭までの土器片が大型破片の状態で出土している。剥片や磨石敲石類など縄文時代の石器の出土も、この縄文土器の出土傾向と合致する。

中世から近世（近世でも前半期か）の遺物も散在的に確認できている。これらは、平成 25・26 年度調査で多くまとまって見つかっている。

以下、縄文時代の資料を中心に、出土遺物の報告を行う。

（A）縄文土器

T.T.0802 出土資料（図７　1）

深鉢胴部片で器壁厚は６～ 7mm である。器面表には横方向に巻貝条痕、裏にも斜方向に巻貝条痕が認められる。縄文時代後期中葉～晩期前半の土器片であるが、後期後葉に属する可能性が高い。

T.T.0804 出土資料（図７　2 ～ 31）

深鉢の口縁部片（4 ～ 8）、胴部片（2・3・9 ～ 29）、底部片（30・31）で、胴部片では器壁厚は６～ 8mm である。

2・3 は土坑 A 出土資料である。器面には表裏ともに、ナデ・ミガキが認められる。3 は胴部下半に当たるものか。4 は土坑 B 出土資料である。深鉢口縁部片で、上端には面取りが、端部内面には段の形成が認められる。表面は器面の剥落が著しく調整などは確認できないが、裏面はナデ・ミガキである。いずれも縄文時代後期の資料になると思われるが、5 ～ 31 よりも古相になるかもしれない。

5 ～ 31 は包含層出土資料である。器壁厚は胴部で７～ 9mm 程度であり、いずれにも表裏に巻貝条痕が認められる。5 ～ 8 の口縁部資料では横方向に、胴部に向かっていくにつれて縦あるいは斜方向の調整方向となる。文様が確認できるものは、9 のみと極めて少ない。9 は口縁部に近い部分と考えられるが、横方向に 3 条の凹線が施されている。凹線は幅 5mm 程度と細く、内部にはナデなどは認められない。底部の周囲にはオサエが施されており、作り出すような形状を呈する。9 は後期末の神谷沢・伊川津式の段階と考えられ、その他の破片も後期後葉～末頃のものと考えられる。

T.T.0805 出土資料（図８　32 ～ 34）

いずれも深鉢で、32 は口縁部片、33・34 は胴部片である。器壁厚は 32・24 が７～ 9mm であるが、33 のみ 12mm 程度のところもあり、やや厚手である。器面にはやや不明瞭ではあるが、巻貝条痕調整が残されている。縄文時代後期中葉～晩期前半に属するもので、後期後葉～末に属する可能性が高い。

T.T.0806 出土資料（図８　35・36）

35 は深鉢片で、胴部下半でも底部付近と考えられる。器壁厚は 20mm 超える部分もある。器面の文様・調整は表裏とも不明瞭であるが、胎土はやや粗く、繊維を含む。縄文時代早期に属するものと考えられる。

36 は胴部片で、器壁厚は 7mm 程度である。器面表裏には横方向に巻貝条痕が認められる。縄文時代後期後葉～末のものであろう。

T.T.0807 出土資料（図８　37 ～ 45）

いずれも深鉢で、37 ～ 40 は口縁部片、41 ～ 44 は胴部片である。37 は口縁端部上面に平坦面が形成されるもので、器壁厚が 10mm を超える。器面表裏には、ナデ・ミガキ調整が施される。38 ～ 44 は器壁厚が７～ 9mm で、器面表裏には横方向を主体として巻貝条痕が施されている。45 は底部で、器面にはナデやオサエ痕が認められる。底面の残存はごく一部であるが、編組製品圧痕を確認することができる。38 ～ 44 は縄文時代後期後葉～末のものと推

表３　大名倉遺跡範囲確認調査 試掘坑別出土状況一覧

調査年	TTNo.	遺構	縄文時代						中世～戦国期	中世～近世	近世以降	石器
			早期前半	早期後半	中期後半～後期初頭	後期中葉～後葉（後葉主体）	縄文不明	縄文晩期？	陶器	ナベ	陶器・磁器	
08	01											磨石敲石類 1
08	02					7【38.2g】						
08	03					5【15.9g】						
08	04	○				51【405.4g】						破片 2・磨石敲石類 1
08	05					10【45.2g】						
08	06			1【27.5】		12【41.9g】					1【0.9g】	
08	07					37【198.8g】					1【4.1g】	磨石敲石類 2
08	08			1【6.2g】		4【25.4g】						大型剥片 1・磨石敲石類 1
08	09					54【524.6g】					3【16.3g】	スクレイパー 2・剥片 2・大型剥片 1・磨石敲石類 4
08	10						3【7.9g】				1【2.2g】	剥片 1・大型剥片石核 1・石皿台石類 1
08	12								1【7.7g】		2【6.3g】	
08	14						2【6.8g】					
08	16											磨石敲石類 ?1
08	17						3【8.4g】					剥片 1
08	19					1【4.2g】	6【9.8g】					
08	20						1【2.6g】					
08	29					2【63.2g】	1【3.0g】			1【3.7g】		
08	40										1【1.9g】	
13	05										5【113.3g】	
13	08											砥石 1
13	10										1【1.2g】	
13	14										1【4.2g】	
13	15									1【43.4g】		
13	18										6【46.1g】	
14	01										2【41.6g】	
14	02										4【71.3g】	
14	03										6【28.0g】	
14	04										10【48.8g】	
14	05									1【19.4g】	11【140.4g】	
14	07								1【60.7g】		2【4.4g】	
14	09										7【76.5g】	
14	10										2【25.4g】	
14	14									1【4.0g】	1【4.4g】	
15	01										1【2.3g】	
15	04										1【17.6g】	砥石 2
15	07										2【56.0g】	
15	12									4【40.7g】		
15	15				2【8.7g】							
15	16	○		1【8.9g】	23【139.5g】							剥片 2・打欠石錘 1
15	17				2【8.2g】							礫器 1
15	21										1【27.9g】	
15	22										1【31.2g】	
15	25				1【8.7g】						7【40.8g】	
15	26										3【15.4g】	
15	27				2【8.1g】						10【122.6g】	
16	01										1【4.5g】	
16	12		1【150.0g】									剥片 1
16	17				2【11.9g】							
16	20			2【21.7g】	2【13.6g】		3【15.7g】					磨石敲石類 1
16	23				1【5.8g】							剥片 1
16	25	○			118【943.3g】			1【12.7g】				剥片 1・磨石敲石類 1
16	30										2【85.6g】	
16	32										1【8.8g】	
16	33										4【10.1g】	
16	34										1【6.0g】	
16	35								1【3.1g】			
16	36										3【83.2g】	
16	39										1【1.2g】	
16	40										1【17.1g】	
16	50										1【2.5g】	
16	60										1【3.6g】	
16	68										1【3.3g】	
16	70										2【4.3g】	

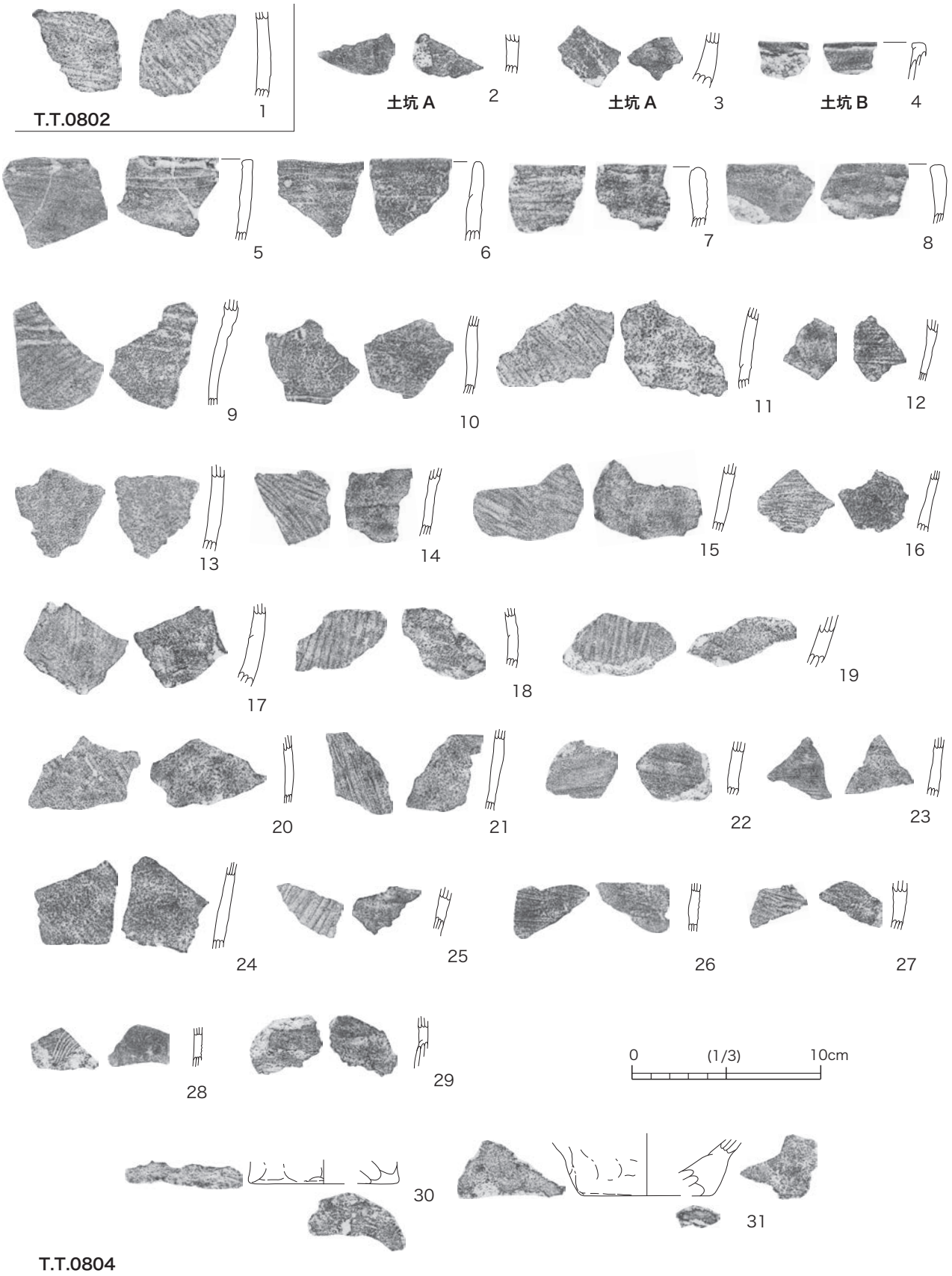


図 7　大名倉遺跡出土縄文土器 1

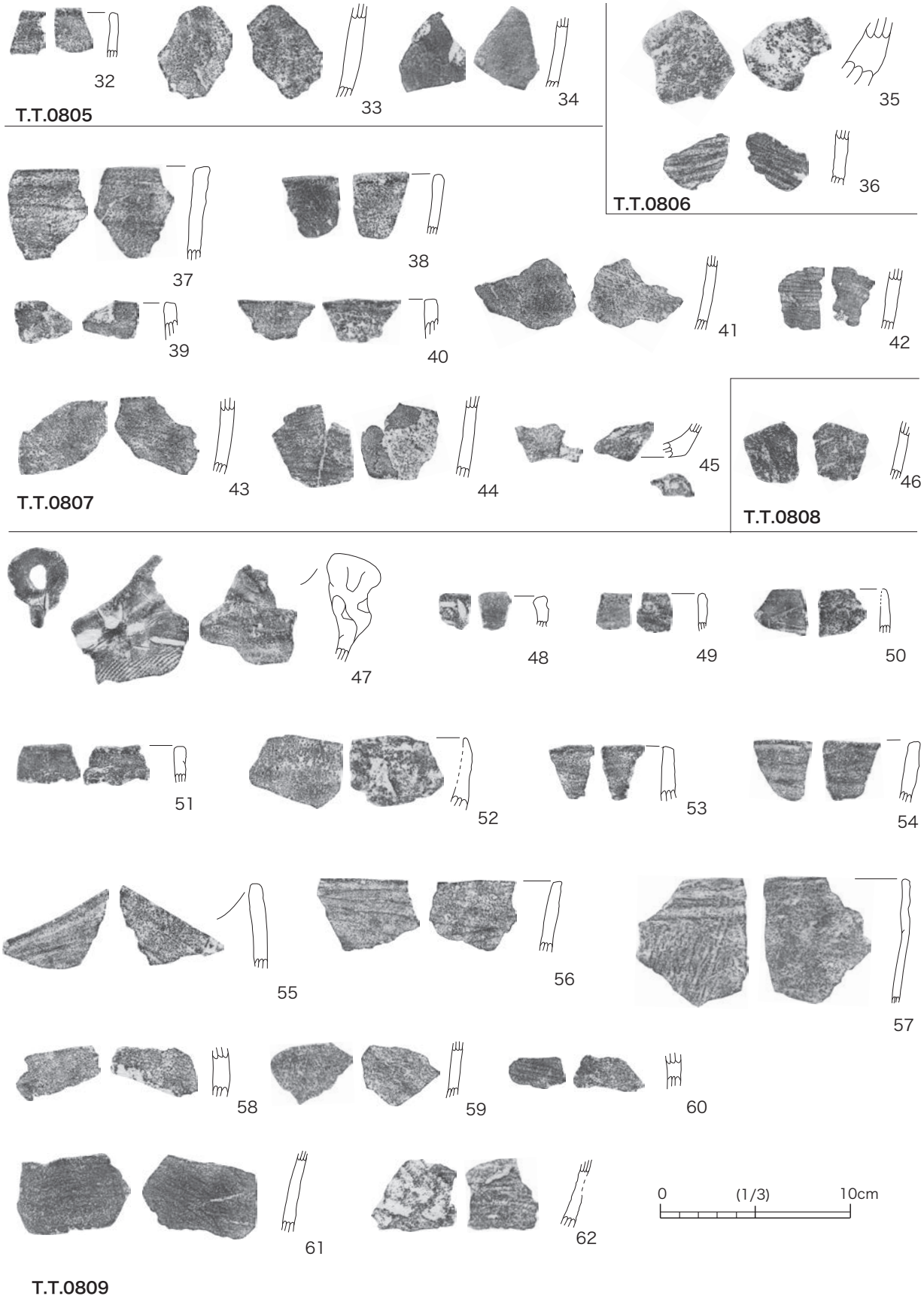


図８　大名倉遺跡出土縄文土器２

測されるが、37 は後期中葉などより古相のものかもしれない。

T.T.0808 出土資料（図 8　46）

深鉢胴部片で、器壁は 6mm 程度であるが、表裏ともに保存状態が良くない。胎土には繊維を含む土器であり、縄文時代早期に属するものと考えられる。

T.T.0809 出土資料（図 8・8　47 ～ 72）

47 は深鉢口縁部片で、環状の突起が斜め方向に貼り付けられたものである。突起は二重の輪が重なったように付けられたものであり、根元部分にはボタン状の貼り付けも認められる。沈線による区画のなかに、縄文 LR が施されている。縄文時代後期中葉の八王子式に伴う精製深鉢と考えられる。48 も深鉢口縁部片である。器壁厚は 8 ～ 10mm、端部上面には面取りがなされている。表には横方向の沈線区画内に縄文 RL が施されているが、横沈線の切れ目に、斜め方向に短い沈線がみとめられる。これは逆ハの字に展開するものであれば、47 同様に八王子式の精製深鉢であると考えられる。49 ～ 52 は深鉢口縁部片である。器面表裏にはナデ・ミガキ調整が施されているもので、後期中葉頃のものと推定される。

53 ～ 66 は器面表裏に巻貝条痕が施されているものである。器壁厚は 8 ～ 10mm 程度のものが多いなか､57 のみ 7mm 程度と薄手である。また、調整方向も横方向が多いなか、57 のみ表は縦あるいは斜方向である。57 には内側に工具痕を残した状態の巻貝凹線がある。これらは、後期後葉に属するものであるが、57 は神谷沢 I 式に当たるものと考えられる。

67 ～ 71 は深鉢胴部片で、器壁厚は 69 が 7mm 程度、その他が 10mm 程度である。器面表裏にはナデやケズリ痕があり、縄文時代後期～晩期に属するものと考えられる。

72 は壺あるいは注口土器の胴部片である。器面表面はナデ･ミガキが施され、内面はナデ･オサエなどの痕跡が確認できる。この範囲確認調査出土資料では、この器種は唯一の資料である。田口中学校生徒による表面採集資料および早稲田大学調査資料でも、注口部をはじめとして注口土器が一定量含まれている（写真 1）。

写真 1　大名倉遺跡出土の注口土器
（設楽町奥三河郷土館所蔵、上：伊藤正松氏採集資料、
下：早稲田大学発掘調査資料）

T.T.0819 出土資料（図 9　73）

73 は鉢胴部で、器壁厚は 8mm 程度、胎土は緻密である。器面表には細い棒状工具による細かい連続刺突のある沈線と縄文 LR が施されている。裏はナデ・ミガキ痕が認められる。縄文時代後期中葉以降の精製鉢と考えられる。

T.T.0829 出土資料（図 9　74・75）

74 は深鉢口縁部で、端部が外反気味に尖る形状を呈し、器壁厚は最大 12mm 程度となる。器面表の調整は不明瞭ではあるが、裏には横方向にナデあるいは条痕が認められる。縄文時代後期～晩期のなかでも、晩期前半に属する可能性があるか。75 は深鉢胴部片である。器面表は縦方向にナデ・ミガキ、裏には横方向にナデやケズリの痕跡が痕察される。縄文時代後期～晩期のものと考えられる。

平成 20 年度表面採集資料（図 9　76 ～ 82）

76 は深鉢胴部片で、器壁厚は 7mm 程度と薄手で、胎土が緻密なものである。器面はミガ

キ調整を主体として、表には沈線区画に縄文LRが施されている。後期中葉八王子式以前のものと推定される。77は深鉢胴部破片で、胴部中央部付近に当たるか。屈曲上には横方向に太沈線が、さらに沈線間には縄文LRが施されている。後期中葉の八王子式から西北出式・蜆塚KII式（蜆塚III式）までに相当するものと考えられる。78は深鉢口縁部片で、器面表裏には巻貝条痕調整が施されており、表には横方向に浅い凹線が施されている。凹線は浅いものの、中にはナデ調整が施されてはいない。79・80は深鉢口縁部片である。器面両面には横方向にナデ・ミガキ調整が施されている。縄文時代後期前葉以降のものと考えられるが、一方、81・82には器面表裏には巻貝条痕調整が施されている。縄文時代後期後葉～末に属するもの

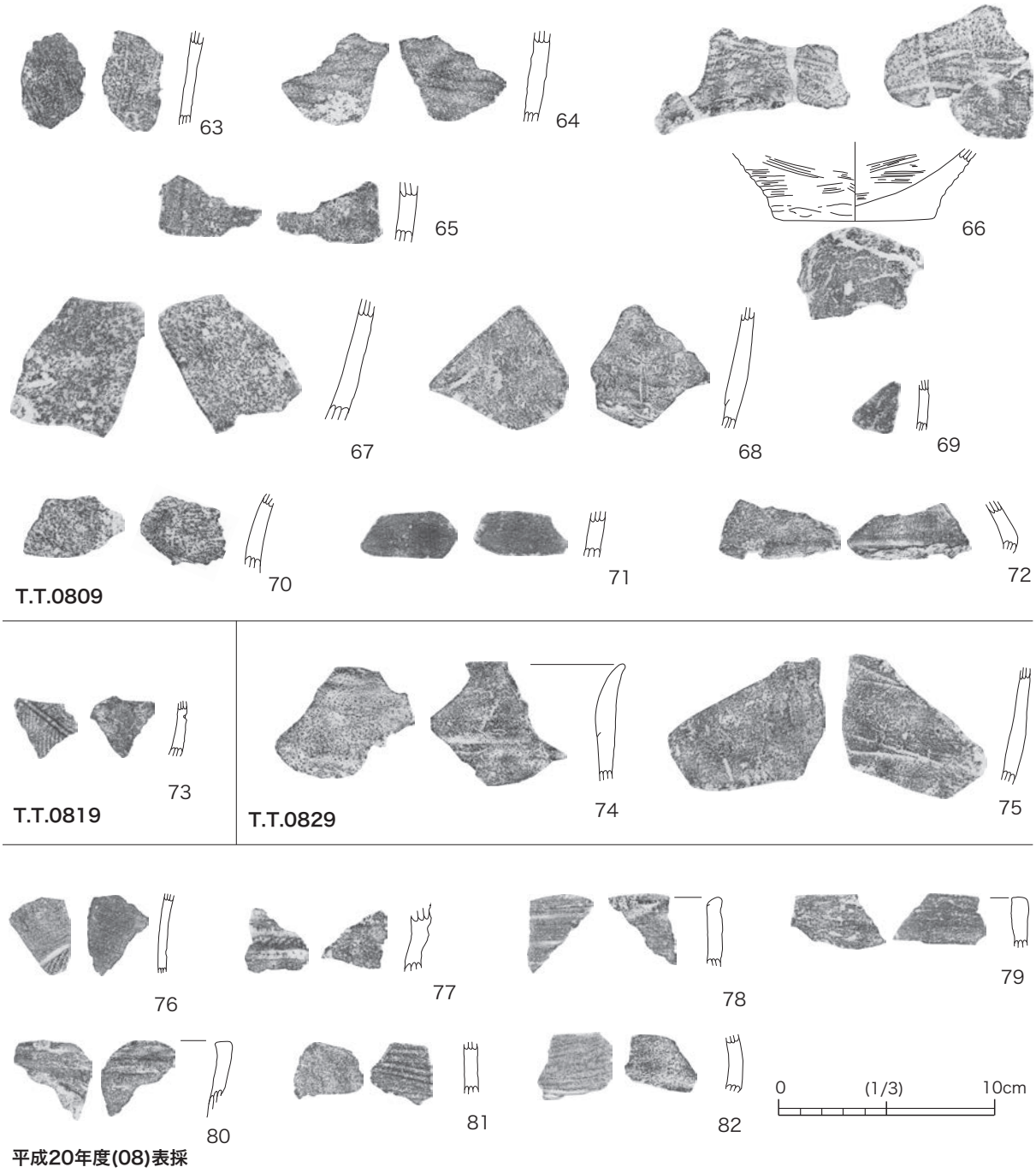


図9　大名倉遺跡出土縄文土器3

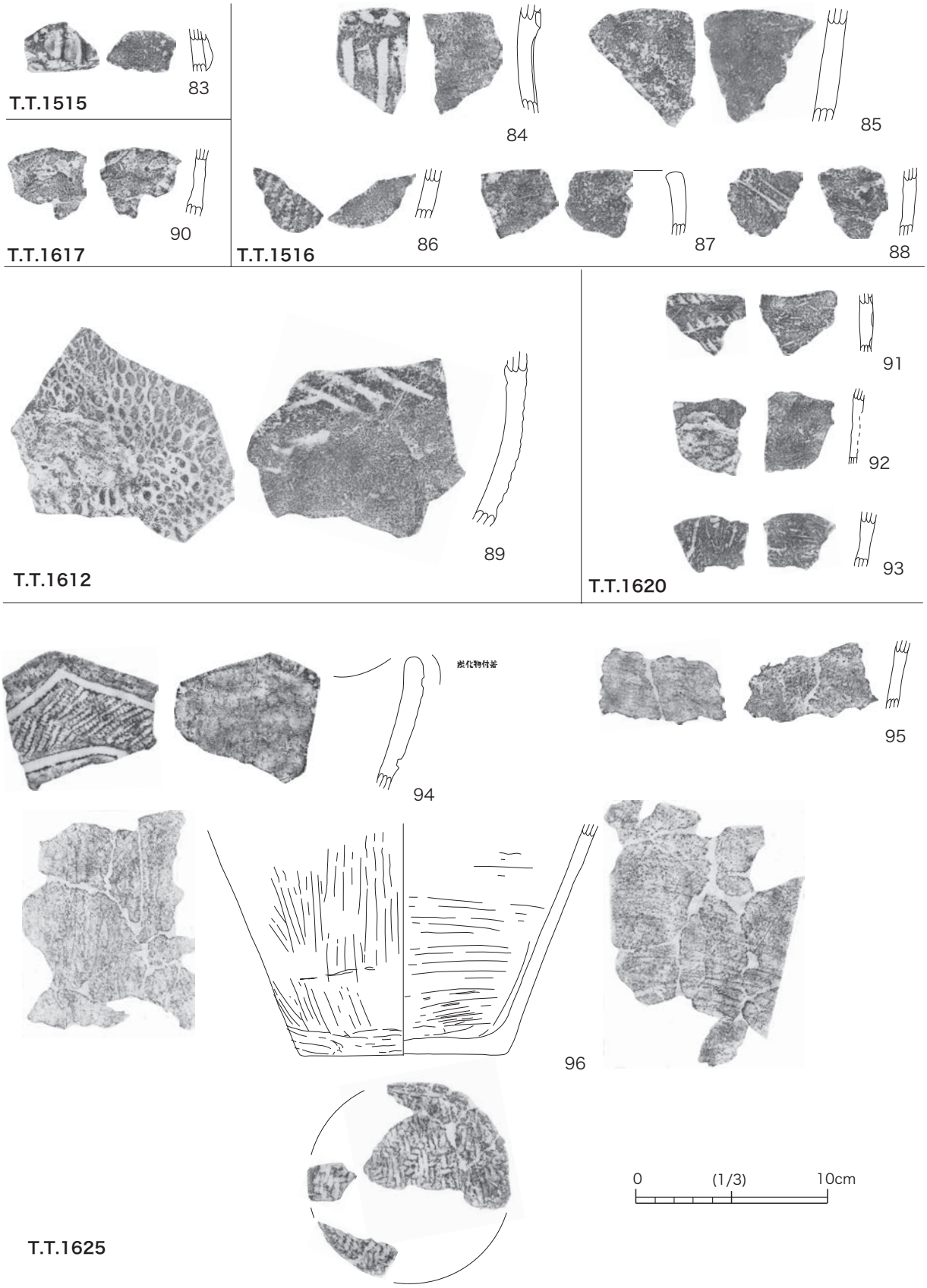


図 10　大名倉遺跡出土縄文土器 4

と考えられる。

T.T.1515 出土資料（図 10　83）

深鉢胴部片で、小さい破片と保存状況は良好ではない。器面表には縦方向に短い貼付隆帯が連続して確認できる。北屋敷式など、縄文時代中期中葉に属するものと考えられる。

T.T.1516 出土資料（図 10　84 ～ 88）

84 ～ 86・88 は深鉢胴部片、87 は深鉢口縁部片である。いずれも器壁厚さが 10mm を超えるものである。84 は胴部上半で、横方向に連続刺突の施された貼付隆帯があり、その直下から太沈線が垂下する。この土器の類例は、岡崎市車塚遺跡 09 区 1739SP 出土資料にあり【池本編 2015】、縄文時代中期後葉の島崎 III 式～山の神 I 式に属するものと考えられる。85 は器面には表裏ともにナデ調整が残されているものである。86 は器面表に縄文 LR が施されているものである。87・88 はこのトレンチ掘削の最下層から出土した資料である。87 は表裏ナデ調整で、縄文時代中期後半の深鉢片か。88 は器面表裏には二枚貝と思われる条痕調整があり、表にはあたりの浅い平行沈線が認められる。胎土には繊維が含まれており、縄文時代早期後半に属するものと考えられる。

T.T.1612 出土資料（図 10　89）

土器の出土は、このトレンチ調査で 4 層とされた、89 の 1 点のみであるが、大型破片であり、状態は良好である。深鉢胴部中央部付近で、器壁厚は 15mm ほどあり、胎土には繊維を含む。器面表にはポジティブな楕円押型文が認められるもので、裏面には斜行する平行沈線がある。縄文時代早期前半の高山寺式の古相にあたるものと考えられる。

T.T.1617 出土資料（図 10　90）

胴部片でした下半部の資料であろうか。器面表裏にはナデやオサエなどの痕跡が認められる。縄文時代中期頃のものとも思われるが、詳細な時期は特定し得ない。

T.T.1620 出土資料（図 10　91 ～ 93）

いずれも深鉢胴部片であり、91・93 は器壁厚は 10mm 程度で胎土に繊維を含む。92 は器壁厚 8mm ほどである。91 には器面表裏には条痕調整があり、表面には爪形をした連続刺突列が少なくとも 3 条認められる。92 も器面表裏には条痕調整があり、表面には浅い波状の沈線が施されてる。いずれも縄文時代早期後半に属するものであり、91 は石山式に比定されると考えられる。

T.T.1625 出土資料（図 10・11　94 ～ 100）

94 ～ 96 は埋甕の可能性のある土器埋設遺構使用土器である。すべて同一個体由来のもので、94 は口縁部、95 は胴部上半、96 は胴部下半から底部に当たる。器壁厚は 10mm 前後であり、口縁部はやや肥厚気味である。器面調整はナデ・ミガキが施されており、口縁部から胴部上半はヨコ方向に、胴部下半は外面のみ縦方向を主体とする。94 には、外面に太沈線区画内に縄文 LR の充填が認められる。底面には編組製品圧痕があり、木目ゴザ目組みの可能性がある。時期は、縄文時代後期初頭の中津・称名寺式のものと考えられる。97・98 は深鉢胴部片で、器壁厚は 8mm 程度である。器面表裏にはナデ調整が認められる。97 の外面には 2 条沈線による細長い区画が斜方向でつながりながら横方向に展開するようにも見える。これも縄文時代後期初頭の中津・称名寺式のものと考えられる。99 は深鉢口縁部片で、器面表裏には巻貝条痕調整があり、端部上面には細い工具（これも巻貝工具の可能性がある）による連続刺突列が施されている。器面表裏にはいわゆる半截竹管工具（これも巻貝工具）による弧状沈線と刺突列がある。縄文時代晩期前半に属する可能性がある。100 は深鉢底部である。底部に編組製品圧痕があり、1 本越え・1 本潜り・1 本送りの網代組みである。

(B) 石器（縄文時代）

縄文時代の石器では、スクレイパー・剥片・礫器もしくは大型剥片石核・大型剥片・打欠石錘・磨石敲石類の出土をみた（図 12）。

102・103 はスクレイパーである。102 は横長に作出された剥片で、端部の表面に連続した二次加工が施されたものである。103 も横方向に剥片を剥がしとられて残った方を使用しており、石核石器状の様相を呈する。端部に二次加工により連続した剥離が施されている。102・103 とも石材は安山岩で、T.T.0809 出土である。

104 は黒曜石の剥片である。今回の範囲確認

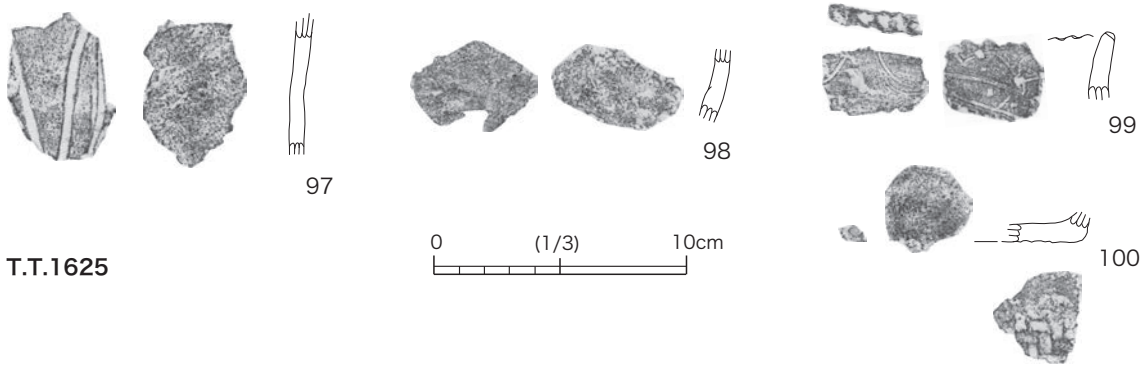


図 11　大名倉遺跡出土縄文土器 5

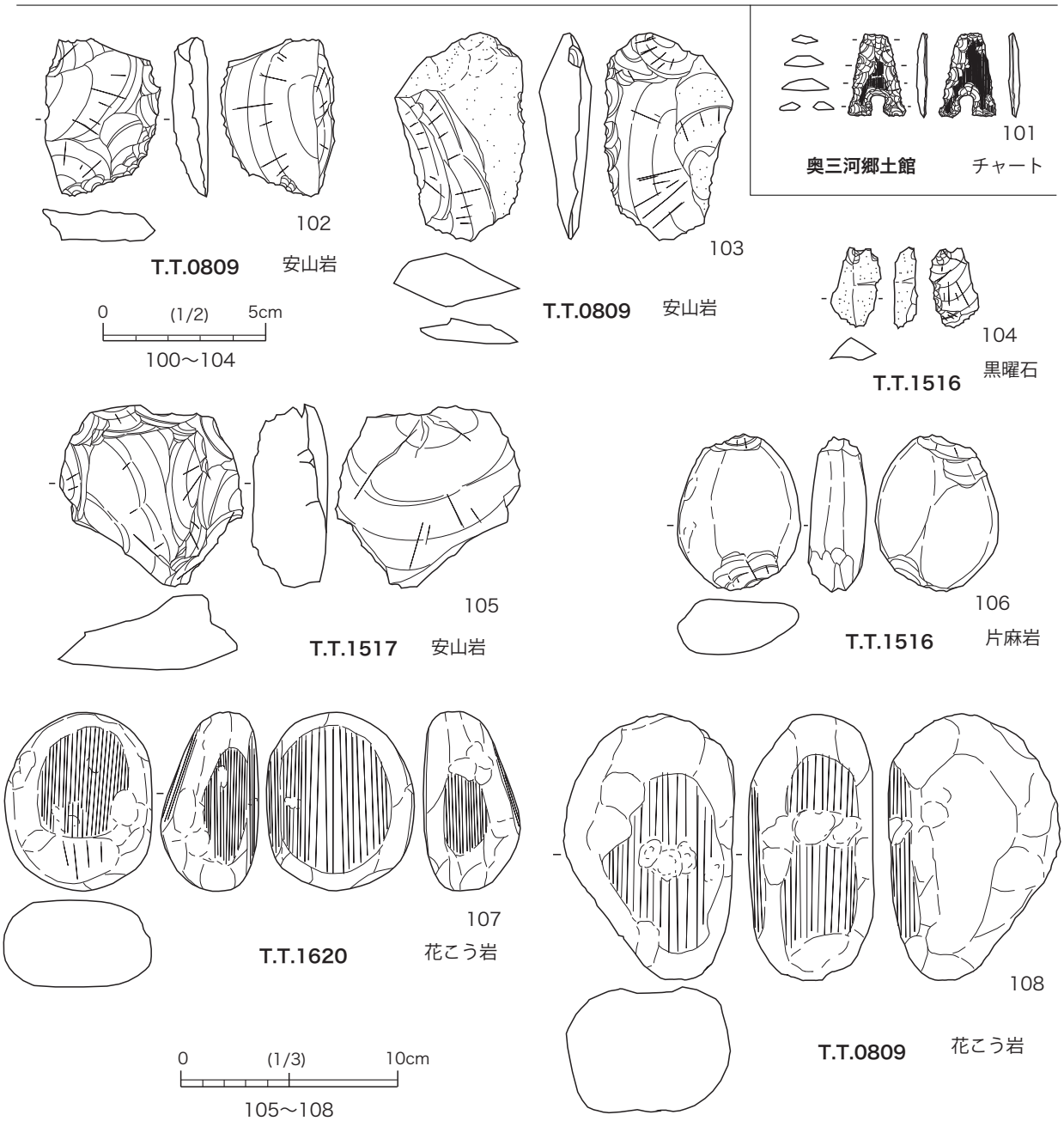


図 12　大名倉遺跡出土石器

調査において黒曜石の出土は、この1点のみである。T.T.1516出土で、ここでは竪穴建物跡の可能性のある遺構が見つかっている。

105は礫器あるいは大型剥片石核と考えられる。断面形は台形を呈するもので厚手である。石材は安山岩で、T.T.1517出土ある。

106は打欠石錘と考えられる。対向する両端に剥離が認められるものであるが、厚みのある円礫であるためか剥離部分の中央は潰れた状態となっている。剥離は両極打撃によるものか。石材は片麻岩で、T.T.1516出土である。

107・108は磨石敲石類である。107は両平面に著しい磨滅痕が残されているもので、面の形成をみる。108は平面・側面に著しい磨滅痕が残されているもので、かつ同一面上に連続した凹みが認められる。凹みは浅く、敲打によって形成されたものと考えられる。107はT.T.1620出土、108はT.T.0809出土で、石材は花こう岩である。

101はトロトロ石器である。この資料は、範囲確認調査ではなく、奥三河郷土館の所蔵資料である。図上面側には垂直方向に連続した細かい剥離調整があり、尖る形状には決してなっていない。図面下側の二又部は独特なクビレ形状を呈している。両平面ともに中央部を中心として研磨あるいは磨滅の痕跡がよく残されている。また両側面にも研磨あるいは磨滅の痕跡があり、細長い面が形成されていることが注目される。トロトロ石器は、縄文時代早期前半の黄島式や高山寺式の頃に伴うことが知られている。先に報告した89の参考資料として掲載するものである。

(C) 中世陶器

中世から戦国期、さらには近世前半の資料も散発的に出土している（図13）。109は瀬戸・美濃窯産陶器筒形香炉の口縁部片と考えられる。110は古瀬戸後期様式の四耳壺底部である。111は瀬戸・美濃窯産陶器の端反皿口縁部、112は瀬戸・美濃窯産陶器、天目茶碗の口縁部である。

なお、近世以降に属する石器として、 砥石も3点出土している。いずれも置き砥石で、石材は凝灰岩である。最も大きいものは、長さ21.4cm・重さ1703gをはかるものである（写真2）。

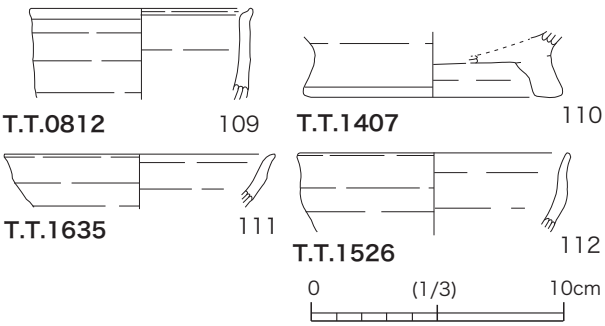


図13　大名倉遺跡出土中世陶器

写真2　T.T.1308出土砥石

以上、近年の範囲確認調査で出土した資料について、概要を報告した。大名倉遺跡出土遺物については、当地に住まわれていた伊藤正松氏の採集資料が古くから知られており、『三州名倉』にはその一部が掲載資料が掲載されている【沢田ほか1951】。本誌では、遺物の出土状況の写真も掲載されており、大変興味深い（同19頁）。伊藤氏は、その後これらの資料を設楽町に寄贈することになるが、それが町立の郷土博物館の設立の発端となったという【岡田ほか1968】。伊藤氏らの調査区域についてより詳細な成果として早稲田大学調査資料がある【平野2005】。ここで報告した範囲確認調査資料の成果は、大名倉遺跡をより広域的に俯瞰するものであり、今後の遺跡研究への情報提供となれば、幸いである。　（川添和暁）

6．遺物出土地点と地形の関係

先述のように範囲確認調査における重点の(2)として原地形の復元が挙げられる。ここではまず、トレンチ別の遺物出土状況（表3）を踏まえて、遺跡の枢要部にしぼって検討する。

全時代を通じて土器・陶器・石器が出土しているのは遺跡西部から北部であり、平成19・28年度に対象とした遺跡南部ではほぼない状況である。とりわけ多量の縄文土器が出土して注目されるのは、T.T.0802～0809、T.T.1516、T.T.1612などで、早稲田大学が調査した「下谷遺跡」の地区の周辺に限られる。

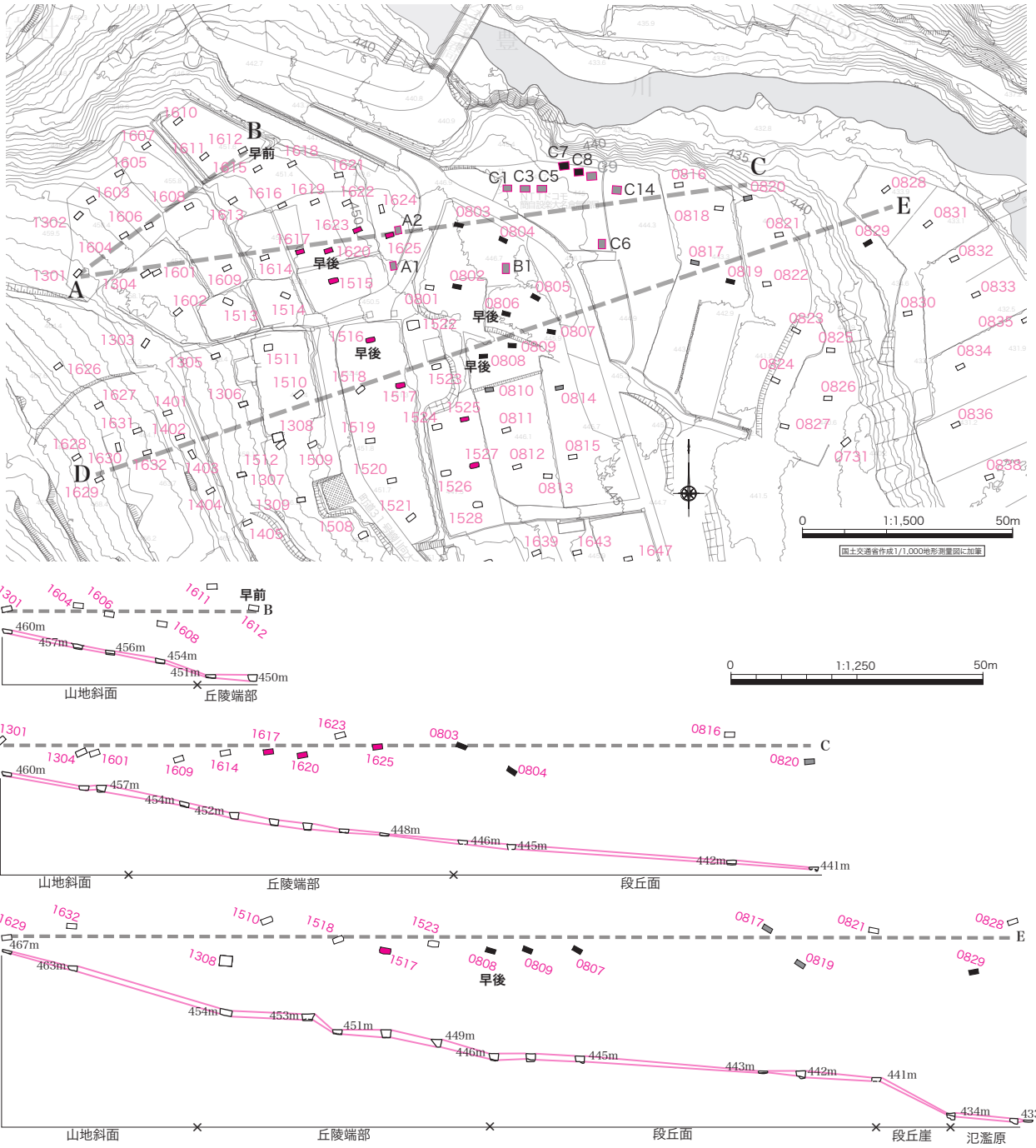


図14　大名倉遺跡枢要部における遺物の出土状況と地形断面

さらに時期別にみると、縄文時代中期後葉〜後期初頭の一群と、縄文時代後期中〜後葉の一群が平面的に分かれる（図 14 上）。

そこでそれらトレンチにかかるように直線を設定して地形の断面を作成し、遺物の出土状況との対応関係をみる（図 14 下）。これは各トレンチの地表面と基盤層面をそれぞれ延長させたものであるが、以下の通り留意点は２つある。

１点目は基盤層が傾斜する丘陵端部で中期後葉〜後期初頭の土器が出土するのに対し、それに比べて緩傾斜の段丘面で後期中〜後葉の土器が出土する点である。特に A-C ラインでは、T.T.0804 〜 0816 で早稲田大学調査の C 地点も経由することから後期の土器集中域となっている。このことから平面的にも分布が重ならない両者が地形的にも明瞭に区分されるかたちとなった。

２点目は、地表面と基盤層の間の層厚が地形に対応して異なる点である。段丘面では比較的それが薄く、傾斜面で厚くなる傾向がみられる。これは例えば T.T.1515 のように近世以降の造成によって上部が撹乱されている例（図 6）もあるが、同トレンチでは造成層の下位で縄文土器の包含層（第３層）と遺構（第４層）が検出されていることから、元から表層土が厚いために削平されずに残存しているものと考えられる。さらにその遺構は礫混じりの黒色土（第 5・6 層）に対して掘り込まれており、礫のない包含層との対比が興味深い。それは現在も耕作地である T.T.1620（図 6）を参照しても明らかで、耕作土直下の表層土の大半が礫の少ない黒色土・黒褐色土で占められている。同トレンチでは上部の第２層は旧耕作土とみられるが、第３層からは早期後半および中期後葉〜後期初頭の土器と磨石敲石類が出土している。同層下位の第４〜５層では出土遺物はないが、基盤層に掘り込まれる土坑があるので、同様に包含層である可能性が考えられる。つまり、傾斜面となる丘陵端部では、縄文時代中期後葉以降からほぼ現代に至るまで礫の少ない黒色土の生成が継続され、その中に縄文時代早期および中期の遺物が包含されている状況がうかがえるのである。このことは焼畑などの斜面地利用の歴史にも関わるので、周辺地域も含めてあらためて検討したい。

また、以上の土器出土集中域に縄文時代早期の土器の分布域が重なる点も注意しておく必要がある。これらは数点ずつの出土でしかないので散漫な印象を受けるが、特徴的な微地形に関わっている可能性がある。早期前半の土器が出土した T.T.1612 は岬状に突出した丘陵端部とみられる。逆に早期後半の土器がある T.T.1620 は基盤層が周囲のトレンチよりも砂質が強く、先述のように黒色土の堆積も際立っていることから、小くぼ地の縁辺に相当するとみられる。また T.T.0806・0808 は丘陵端部から段丘面への傾斜変換点に位置している。早期後半の土器は T.T.1516 でも出土しているので、これらはより高位に存在した遺物が後の改変によって移動した可能性も考えられるが、だとしても丘陵端部の限られた地点にその原位置を求められるのではないだろうか。

7．大名倉遺跡における活動域の変遷

以上のように、遺物分布と地形の関係をみてきた。もとよりトレンチ調査では性格の特定できる遺構の検出は難しい。しかしトレンチ調査で出土した石器は、磨石敲石類、石皿台石類、打欠石錘など、縄文時代の集落で一般的な器種があることから、大名倉遺跡も集落遺跡として捉える。ここでは大名倉遺跡における集落としての土地利用がどのように変遷してきたのかを考える。

縄文土器の出土分布域からそれぞれ中期後葉〜後期初頭と後期中葉〜後葉における活動範囲を描いてみる。先述のように両者はあまり重複することがなく、高低差でも分かれている。前者が幅約 16m× 長さ 72m の細長い区域に対して後者は長径 80m× 短径 50m の不整な楕円形の区域が想定される。おそらくこれらが集落域の主体になるであろう。

縄文時代中期後葉〜後期初頭の集落域は斜面地を志向する立地となっているが、概ね標高 450m が上限となっている。標高 450m から上位では傾斜が増すことから、このような急傾斜は土地利用を避けていたと考えられる。現況では T.T.1515 と T.T.1516 の間に山地（字滝ノ下）

から用水路が引かれている。これがそのまま当時の川であったとは考えにくいが、T.T.1303付近は湧水で湿地状を呈しており、背後に湧水点が集落の維持装置になっていたと推測されよう。

縄文時代後期中葉〜後葉の集落域は、中期のそれを全く踏襲していない。ただし先述のように、黒色土の厚い堆積は主に中期の集落廃絶後に進んだとみられ、当該期に黒色土の生成につながるような利用が斜面地でなされていた可能性もあろう。一方、段丘面での遺物分布状況は一様ではなく、T.T.0804・0809や早稲田大学C7などいくつかの集中地点がみられる。また東方の段丘崖付近は希薄である。問題は南側への広がりであるが、早稲田大学調査地点から東海自然歩道に沿った東側は現在ビオトープとして保全されているためトレンチ調査がなされていない区域がある。そのさらに南側は、T.T.0824・0826・0827では基盤層付近で湧水があるのでここは谷地形に相当するとみられる。そこから谷が段丘を抉りこんでいるとすれば、T.T.0815の基盤層標高が約444.25m、T.T.1644で 約444.0m、T.T.0813で約444.8m、T.T.1639で約446.0mとなるこ

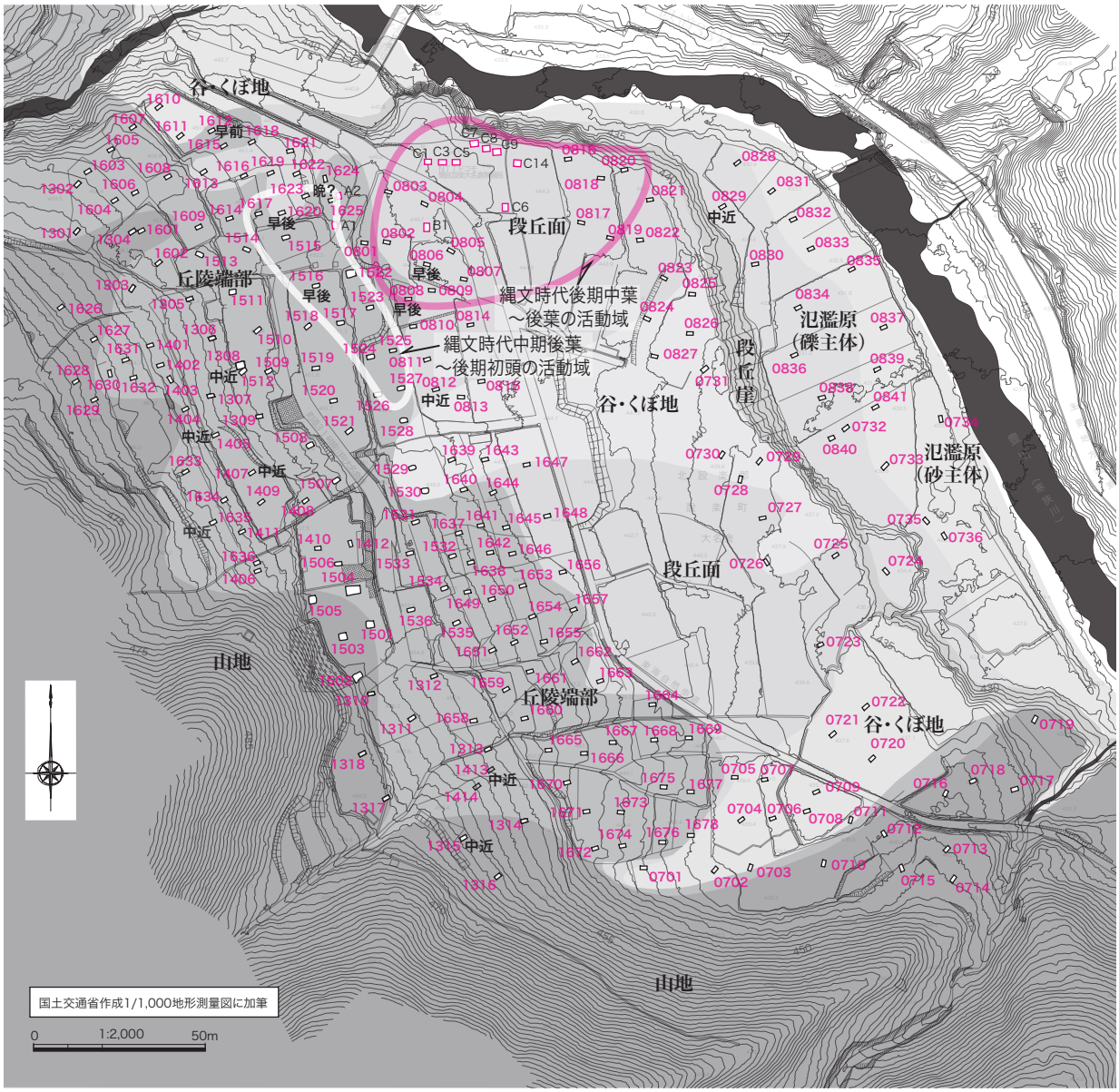


図15　大名倉遺跡における縄文時代遺跡の展開（1:2,000）

とから当該地点が谷奥になるとみられる。したがってここから北側の T.T.0812 付近が段丘縁になるのであるが、T.T.0810 ～ 0812 では出土遺物がない。よっておそらく T.T.0814 付近が集落域南限になると推測される。しかし後期の集落からすればこの谷地形が最も近い水源地であり、水場の周辺で食糧の加工などの作業を行っていた可能性がある。

以上のような、縄文時代中期と後期の活動域の変遷は、豊川の対岸に立地する西地・東地遺跡にもみることができる。当該遺跡では調査区のほぼ全域で中期末～後期初頭の土器の出土分布がみられるのに対し、後期後葉～晩期の土器は調査区南西隅の比較的低位に集中する【川添 2018】。ここでは分布域は重複するものの、その中心が高位から低位へと移動する点は同様である。

ところで、先述のように大名倉遺跡では縄文時代晩期の土器も出土しており、これまでにも研究者に注目されてきた経緯がある。しかしながら範囲確認調査では晩期と特定できる土器はなく、その分布も明らかではない。より限られた出土傾向となるのであれば興味深い。

8．むすびにかえて

大名倉遺跡では、弥生時代以降の土地利用は低調で、西地・東地遺跡とともに平安時代の灰釉陶器が若干出土する。その後本格的に集落域となるのは中世後半以降であり、範囲確認調査では標高 450m 付近で古瀬戸後期様式の四耳壺や戦国時代の土師器が出土しており、さらに上位の地点で近世陶磁器が出土している。おそらくこの段階の土地利用が現代まで踏襲されているものと考えられる。（永井邦仁）

謝辞：本稿を作成するにあたり以下の諸氏・機関にご教示とご協力をいただきました。記して感謝申し上げます（敬称略）。

設楽町奥三河郷土館　石井峻人　鵜飼堅証　平野吾郎

引用・参考文献

愛知県教育委員会　2007『設楽ダム関連遺跡総合事前調査　詳細遺跡分布調査報告書』
岩野見司　2002「大名倉遺跡」『愛知県史　資料編 1 考古 1　旧石器・縄文』 愛知県
大橋　勤　2005 『愛知県における考古学の発達』
岡田松三郎・沢田久夫・鈴木冨美夫・夏目一平・村松信三郎ほか　1968 『北設楽郡史　原始～中世』 北設楽郡史編纂委員会
岡久雅浩　2009 「笹平遺跡・万瀬遺跡・大名倉遺跡」『年報』平成 20 年度　愛知県埋蔵文化財センター
小栗鉄次郎　1932 「北設楽郡に於ける先史時代及び原史時代の遺蹟」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十　愛知県
川添和暁　2016 「大名倉遺跡ほか 14 遺跡（範囲確認）」『年報』平成 27 年度　愛知県埋蔵文化財センター
川添和暁　2018 「西地・東地遺跡の整理作業」『新設楽発見伝 4　配布資料　愛知県埋蔵文化財センター
紅村　弘　1963 『東海の先史遺跡　総括編』東海叢書第十三巻　名古屋鉄道
桜井清彦・平野吾郎　1966 「愛知県北設楽町神田中向遺跡の調査」『古代』47 号　早稲田大学考古学会
桜井清彦・平野吾郎　1968 「愛知県北設楽町神谷沢遺跡の調査」『史観』77 冊　早稲田大学史学会
桜井清彦・平野吾郎　1971 「愛知県北設楽町納庫麦田遺跡の調査」『古代』54 号　早稲田大学考古学会
沢田久夫ほか　1951 『三州名倉』 名倉村
鈴木冨美夫　1997 「北設楽郡と考古学の関りについて」『文化財専門委員活動報告』7　設楽町教育委員会
鈴木正貴　2015 「設楽ダム工事関連遺跡範囲確認調査 大名倉遺跡 上戸神遺跡 川向萩ノ平沢遺跡 大栗遺跡 永江沢遺跡」『年報』平成 26 年度　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2014 「滝瀬遺跡始め 4 遺跡（範囲確認調査）大名倉遺跡 / 西地・東地遺跡 / 万瀬遺跡 / 滝瀬遺跡」『年報』平成 25 年度　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2017 「大名倉遺跡（範囲確認調査）」『年報』平成 28 年度　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2018 「大名倉遺跡」『新設楽発見伝 4　配布資料』 愛知県埋蔵文化財センター
平野吾郎　2005 『下谷遺跡（愛知県北設楽における縄文時代遺跡の調査）』北設楽縄文文化研究会
松田　訓　2008 「大名倉遺跡・大崎遺蹟」『年報』平成 19 年度　愛知県埋蔵文化財センター
森田勝三　2013 『久永春男遺跡調査日誌』野帳の会

志賀公園遺跡の初期須恵器

早野浩二

本論においては、志賀公園遺跡の初期須恵器に対する評価を改めて整理した。その結果、正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡の初期須恵器を含めた時期、系譜にかかる位置に議論の余地が多いことが判明した。また、円窓付壷（脚付壷）を比較検討し、その製作系譜の一端を示した。

はじめに

名古屋市北区志賀公園遺跡においては、良質な古墳時代中期の土器群が検出されている（財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 90 集）。土器群には初期須恵器も多く含まれ、それらは調査報告書の刊行後、伊藤禎樹（伊藤 2004、以下、伊藤論文）、中里信之（中里 2014・2015・2017、以下、中里論文）によって詳細な検討が加えられている。筆者は、同遺跡出土の古墳時代中期の土器の報告に携わった経緯もあることから、これらの論文に対する見解を述べるとともに、報告書刊行後の幾つかの知見を加えることで、多少なりとも今後の議論の進展に寄与することとしたい。

さて、既報告の遺物図版は、印刷が良質ではなく、校正でも十分に修正が行き届かなかった。そこで、今回、出土した初期須恵器の大部分を愛知県埋蔵文化財センターが保管する原図から改めてトレースした実測図を再提示した（図 1 ～ 5）。なお、器種分類については報告書のそれを一部修正（後述）して再掲し（図 6）、遺物番号は報告書の番号を踏襲した。

1．伊藤論文と中里論文について

伊藤論文（伊藤 2004）は、志賀公園遺跡の報告を受け、岩崎直也が提唱した「尾張型須恵器」の特性（岩崎 1987）をより体系的に把握し、その成立、展開過程を整理した意欲的な論考である。その論考は、縦線文が「TG231・232 型式並行（伊藤による尾張型須恵器第 1 段階）」の名古屋台地出土の須恵器に多用されていること、文様帯を区画する 2 本 1 単位の平行沈線（二子線）が「尾張独特の手法」で TG231・232 型式併行段階から存在すること、尾張南部の初期須恵器に陶邑よりも北摂から北河内、南山城との類似性が認められること等、重要な指摘も多く、結論として、「韓式系軟質土器」の出土も踏まえて、「TG231・232 型式並行」（尾張型須恵器第 1 段階）」は尾張における須恵器生産が「正木町遺跡かその周辺で開始された可能性が高」く、「TK73 型式並行（尾張型須恵器第 2 段階）」には「尾張型須恵器」の基本器種が整い、「TK216 型式並行（尾張型須恵器第 3 段階）」には畿内の要素も摂取しつつ、東山丘陵における須恵器生産が確立したことを述べている。なお、伊藤は TK73 型式併行段階の生産拠点はなお名古屋台地にあって、TK216 型式併行段階については、名古屋台地と東山丘陵に、志賀公園遺跡に須恵器を供給した生産拠点を含めた複数の生産拠点を想定している。

名古屋市中区正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡において出土する須恵器の一群に、東山 111 号窯の須恵器に（様式的、型式的に）先行する様相が認められることはしばしば指摘され、概ねそれは共通の理解ともなっている感がある（斎藤 1984、尾野 1997、城ヶ谷 2007 等）。その場合、東山 111 号窯に先行する未知の生産窯が猿投窯に存在し、名古屋台地を中心とする消費地に須恵器を供給した図式が想定されることが多かった。なお、この想定については、胎土や形態の類似が根拠とされることが多い。対

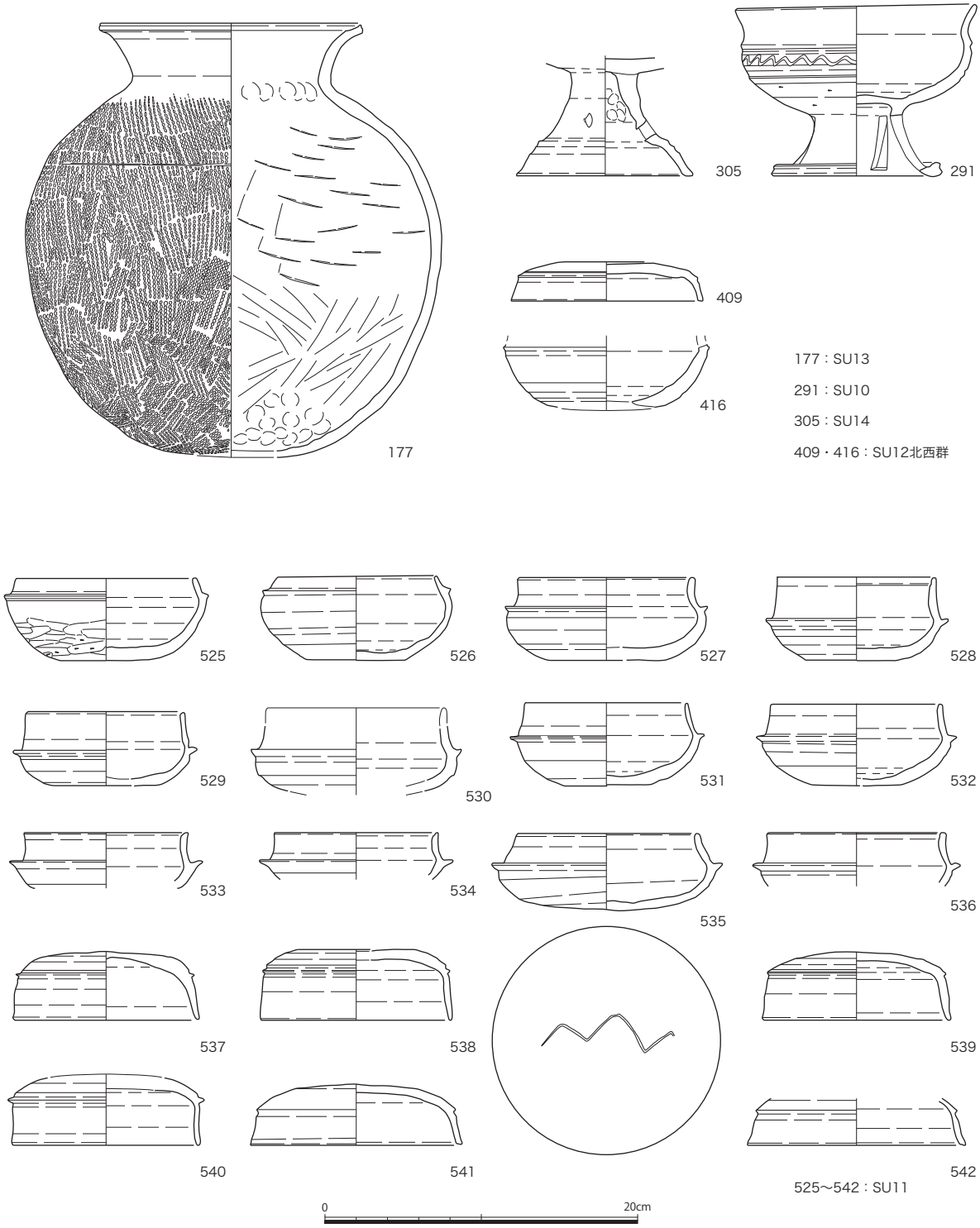


図１　志賀公園遺跡出土初期須恵器（１）*

* 530、536 については、（復元）最大径、（復元）口径を再計測し、実測図を修正した。

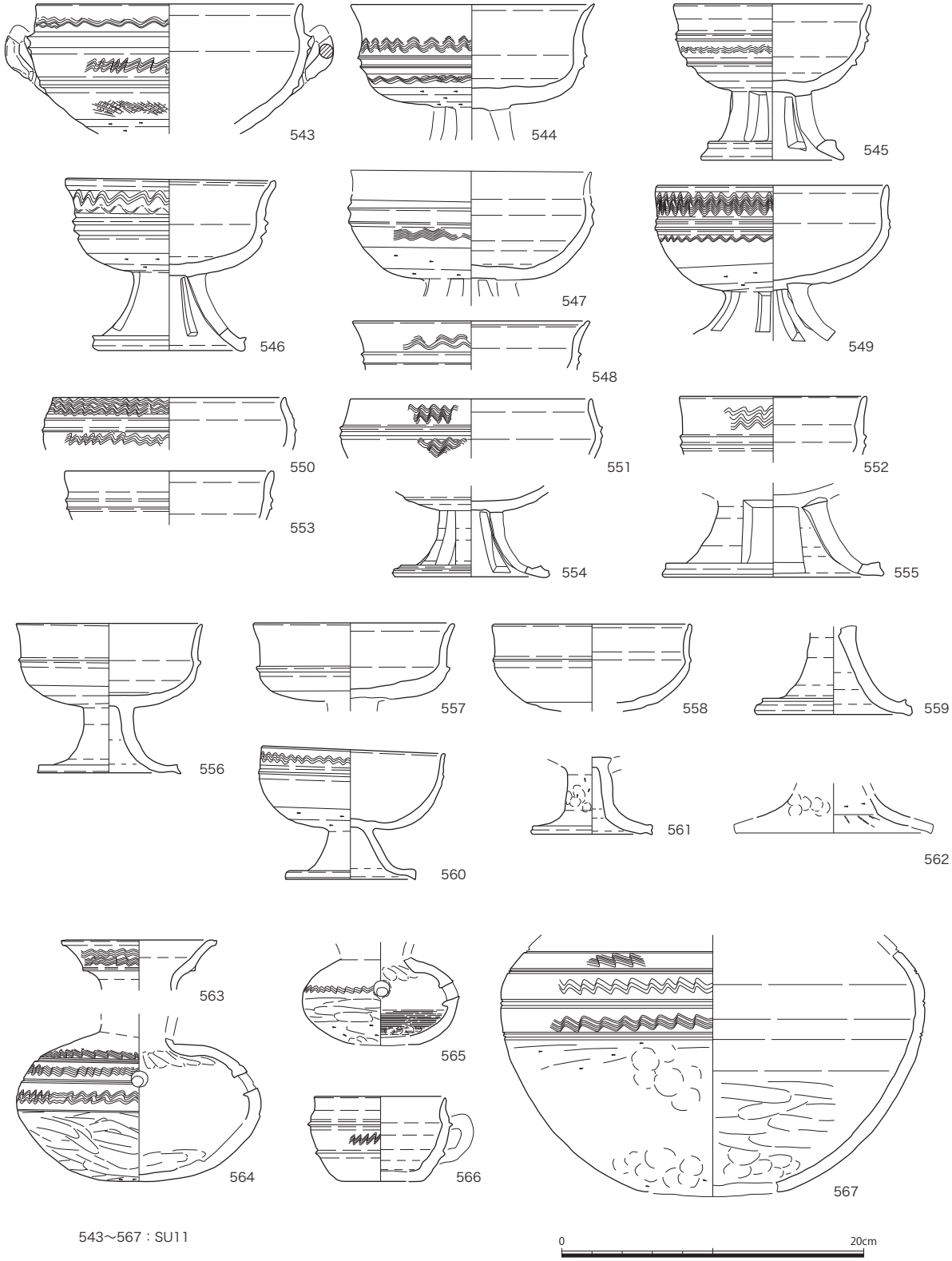


図２　志賀公園遺跡出土初期須恵器（２）

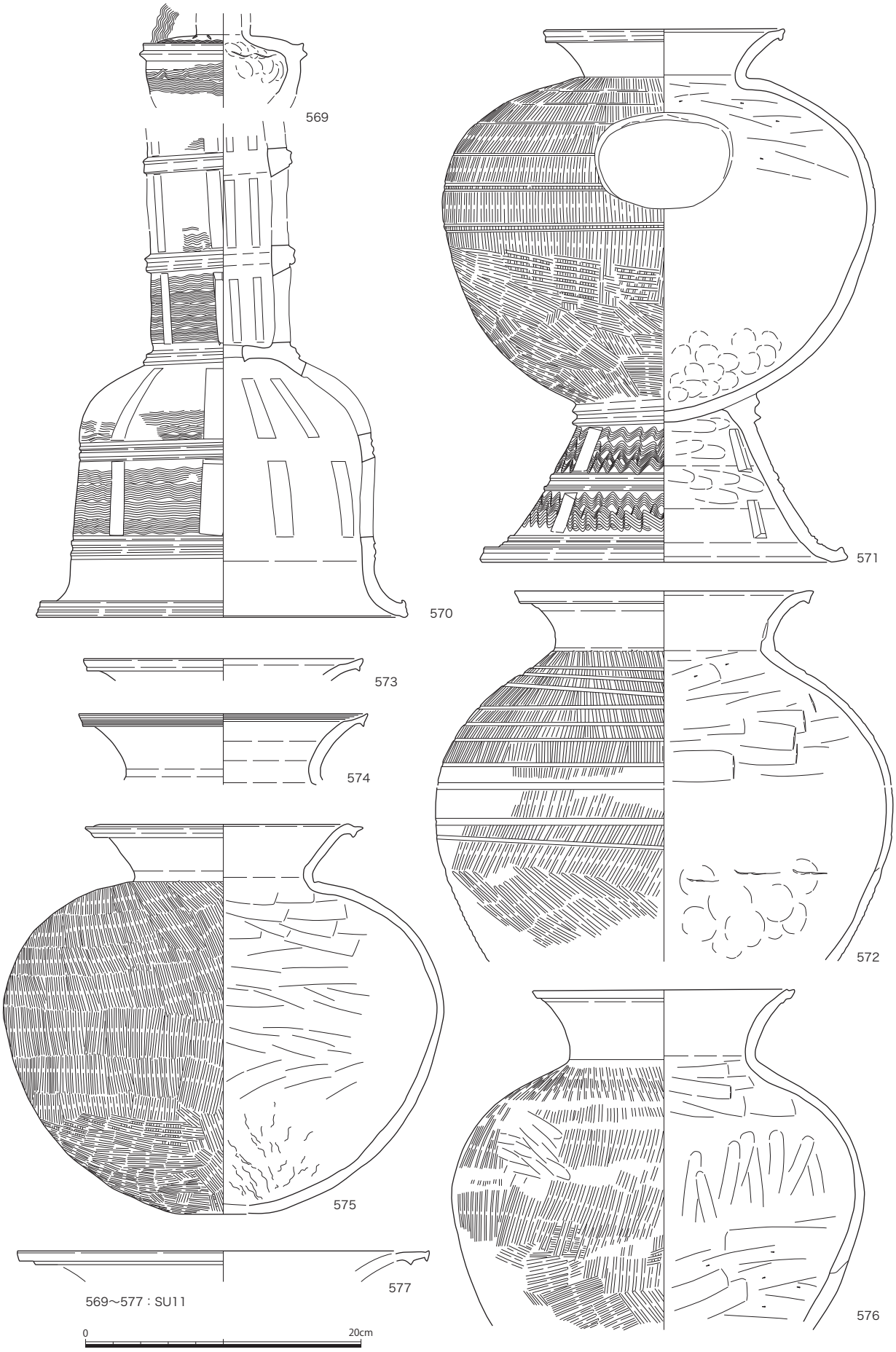


図３　志賀公園遺跡出土初期須恵器（３）

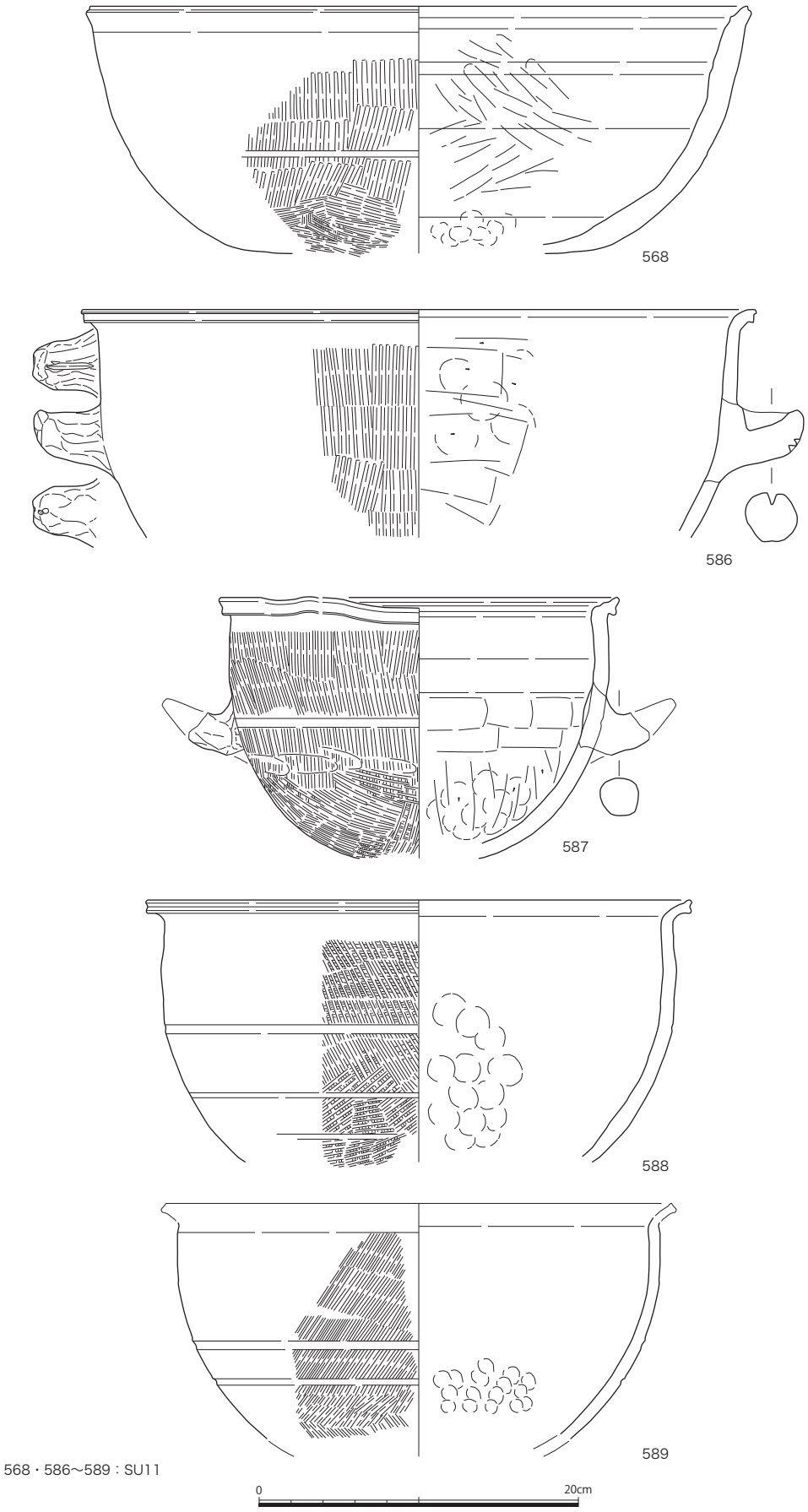


図４　志賀公園遺跡出土初期須恵器（４）

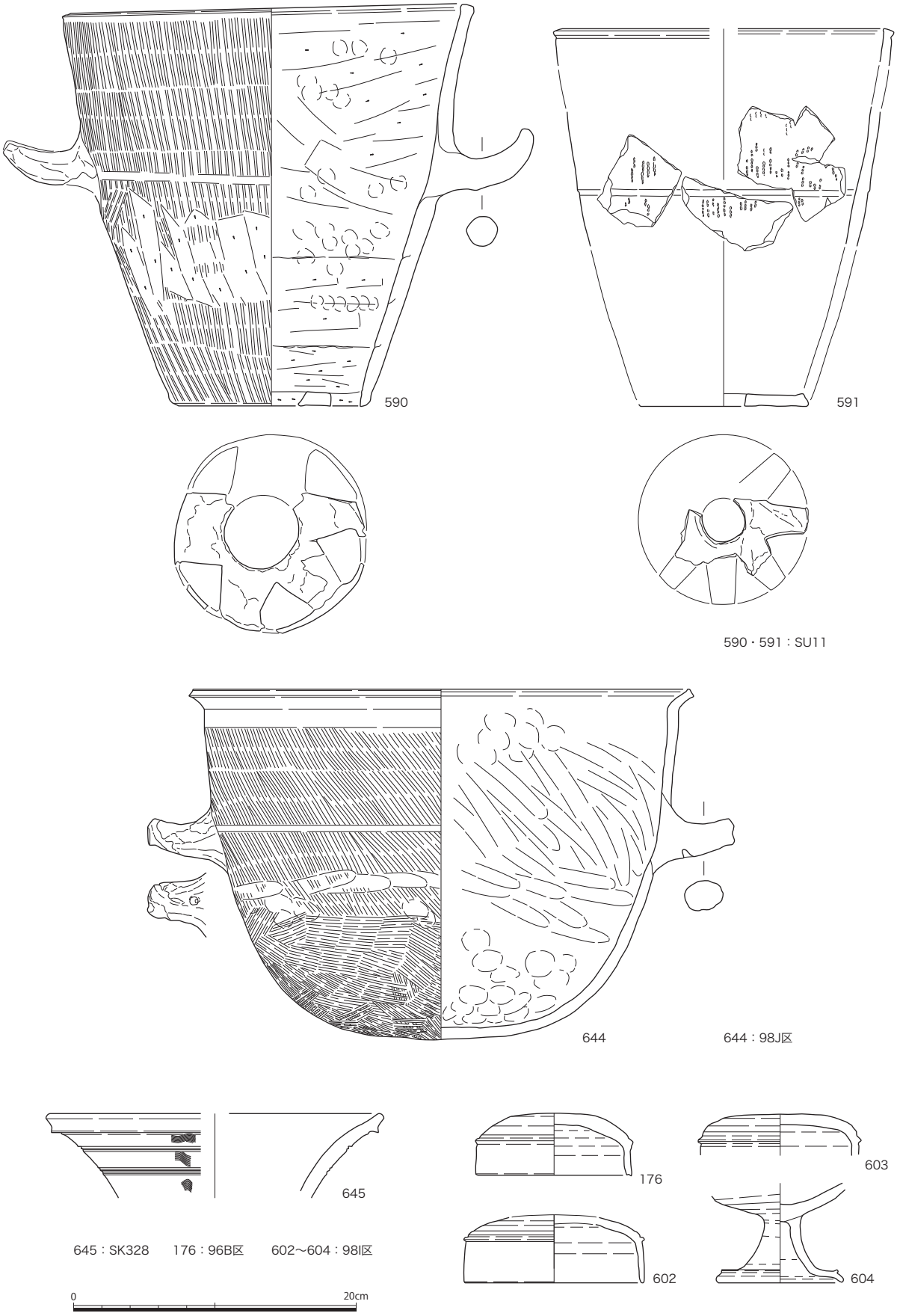
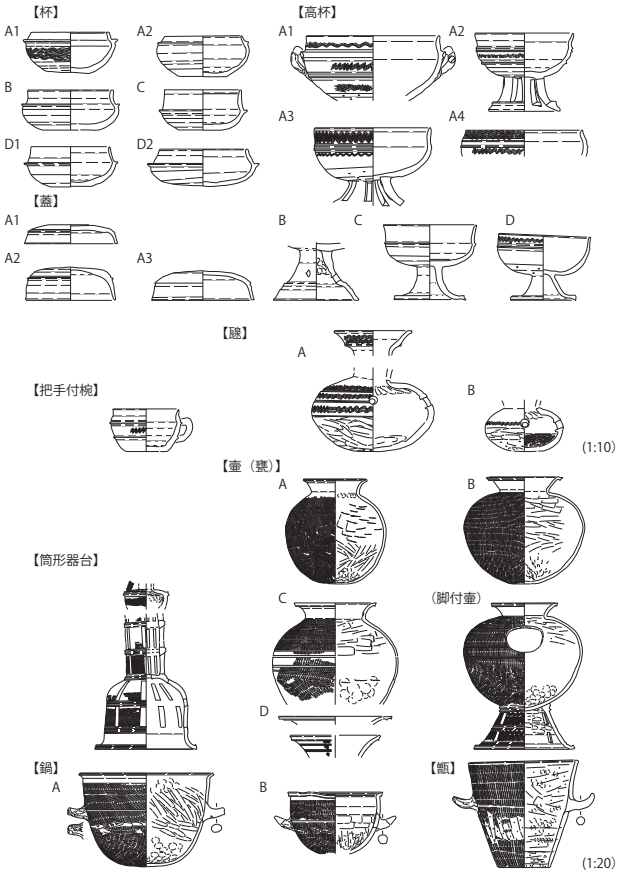


図５　志賀公園遺跡出土初期須恵器（５）



【杯】
蓋杯の杯。器形をもとに杯A～杯Cに分類する。
A　いわゆる羽釜形の杯。受部は短く内傾する。
　A1　受部が体部上半より内側にあるもの。
　A2　受部が体部上半から連続するもの。
B　体部が膨らみをもって張り出すもの。
C　受部が長く（受部高≧体部高）、直立気味なもの。
D　受部がやや内傾するもの。
　D1　口径が小さく（10.0～11.0）、体部が深い（5.0～5.5）もの。
　D2　口径が大きく（11.0～13.0）、体部が浅い（4.5～5.0）もの。
【蓋】
杯と組み合う蓋。器形、器高をもとに蓋A～蓋Cに分類する。
A　器高が極端に小さく（2.5前後）、口縁部がやや開くもの。
B　器高が大きく（4.5前後）、口縁部がほとんど開かないもの。
C　器高がやや小さく（4.0前後）、口縁部がやや開くもの。
【高杯】
無蓋高杯のほかに有蓋高杯の可能性があるものがあるが、有蓋高杯で全形が判明するもの、有蓋高杯の蓋が確認されなかったことから一括して分類する。
A　無蓋高杯で、杯部に突線をもち、脚部には方形の透孔を穿つもの。波状文を多用する。
　A1　大型品で、把手が付されるもの。口縁部が外上方にやや開く。
　A2　口縁部上半が外上半に開くもの。
　A3　口縁部が直立するもの。
　A4　口縁部上半が内傾するもの。
B　無蓋高杯で、脚部が有段状に開くもの。
C　有蓋高杯（無蓋高杯）で、脚部に透孔がないもの。
　C1　受部が外上方にやや開き、蓋受けとしての機能が疑問視されるもの。脚部は柱状に近い。
　C2　受部を明確にするもの（杯部は存在せず）。脚部はハの字状に開く傾向にある。
D　土師器に似た器形。脚部には透孔がない。
【鬲（壷）】
数量が少なく、鬲と壷の判別が難しいものもあるため、一括して扱う。法量をもとに二分する。
A　大型（体部径15.0以上）のもの。
B　小型（体部系10.0前後）のもの。
【把手付椀】
平底の椀で把手が付されるもの。
【筒形器台】
細身の筒部、上半が内彎して開き、裾部が大きく広がる脚部をもつもの。
【壷（甕）】
壷と甕は明確に峻別できないため、一括して扱う。
A　やや短く外反する口縁部をもつもので、口縁端部を拡張しないもの。体部には縄蓆文叩き、格子叩き、平行叩きが施される。
B　やや短く外反する口縁部をもつもので、口縁端部が上下に拡張される傾向にあるもの。体部には平行叩きが施される。脚台が付されるものもある（脚付壷）。
C　体部に平行叩きを施したのち、凹線をめぐらすもの。瓦質焼成のものが多い。
D　口縁端部に面をもたせつつ、口縁端部の直下に断面三角形状の突帯をめぐらすもの。
【鍋】
広口丸底の器形で、牛角状の把手が付されるもの。法量をもとに二分する。
A　口径30以上の大型品。
B　口径30未満の小型品。
【甑】
底部に三角形の蒸気孔を穿つもの。牛角状の把手が付される。

図６　志賀公園遺跡出土初期須恵器の器種分類（早野 2001 より作成）

して、伊藤は正木町遺跡の初期須恵器に尾張における須恵器生産導入の手掛かりが存在することを早くから予見し（伊藤・小林 1991）、東山窯に先行して名古屋台地で須恵器生産が開始され、「尾張型須恵器」として定着した図式を改めて明確に打ち出したのである。

中里論文（中里 2014・2015・2017）は、正木町０号住居を第１段階（TG231・TG232 型式）、正木町遺跡（北村資料）・志賀公園遺跡（金城資料）を第２段階（ON231 型式あるいは TK73 型式前後）、伊勢山中学校遺跡第５次調査 SK108・SK109、志賀公園遺跡 SU11、東山 111 号窯を第３段階（濁り池窯あるいは TK73 型式から TK216 型式）として把握する。各段階の系譜については、第１段階は半島経由か陶邑窯経由のいずれかは不詳としつつも、第２段階は陶邑窯大野池地区との関係を重視し、第３段階は伊勢山中学校遺跡第５次調査 SK108・SK109 に大野池地区の濁り池窯との直接的関係、また志賀公園遺跡 SU11 と東山 111 号窯に系譜の親近性、あるいは（陶邑窯高蔵寺地区からの）新たな工人系譜の摂取を看取する。

中里は伊藤が示唆した名古屋台地における初期須恵器生産を肯定しながらも、尾張の初期須恵器には多様な工人系譜が内在することを想定し（加えて搬入品の存在も指摘）、その生産の展開には陶邑窯との関係が恒常的に維持されていたことを強調する点に大きな特徴がある。そして、多系譜の工人の組織化、資源の安定確保、窖窯焼成の埴輪生産との統合を実現した東山窯の成立を一大画期とする一歩進んだ評価を与えている。

２．名古屋台地の土器群について

（１）伊勢山中学校遺跡第５次調査 SK108・SK109

以下、伊藤論文と中里論文を対比しつつ、それらの内容を検討するが、それに先んじて志賀公園遺跡出土の初期須恵器にかかる考察（早野 2001、以下、早野考察）後に生じた伊勢山

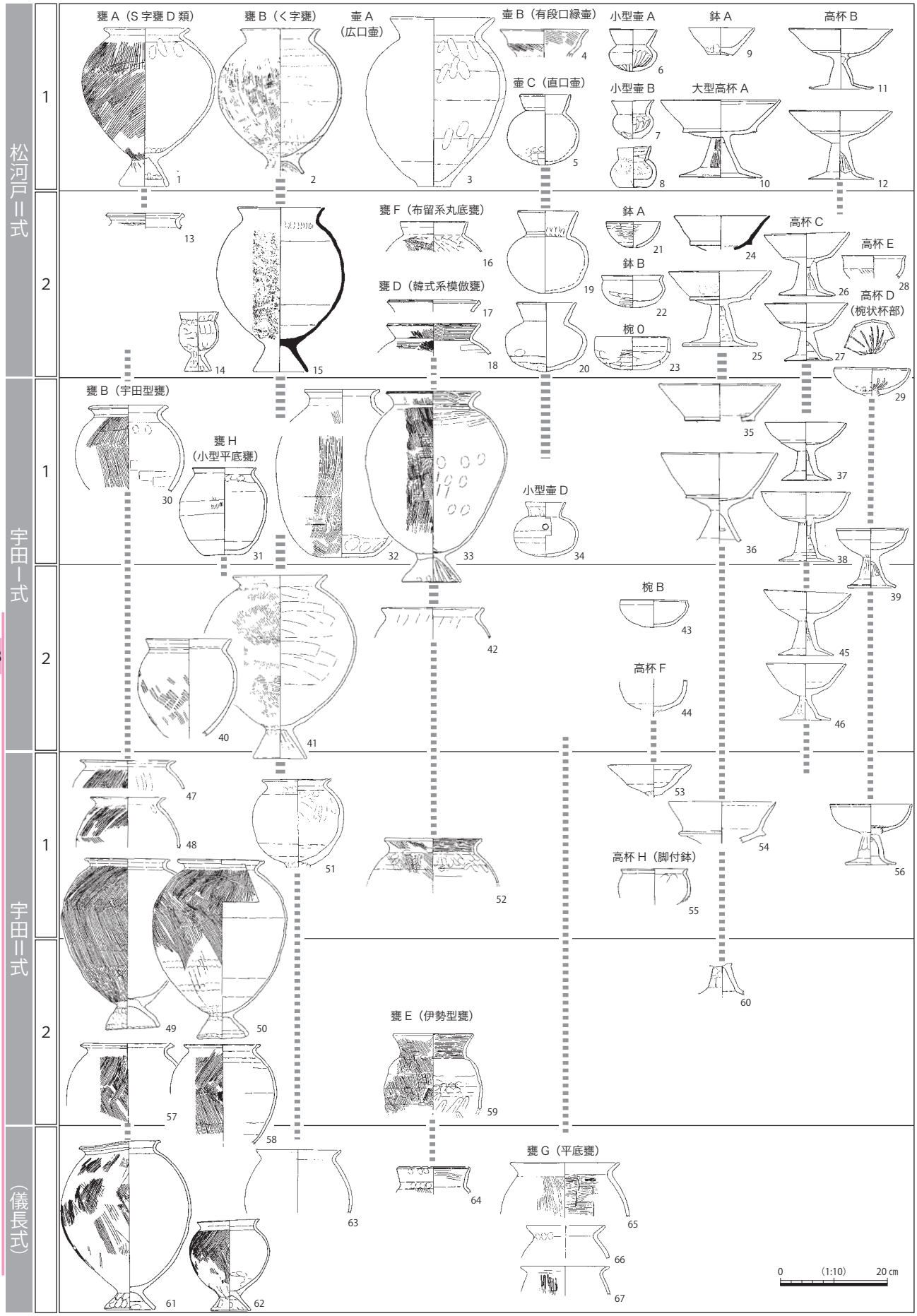


図7　古渡遺跡群を中心とした土師器の編年（早野 2012 より）

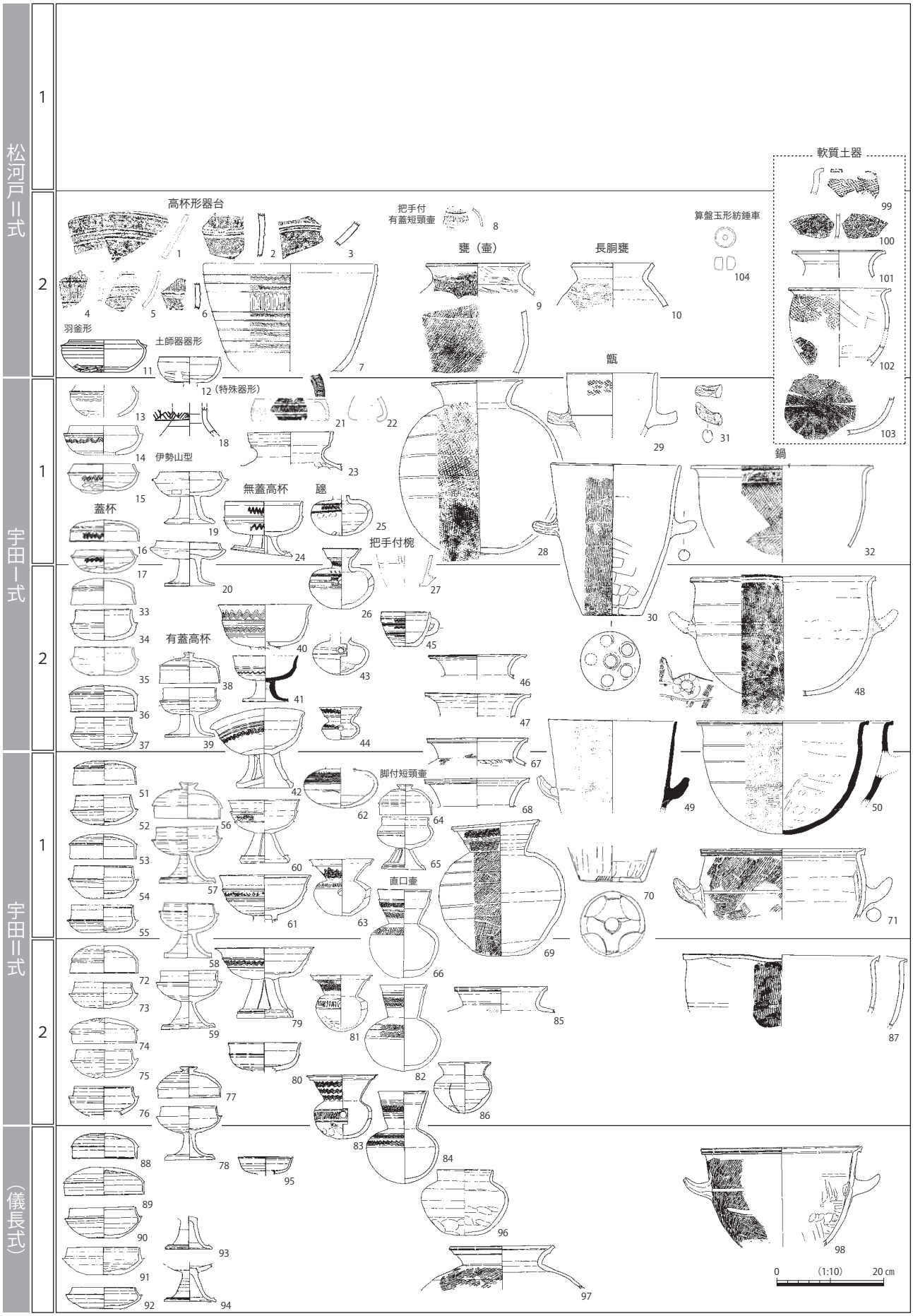


図８　古渡遺跡群を中心とした須恵器等の編年（早野 2012 より）

表１　古渡遺跡群を中心とする標識資料と器種の消長（早野 2012 より）

（●：複数個体が存在　○：１個体のみ存在）

様式	段階	標識資料	土師器																										須恵器															軟質土器
			甕							壺			小型壺					高杯							大型高杯	椀	鉢	蓋杯			高杯			把手付椀	瑞	壺	器台	甕（壺）		長胴甕	鍋	甑	
			A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	F	G	H				A	BC	D	土師	無蓋	有蓋				縄席	格子	平行			
松河戸Ⅱ式	1	竪三蔵通SB01(11)			○								○						○																										
		竪三蔵通SK16(14)	○		●										○				●									○																	
		竪三蔵通SB1(AS)																	●								○	○																	
		竪三蔵通SD01(IB)	●		●						●	●	●	○	●				●																										○
		正木町SK18(NZ2)			●								○	●																															
		正木町SB1(18)			●										○				●																										
		伊勢山中学校SB16(5)	●		●							●	●	○	●				●								○																		
		伊勢山中学校SB20(5)	○											○					●																										
		伊勢山中学校SB27(5)			●								●		○				●																										
		伊勢山中学校SB14(7)			●								○		●				●																										
	2	正木町SB0(I)			●				○				●						●	●							○											●	●			○			
		正木町SB02(4)			○														○																										
		正木町SK12(21)	○		●			○	○										○	●	○	○					○												●						
		正木町(IB)			●								●						●	○							○																		
		伊勢山中学校SK14(5)				●	○				○								●	○								○					○												○
		伊勢山中学校SK120(5)											●						●	●								○					○												
		伊勢山中学校SK1(8)																	●	●																			○		○				○
宇田Ⅰ式	1	正木町SK49(4)															○			○																									
		正木町SB01(21)			●																																					○		
		伊勢山中学校SK108 (5)		○	●	●				●										●	○					●			●		○	○	○									●	○	
		伊勢山中学校SK109 (5)			○	●					○									●	○					●							●			○	○	○		○				
		伊勢山中学校SK2(8)																		●													○		○						○			○	○
		大須二子山古墳下層				○														○									○				●	○			○		●	○		○			○
	2	竪三蔵通SB1006(AS)																		○										○		○	○						○			●		○	
		竪三蔵通SB1009(AS)			○															○			○									○		○								○			○
		伊勢山中学校SB17(5)																										○														○		○	
		伊勢山中学校SB30(5)																														○		○		○	○							
		伊勢山中学校SB01(10)			●		○																							●			○								○		○		
		尾張元興寺SB05(PS)		○	○																	○										●		●	○				○			●		○	○
		金山北255-SB(1)																																●										○	
		金山北165-SK(1)			●																											○												○	
宇田Ⅱ式	1	竪三蔵通SB1001(AS)		●	●																			○			○																		
		古沢町SK9(3)			●																	○										●		●								●		○	
		古沢町SB1(3)		○	●																	○										●		●	○		○	○						○	
		古沢町SK31(3)																								○						●		○	●		○		○						○
		東古渡町SD03中下層(1)		●		○																										●		○	●		○	○	○			○			
	2	伊勢山中学校SB01(5)		●																												○			○										
		伊勢山中学校SB03(5)																																	○								○		
		伊勢山中学校SB14(5)		●	○																											○		○	●										
		金山北SB11(2)		●																												○			●							●			
		金山北SB108(2)		○																												●						○				○			
		東古渡町SD01(1)					○																									●					○	○							
（儀長式）		竪三蔵通SB25(AS)			○				●																							○													
		伊勢山中学校SB09(5)		●	○		○																									●		○	●										
		古沢町SK43(3)		●																												●			●									○	○
		金山北SB24(2)					○																									●			○										

1.3.4.　竪三蔵通遺跡（イビソク）SD01
2.8.　伊勢山中学校遺跡（第７次）SB14
5.7.11.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SB27
6.10.12.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SB16
9.　竪三蔵通遺跡（朝日航洋）SB1
13.16.23.28.29.　正木町遺跡（第 21 次）SK12
14.25.　正木町遺跡（イビソク）
15.24.　正木町遺跡（伊藤）０号住居
17.18.21.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SK14
19.20.22.26.27.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SK120
30.31.33.35.36.37.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SK108
32.38.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SK109
34.　正木町遺跡（第４次）SK49
39.　伊勢山中学校遺跡（第５次）
40.42.　伊勢山中学校遺跡（第 10 次）SB01
41.44.45.　竪三蔵通遺跡（朝日航洋）SB1009
43.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SB17
46.　竪三蔵通遺跡（朝日航洋）SB1006
47.48.51.53.54.　竪三蔵通遺跡（朝日航洋）SB1001
49.50.52.　東古渡町遺跡（第１次）SD03 中・下層
55.　古沢町遺跡（第３次）SK31
56.　古沢町遺跡（第３次）SK9
57.58.60.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SB01
59.　東古渡町遺跡（第１次）SD01
61.62.　古沢町遺跡（第３次）SK43
63.65.66.67.　竪三蔵通遺跡（朝日航洋）SB25

1.2.　正木町遺跡（第１次）
3.　正木町遺跡（第３次）
4.5.27.　伊勢山中学校遺跡（第４次）
6.　竪三蔵通遺跡（第 10 次）SK01
7.10.　正木町遺跡（伊藤）０号住居
8.　正木町遺跡（第 13 次）
9.　正木町遺跡（第 21 次）SK12
11.　正木町遺跡（北村）
12.101.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SK14
13.　竪三蔵通遺跡（第 11 次）SK01
14.26.29.　大須二子山古墳下層
15.16.17.19.24.30.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SK108
18.31.　正木町遺跡（第 18 次）
20.103.　伊勢山中学校遺跡（第８次）SK2
21.22.　竪三蔵通遺跡（第 14 次）SX03・04
23.　正木町遺跡（第４次）
25.28.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SK109
32.　正木町遺跡（第 21 次）SB01
33.34.40.46.48.　伊勢山中学校遺跡（第 10 次）SB01
35.　竪三蔵通遺跡（朝日航洋）SB1006
36.37.　東古渡町遺跡（第３次）SK38
38.39.42.44.　東古渡町遺跡（第２次）SD10
41.50.　金山北遺跡（第１次）255-SB
43.45.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SB30
47.　竪三蔵通遺跡（朝日航洋）SB1009
49.　金山北遺跡（第１次）165-SK

51.53.54.55.61.　古沢町遺跡（第３次）SB1
52.67.68.71.　古沢町遺跡（第３次）SK9
56.57.58.59.60.63.64.65.66.69.
東古渡町遺跡（第１次）SD03 中・下層
62.70.　古沢町遺跡（第３次）SK31
72.73.79.　東古渡町遺跡（第２次）SD06
74.75.81.82.　東古渡町遺跡（第１次）SD01
76.80.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SB14
77.78.83.84.86.　東古渡町遺跡（第３次）SD35
85.　金山北遺跡（第２次）SB11
87.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SB03
88.92.93.94.95.　伊勢山中学校遺跡（第５次）SB09
89.90.97.98.　古沢町遺跡（第３次）SK4
91.　竪三蔵通遺跡（朝日航洋）SB25
96.　古沢町遺跡（第３次）SK34
99.100.　竪三蔵通遺跡（イビソク）
102.　伊勢山中学校遺跡（第８次）SK1
104.　竪三蔵通遺跡（第５次）

編年表掲載土器
（左列：土師器　中右列：須恵器等）

中学校遺跡第５次調査 SK108・SK109 にかかる認識の変更について述べる。この変更は、古墳時代集落としての名古屋市中区古渡遺跡群を検討する際に提示した編年（図７・８、表１）にも反映されているが（編年上における宇田Ⅰ式２段階から同１段階への繰り上げ）、主たる検討の対象が集落としての古渡遺跡群であったこともあって、その詳細は触れていない（早野 2012）。

早野考察においては、志賀公園遺跡 SU11 と東山 111 号窯との編年上の位置関係について、羽釜形態の杯（525・526）の存否等から、前者が後者に対して先行する可能性を考慮しつつも、同段階として理解した。ただし、無蓋高杯の透孔については、前者が４方から８方で５方が圧倒的に多く（544 ～ 547・549・554・555）、後者は７方から９・10 方で、後者が多い傾向にある。ただ、最近、大西遼は東山 111 号窯における４方透孔の無蓋高杯の存在を指摘している（大西 2017）。志賀公園遺跡 SU11 と伊勢山中学校遺跡第５次調査 SK108・SK109 との関係については、格子叩きの甕（図８-28）等から、後者が前者に先行する可能性を考慮しつつも、前者には羽釜形態の杯が組成すること等をも勘案し、やはり同段階として理解した。

しかし、伊勢山中学校遺跡第５次調査 SK108・SK109 は杯類として、「伊勢山型」ともした（伊藤や中里は有蓋とする）特徴的な高杯（図８-19）、無蓋高杯（同 24）が明らかに優勢であることに対して、志賀公園遺跡 SU11 は蓋杯が安定して組成することを重視すれば、伊勢山中学校遺跡第５次調査 SK108・SK109 が志賀公園遺跡 SU11 に対して先行する可能性が高いと考えられる。加えて、伊勢山中学校遺跡第５次調査 SK108 の「韓式系模倣甕」（図 7-33）とした土師器甕（口縁部の強いヨコナデ）に、より韓式系土器長胴甕との近似性が認められる点もそれを傍証するものと判断した。つまり、この認識の変更によって、TK73 型式―（東山 111 号窯期以前）―宇田Ⅰ式１段階―伊勢山中学校第５次調査 SK108・109、TK216 型式―東山 111 号窯期―宇田Ⅰ式２段階―志賀公園遺跡 SU11 とする編年上の位置と併行関係が示され、伊藤が示した理解とも概ね一致することになる。ただし、伊勢山中学校遺跡第５次調査 SK108・SK109 の無蓋高杯は４方透孔を含むこと、鍋・甑（図８-30）は志賀公園遺跡 SU11 の鍋(586)に認められる把手への細工(溝の切り込み、刺突孔）が認められない（須恵器鍋・甑として定着した感がある）こと等、志賀公園遺跡 SU11 に対して後出する様相も看取されることにも注意する必要がある。

一方、中里論文においては、杯の波状文や静止ヘラケズリの有無、伊藤のいう「椀状高杯」(図８-12)、瓿等の個別器種の対比、土師器編年の精度から単純に新古を判断することは難しいとして、伊勢山中学校遺跡第５次調査 SK108・SK109 と志賀公園遺跡 SU11 の両者に工人系譜の差異を読み取ろうとしている。また、無蓋高杯について、前者の直立気味の口縁部を古相、後者の外反する口縁部を新相とするが、やはり、工人差の可能性をも考慮している。

（２）伊勢山中学校遺跡第８次調査 SK1・SK2 等

伊藤論文は、韓式系軟質土器が伴う伊勢山中学校遺跡第８次調査 SK1 と同 SK2 の両者を「TK73 型式並行」とするが、前者は須恵器が甕の破片のみである一方、後者は広口壷と複数形式の高杯（図８-20 等）が伴うこと、土師器の様相差から前者を TG231・232 型式併行（松河戸Ⅱ式２段階）、後者を TK73 型式併行（宇田Ⅰ式１段階）として理解している（早野 2004・2012）。それ以外の名古屋台地の資料について、伊藤論文に示されている編年上の理解に大きな異論はない。

３．志賀公園遺跡の土器群について

（１）志賀公園遺跡 SU13・SU14

早野考察と伊藤論文において、大きく異なっているのが、志賀公園遺跡 SU13、同 SU14 に対する理解である。同 SU11 を含めたこれらは、早野考察において分析の対象とした土器集積で、SU13―松河戸Ⅱ式２段階（TG231・232 型式併行）→ SU14―宇田Ⅰ式１段階（TK73 型式併行）→ SU11―宇田Ⅰ式２段階（東山 111 号窯期／ TK216 型式併行）とする推移を想定した。なお、SU11 は先述のように東山 111 号窯期／ TK216 型式併行の須恵器の器種

（525 ～ 591）が豊富に伴う一方、SU13 には縄蓆叩きの甕 1 個体（177）のみ、SU14 には脚部が有段状で、菱形の透孔を穿つ無蓋高杯（305）と 2 本 1 単位の平行沈線（二子線）を施した器種不明の小破片（306）のみが伴う。

伊藤は志賀公園遺跡 SU13 の縄蓆叩きの甕（177）と松河戸 II 式 2 段階（TG231・TG232 型式併行）の正木町遺跡 0 号住居の縄蓆叩きの甕を比較して、後者は「厚手で瓦質を呈するが」、前者は「薄手で厚みは半減しており、須恵器になりきっている。その間には大きな差がある」とするが、両者は法量そのものが大きく異なっている。対して中里は、口縁部先端の内面の窪み、体部の凹線と無文当て具の使用は TK73 型式以降の陶邑窯の甕に認められないことから、「初期の段階から在地生産された可能性」を想定している。併せて甕の特徴について、正木町遺跡 0 号住居・志賀公園遺跡 SU13 ―縄蓆叩き・格子叩き、伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK109―格子叩き・凹線、東山 111 号窯と志賀公園遺跡 SU11―平行叩き・凹線として把握するが、上の様相差を段階的な変遷とするか、多様な要素の共存とするかについては判断を保留しているようである。あるいは前二者を名古屋台地の生産窯、後者を東山窯の要素とする理解も示しているようである。なお、志賀公園遺跡 SU13 の縄蓆叩きの甕については、成正鏞より大阪府豊中市利倉西遺跡の百済土器の可能性が高いとされる甕（図 9）に類似するとの教示があった。

また、SU14 の無蓋高杯（305）について伊藤は、TK216 型式に比定される形態が類似する個体の例を挙げているが、それをもって、TK216 型式に限定することは可能であろうか。須恵器の形態比較をより重視し、土師器の様相差を時期差としてではなく、同時期における使用状況の差として理解することも不可能ではないかもしれないが、SU13 は縄蓆叩きの甕のみ、SU14 は無蓋高杯のみが伴う須恵器の組成状況は、前者が器台と甕のみで杯類を伴わない正木町遺跡 0 号住居、後者が無蓋高杯が優勢な伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108・SK109 に対応し、むしろ伊藤による尾張型須恵器の第 1 段階と第 2 段階にそれぞれ対応しているようにも思われる（ただし、土師器の様相差から SU11 と同段階の宇田 I 式 2 段階として理解した SU10 と SU12 北西群に伴う須恵器はごく少ない）。

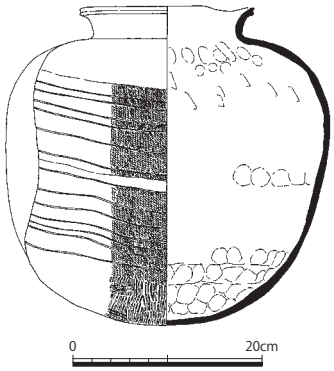


図 9　利倉西遺跡の縄蓆叩きの甕 *

* 豊中市　2005『新修豊中市史　第 4 巻　考古』より

伊藤は尾張地域一帯における初期須恵器の分布にも触れ、「TK216 型式並行」以前と思われる初期須恵器は名古屋台地を除くと稲沢市寺脇（大矢）遺跡 *、志賀公園遺跡でまとまって出土している程度で、「TK73 型式並行」以前となると、名古屋台地以外はその周辺を含めてもごく限定的であることを述べている。この様態をも踏まえ、伊藤は TG231・232 型式から TK73 型式併行の段階（伊藤による尾張型須恵器第 1 ・ 2 段階）の須恵器の生産拠点を名古屋台地に求めているのであろう。志賀公園遺跡 SU13、同 SU14 の編年上の位置に対する理解の差はこの評価とも無関係ではない。改めて志賀公園遺跡の土器集積の形成状況と土師器編年の再点検、精査も必要であろうが、志賀公園遺跡 SU13、同 SU14 の編年上の位置について、早野考察における認識を追従したとしても、共伴する須恵器はごく少なく、他地域の生産窯、あるいは伊藤が想定する名古屋台地の生産拠点から供給された可能性も十分に想定されるように思われる。

（2）志賀公園遺跡 SU11

志賀公園遺跡 SU11 は他の土器集積と比較して、遺物の分布は明らかに散漫で、扱いには注

* 名古屋市博物館が所蔵する「大矢遺跡」の資料は「寺脇遺跡」として紹介されていたが（稲沢市　1984『新修稲沢市史　資料編六　考古』）、その採集地点から正しくは「大矢遺跡」であることが判明している（瀬川貴文　2004『名古屋市博物館研究紀要』第 27 巻　名古屋市博物館）。

意を要することは確かである。全体の検出状況も不安定で、遺構の理解には釈然としない部分も多い。これらを踏まえ、早野考察においては可能な限り詳細に須恵器の接合状況を提示し、原則として一括資料に準じた扱いをしている。

対して、中里論文は蓋杯の詳細な検討を踏まえて、SU11 の一括資料としての扱いに疑問を呈している。ただ、中里は「口縁端部と形状の小型化からより新しい要素を持つ杯身もある」こと、あるいは SU11 の蓋杯に東山 11 号窯の蓋杯と類似する個体が混在することを指摘するが、前者は後者に比して、全体に器壁は厚く、鋭利さにも乏しいような印象も受ける。いずれにせよ、特定の型式の比較のみから一括資料としての厳密性を吟味することは難しい。他器種の詳細な分析による検証が必要であろう。また、伊藤、中里とも SU11 の蓋杯で、丸底で法量が大きい個体（535）を「搬入品」としている。

（3）羽釜形態の杯の問題

伊藤論文においては、「尾張型杯・高杯」の成立を把握するに際して、羽釜形態の杯を含む初現期の杯を系統区分し、それぞれの変遷を検討している。その際、赤塚次郎（赤塚・早野 2001）が示した「尾張型須恵器の編年」を参照し、「杯の変遷は正しく把握され」ず、「変遷の方向は逆になっている」とする（図 10）。

早野考察においても、赤塚の理解を踏まえつつ、志賀公園遺跡 SU11 において重厚な羽釜形杯と薄手の羽釜形杯の両者が共伴していることを重視し、それぞれ、志賀公園遺跡（金城資料）、正木町遺跡（北村資料）からの系譜を想定した。なお、前者は口縁部を「折り込み」気味に成形し、後者は体部下半に膨らみを持たせて口縁部先端までを曲線的に連続して成形する特徴が認められ、型式変化の方向性として、体部が浅くなる傾向を想定した。この想定により、伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108 の杯を羽釜形杯から脱却した蓋杯の初源的な形態として理解したのである。しかし、型式的に先行すると想定した志賀公園遺跡（金城資料）、正木町遺跡（北村資料）は、いずれも採集資料で、編年上の位置を確定することは難しく、前述したように、伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108・SK109 は志賀公園遺跡 SU11 に対して段階的に先行する可能性もあるので、系譜、編年上の位置の理解については、検討の余地が大きい。

さて、伊藤は尾張型杯を「尾張型杯Ａ」、「土釜形」の「尾張型杯Ｂ」、平底の「尾張型杯Ｃ」等に大別している。伊藤が「尾張型杯Ａ」で型式的に最も先行する個体として例示しているのが、伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108 の杯である。ただ、この杯について伊藤は、「丸底という点で尾張では稀な資料で、濁り池Ｃ－１などに共通する」としつつ、それは直接には結びつかず、「強いて」としながら大阪府茨木市総持寺 10 号墳の蓋杯を比較対象として例示し、中久保辰夫も文様の割り付け（体部文様帯下端を突線で区画しない）が尾張の杯と類似することを指摘する（中久保 2017）。ただし、総持寺 10 号墳の杯は全体に扁平で、類似の程度に対する評価は難しい。中里も濁り池窯の杯との形態上の類似について、伊藤の指摘を追認しつつ、波状文の有無に差異が表出することを指摘

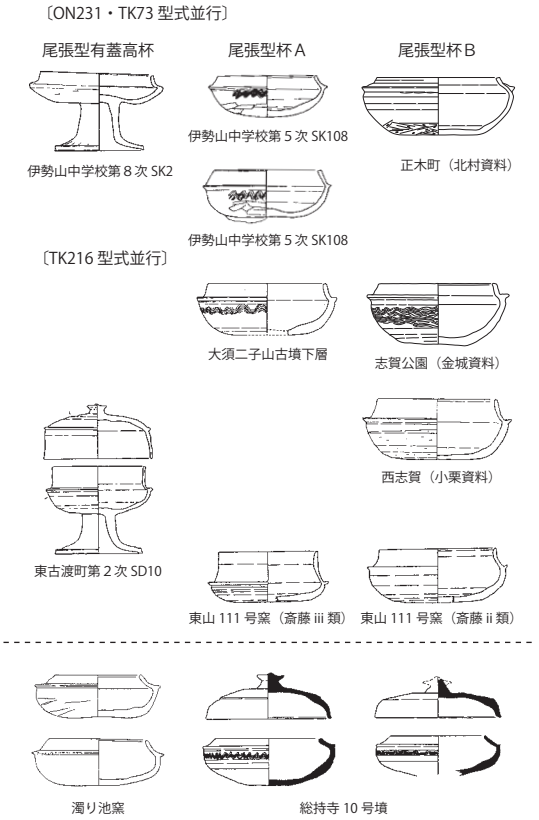


図 10　伊藤による羽釜形態の杯の変遷と関連資料 *

* 伊藤 2004、信太山遺跡調査団濁り池窯址班　1994『濁り池須恵器窯址』、大阪府教育委員会　2005『総持寺遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2004－２より作成

する一方、丸底を理由に最古とする伊藤の見解には疑問を呈している。

対して中里は羽釜形態の杯について、正木町遺跡（北村資料）、志賀公園遺跡（金城資料）の杯を（TG231・232 型式新相とする）ON231 号窯の杯に対比可能として、陶邑窯大野池地区から技術がもたらされたとすると同時に、志賀公園遺跡（金城資料）の杯の波状文施文に在地化の様相を看取する。そして、次段階には名古屋市中区大須二子山古墳下層の杯のように在地化が進む一方、改めて（TK73 型式古相とする）大野池地区の濁り池窯に近い工人が受け部の折り込み技法、丸底の底部をもたらしたとする。この見解は、陶邑窯大野池地区との継続的な技術交流を想定する中里の重要な論点ともなっている。

これに関連して、伊藤が淀川流域との関連をも視野に入れつつ例示した総持寺 10 号墳の蓋杯についても中里は陶邑窯大野池地区との類似を指摘するが、系譜関係については、〈中里Ａ案〉大野池地区→淀川流域（総持寺 10 号墳）→尾張（伊勢山中学校遺跡）、〈中里Ｂ案〉大野池地区→淀川流域（総持寺 10 号墳）・尾張（伊勢山中学校遺跡）のいずれか（後二者が“親子”関係か“兄弟”関係か）は、現状においてもなお、判断が難しいとするが、いずれにせよこれらの図式は陶邑窯よりも淀川流域との系譜関係を重視する伊藤の見解とは異なっている。

また伊藤は、「ON231・TK73 型式並行」の伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108 の杯が「TK216 型式並行」の大須二子山古墳下層の杯を経て（この段階をもって波状文が消失し）、東山 111 号窯の斎藤孝正の分類による iii 類(斎藤 1983)、つまり、口縁部の立ち上がりが著しく高い杯が成立するという。しかし、東山 111 号窯期が TK216 型式併行とすると、大須二子山古墳下層の杯は東山 111 号窯の杯 iii 類とほぼ同時期と考えられることになるが、両者の形態の隔たりはなお大きい。なお、中里は東山 111 号窯の蓋杯 iii 類が「内的要因で生まれたとすることにも無理がある」とする。

（4）その他

伊藤論文では、早野考察における器種分類を詳細に検討し、幾つかの誤りを指摘している。例えば、早野考察において「高杯形器台」とした鉢状の個体（568）は「鍋」であるとして、現状において志賀公園遺跡に高杯形器台は存在しないとしている。ここで、その指摘を受け入れ、「高杯形器台」とした器種分類を訂正する。なお、同様の器形は下原窯において確認され、「鉢類」として分類されている。さらに、SU11 出土の「無蓋高杯 A1」とした器種（543）は「台付鉢」または、「脚付鉢」とする。中久保辰夫は同様の器種を「把手付椀形高杯」と呼称し、北河内固有であることを指摘する（中久保 2017）。なお、伊藤、中里は伊勢山中学校遺跡や志賀公園遺跡で出土する無蓋高杯には把手を付さない特徴があることを指摘し、中里は把手を付す SU11 の「台付（脚付）鉢」を稀有な存在と指摘する。

4．綿神社遺跡の円窓付壷について

志賀公園遺跡の初期須恵器の一群でも異彩を放つのが、体部上位に焼成前の円窓を穿つ脚付壷である。類似する円窓付壷が志賀公園遺跡南東約 0.5km に所在する綿神社遺跡において出土していることは特に注目される。綿神社遺跡の円窓付壷（金城文化財保護委員会所蔵・名古屋市博物館寄託）については、その特異さから注目されることも多いが（吉田 1938、愛知県陶磁資料館 1982、瀬川 2008 等）、以前、簡単に触れたのみであるので（早野 2005）、ここで改めて実測図を提示し、資料の詳細を述べておきたい（図 11）。

綿神社遺跡の円窓付壷は昭和 7 年（1932）、綿神社裏修築工事中に発見された。口径 16.8cm、器高 28.0cm、体部最大径 28.8cm で、体部のやや上位に長径 10.2cm、短径 9.4cm の楕円形の窓を焼成前に穿つ。体部全面には平行叩きを施し、断続的な沈線を巡らす。なお、底部周囲はよく磨耗し、脚が脱落した痕跡も認められないことから、志賀公園遺跡の脚付壷とは異なり、脚は付されていなかったようである。

綿神社遺跡以外に加えて、円窓付甕は濁り池窯、堺市陶器・小角田遺跡 SK163（焼成前穿孔？）、春日井市下原窯における出土が知られている（図 12）。中里が名古屋台地と志賀公園

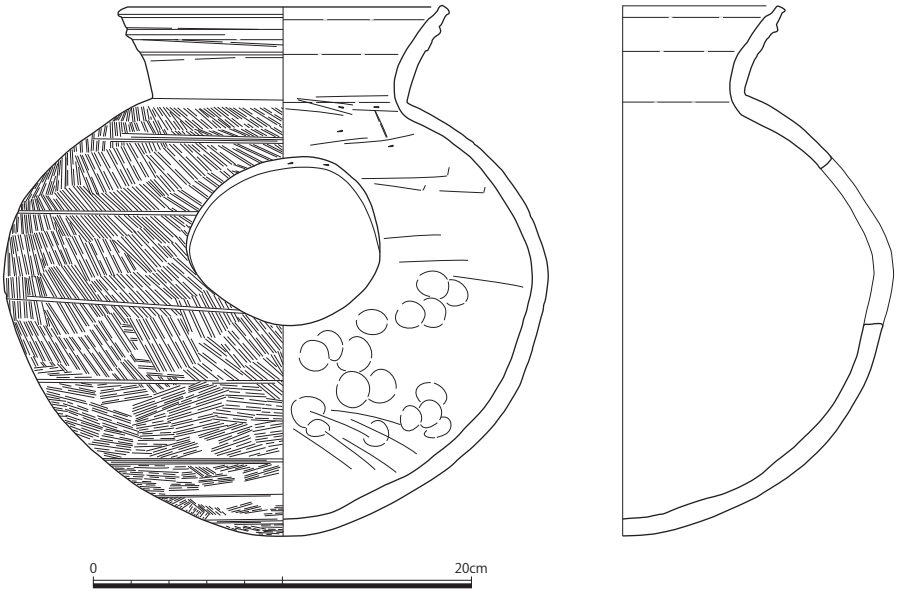


図 11　綿神社遺跡の円窓付壷

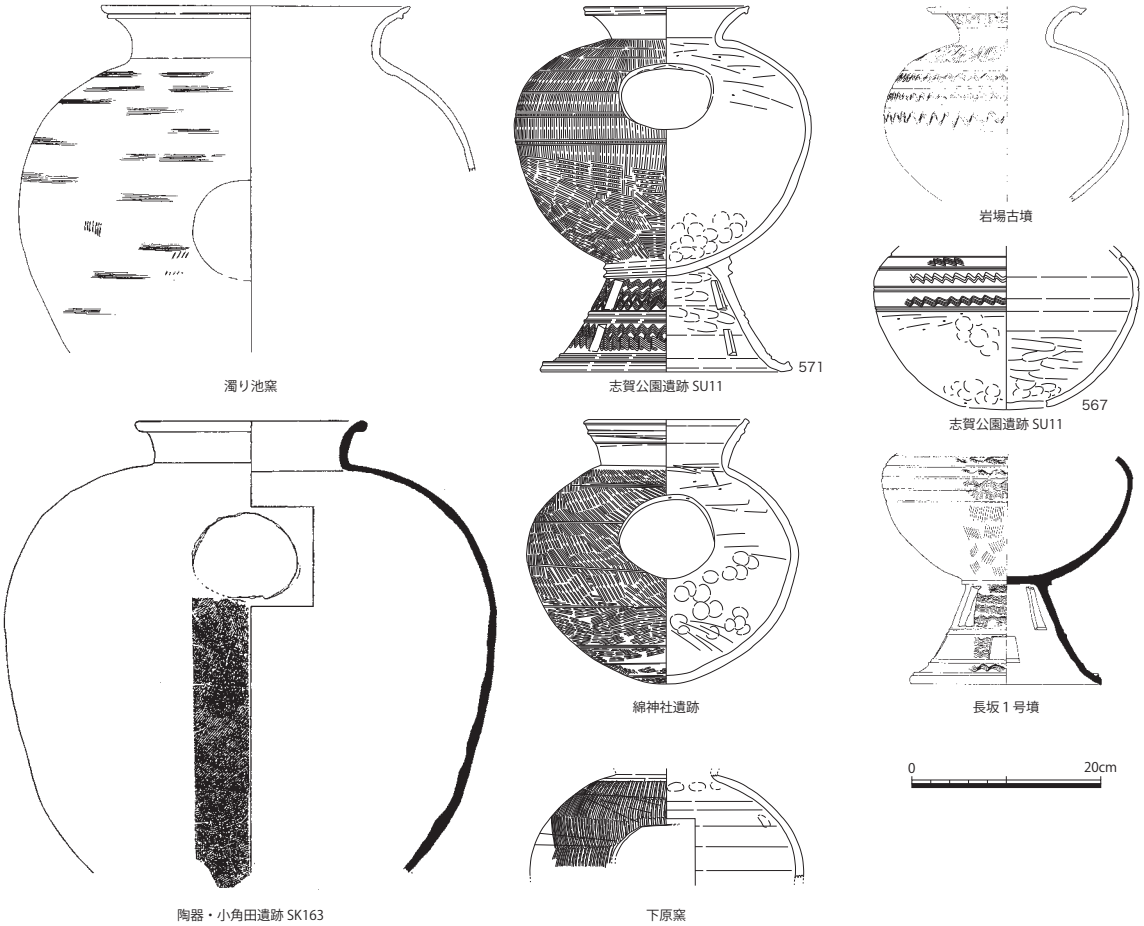


図 12　円窓付壷（脚付壷）とその関連資料 *

*　信太山遺跡調査団濁り池窯址班　1994『濁り池須恵器窯址』、堺市教育委員会　1988『陶器・小角田遺跡 II』、春日井市教育委員会　2006『下原古窯跡群』春日井市遺跡発掘調査報告第 12 集、鈴木敏則　1994「岩場古墳の鉄製品」『ホリデー考古』第 10 号　ホリデー考古刊行会、尾張旭市教育委員会　1977『印場大塚古墳』尾張旭市誌考古資料編第 1 集より

遺跡の初期須恵器の系譜の理解において濁り池窯を含めた陶邑窯大野池地区を重視していることは前述の通りである。また、下原窯の壷・甕類に、綿神社遺跡の円窓付壷に類似した口縁部の形状の個体も見受けられることをも勘案すると、綿神社遺跡の円窓付壷は東山 11 号窯期以降に帰属する可能性が高い。

なお、脚付壷としては尾張旭市長坂 1 号墳の個体が類似する。長坂古墳群は 6 基の小円墳から構成される古墳群で、長坂 1 号墳は共伴する埴輪、須恵器から城山 2 号窯期から東山 11 号窯期の築造と推定される。長坂 1 号墳の壷は体部中位付近に沈線による区画帯に波状文を施文し、2 本 1 単位の平行沈線（二子線）による文様区画内に波状文を施文する志賀公園遺跡 SU11（567）、西尾市岩場古墳の壷と文様構成を同じくする。岩場古墳は TK216 型式、東山 111 号窯期の築造である。

おわりに

以上、志賀公園遺跡と名古屋台地の初期須恵器にかかる論点をやや詳細に抽出し、若干の関連する資料も提示した。結果、その資料の価値は今日的にも非常に高いことが改めて認識された。それはひとえに伊藤や中里らが報告された資料に鋭い視座、観察眼を向けたことに尽きる。しかし今回は、土器の報告に携わった責任の一端を果たしたのみで、議論の前提となる遺跡、資料の検出状況に対する検討は決して十分ではない。発掘調査の検証は相当の困難も予測されるが、機会を改めて試みることとしたい。

志賀公園遺跡の報告書から本論の作成は、赤塚次郎、伊藤禎樹、中里信之各氏との接点を契機としている。また、一昨年から共同で当地域の須恵器を研究している大西遼、尾崎綾亮、中久保辰夫各氏からも多くの示唆を受けている。

資料調査に際しては、浅田博造（春日井市教育委員会）、大塚友恵（特定非営利活動法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク）、瀬川貴文・岡村弘子（名古屋市博物館）、松井伸伍（金城文化財保護委員会）各氏からのご高配があった。末尾ながら、記して深謝したい。

参考文献

赤塚次郎・早野浩二　2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第 2 号　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
愛知県陶磁資料館　1982『須恵器展』
伊藤禎樹　2004「尾張型須恵器の出現」『韓式系土器研究』Ⅷ　韓式系土器研究会
伊藤禎樹・小林義孝　1991「尾張正木町遺跡出土の初期須恵器」『韓式系土器研究』Ⅲ　韓式系土器研究会
岩崎直也　1987「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第 39 巻第 4 号　信濃史学会
大西　遼　2017「窯跡資料から見た東山窯開窯期の再検討」『考古学フォーラム』23　考古学フォーラム
尾野善裕　1997「尾張・西三河（窯跡）　猿投・尾北・その他」『古代の土器 5-1　7 世紀の土器』古代の土器研究会
斎藤孝正　1983「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』LXXXVI（史学 29）　名古屋大学文学部
斎藤孝正　1984「東海地方」『日本陶磁の源流―須恵器出現の謎を探る―』柏書房
城ヶ谷和広　2007「愛知県下における須恵器生産と流通」『研究紀要』第 8 号　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
瀬川貴文　2008「古墳時代の重要資料」『新修名古屋市史　資料編　考古 1』名古屋市
中久保辰夫　2017「初期須恵器の地域色と技術移動に関するノート」『考古学フォーラム』23　考古学フォーラム
中里信之　2014「名古屋台地とその周辺における初期須恵器の検討」『韓式系土器研究』XIII　韓式系土器研究会
中里信之　2015「須恵器の成立と東山窯」『韓式系土器研究』XIV　韓式系土器研究会
中里信之　2017「須恵器と東山窯成立研究の現状と展望」『考古学フォーラム』23　考古学フォーラム
早野浩二　2001「志賀公園遺跡における古墳時代中期の土器について」『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 90 集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二　2004「濃尾の韓式系土器」『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会
早野浩二　2005「ミヤケの地域的展開と渡来人―東海地方における朝鮮半島系土器の考察から―」『考古学フォーラム』17　考古学フォーラム
早野浩二　2012「尾張「古渡遺跡群」の形成過程とその構造」『前期古墳の変化と画期　古墳時代集落研究の再検討』考古学研究会例会シンポジウム記録 8
吉田富夫　1938「所謂円窓附土器及び其の新例に就いて」『考古学』第 9 巻第 8 号　東京考古学会

古墳時代後期ガラス小玉の製作技法 その３
—東三河２遺跡、西三河１遺跡の分析—

鈴木恵介・堀木真美子

古墳時代後期のガラス小玉の製作技法や組成について、新たに東三河２遺跡（蒲郡市平古古墳、同市竹谷城古墳）と西三河１遺跡（豊田市キヨツカ２号墳）出土分の分析を行った。これらの資料は、すでに報告されているものである。今回の分析も、これまでと同様に形状、組織、蛍光Ｘ線分析装置による分析を行った。今回の分析によって、西三河から東三河にかけて８遺跡の資料を網羅することができた。また、時期による製作技法の差を明らかにすることができた。また化学組成値には違いが認めれるもその違いの要因を掴むことはできなかった。

１．はじめに

平成 28 年度と 29 年度に、３遺跡から出土していたガラス小玉の分析を新たに実施した。平古古墳は蒲郡市柏原町平古に所在し、平成４年度調査によって象嵌装飾の鍔等とともに出土したもの。竹谷城古墳は蒲郡市竹谷町泉に所在し、平成 19 年度の調査によって耳環や管玉等と共に出土。キヨツカ２号墳は豊田市篠原町キヨツカに所在し、昭和 54 年度に調査が行われ、馬具や勾玉、切子玉、管玉等と共に出土したものである。

これら３遺跡から出土したガラス小玉の計測・分析と合わせて、これまで分析を行ってきた５遺跡の分析結果と比較を行った（図２･3）。

形状の分析は鈴木が、化学分析は堀木が行った。なおガラス小玉の組織について、堀木の行った化学分析の部分ではガラス小玉中の気泡の配列をもとに泡状組織と平滑組織に分類し、鈴木の行った形状分析では泡状組織をもつ試料を鋳型法、平滑組織をもつものを引き伸ばし法によるとした。なお文中の名称は「ガラス小玉」に統一している。ガラス小玉の詳細を示す場合の番号は各報告書掲載番号に基くが、豊田市キヨツカ２号墳は展示用として腕輪状に纏められており、その状態で番号を振り替えた。埋葬時期についても報告書に拠る。ただし須恵器編年の名称は愛知県史に拠り、一部を東海地方の名称に変更している。製作技法の観察方法や分析手法はこれまでと同様である。

２．新たに分析したガラス小玉出土遺跡

新たな分析対象のガラス小玉を出土した各遺跡の概要は、平古古墳は古墳時代後期の横穴式石室を有する円墳で復元径 11.6m、ガラス小玉の副葬は６世紀後葉と考えられている。竹谷城古墳は、中世の城跡である竹谷城の調査中に検出された古墳で、墳丘規模は明確ではないものの石室は竪穴系横口式石室で碧玉製管玉とガラス小玉の副葬は６世紀中～後半頃と考えられている。キヨツカ２号墳は土地造成中に

図１　分析を行った遺跡の位置 (S=1/1,250,000)

発見された古墳で、墳丘規模は明確では無く、横穴式石室を有する。キヨツカ２号墳は分析対象８遺跡中、唯一矢作川より西に位置する。

３．ガラス小玉の形状

分析を行った３遺跡のガラス小玉の形状について、図２に示した。平古古墳と竹谷城古墳の計測値は報告書に掲載されている数値を用い、キヨツカ２号墳については新たに計測を行った。

平古古墳出土のガラス小玉は、引き伸ばし法によるものは GH-001~008（写真１）、GH-020~050（報告書掲載番号）の 39 点、鋳型法によるものは GH-009~019（同）の 11 点の計 50 点。黄色のガラス小玉が多数含まれることが特徴的で、50 点中 31 点を占める。これらはは全て引き伸ばし法によって製作されている。大きさについても、出土した全点が小口長径 4mm 以上となり、他の遺跡に比較すると明らかに大きい。鋳型法で製作されたガラス小玉は小口長径 5mm 以下に分布する。

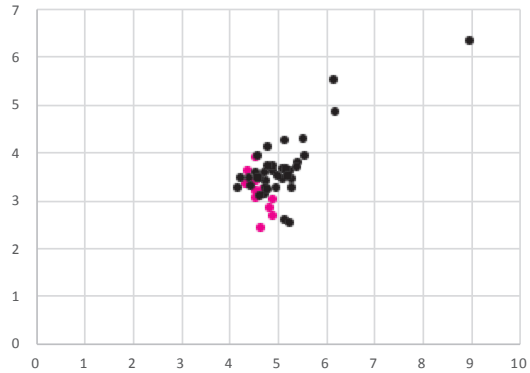
竹谷城古墳出土のガラス小玉は、引き伸ばし法によるもの 62 点（報告書第４表掲載番　号 76~90、92、97~99、101、103~105、108~113、117、121~124、126、127、129~154）、鋳型法によるもの 17 点（同 91、93~96、100、102、106、107、114~116、118~120、125、128）の計 79 点。平古古墳で多数確認された黄色の小玉は１点のみ含まれる。大きさは小口長径 4mm 以下が 72 点を占める。鋳型法で製作されたガラス小玉は 4mm 以下に分布する

キヨツカ２号墳出土のガラス小玉は、報告書では 69 点が報告されているが、今回の分析では、展示用に腕輪状にまとめられている 59 点を対象とした（写真１・２）。製作技法の内訳は、引き伸ばし法によるもの 48 点、鋳型法によるもの 11 点の計 59 点。大きさは小口長径４mm 以下のものが多い。鋳型法によるものは 11 点中２点がわずかに小口長径 4mm を超えるが、他は 4mm 以下となっている。

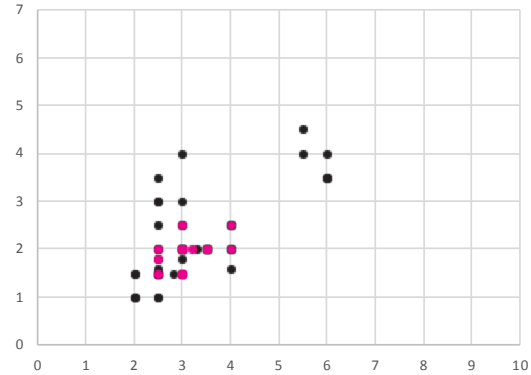
４．製作技法別の割合と副葬時期の関連

古墳時代後期の古墳埋納ガラス小玉の製作技法の全国的な傾向として、時期が降る、あるいは東日本ほど鋳型法の割合が増加することが指摘されている。

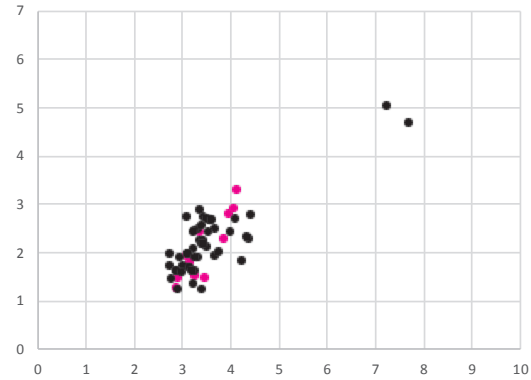
これまでに分析を行ったガラス小玉を出土した古墳は、三河地域に所在し、地域差は見出せ



平古古墳のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型

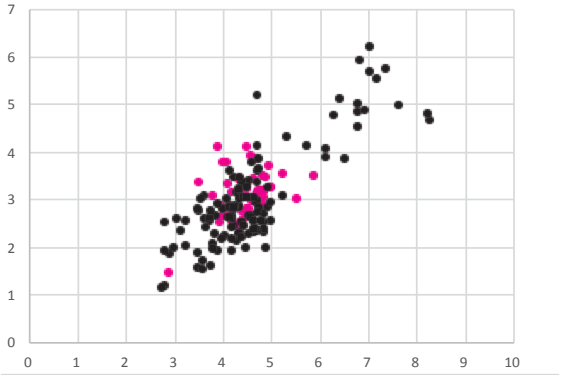


竹谷城古墳のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型

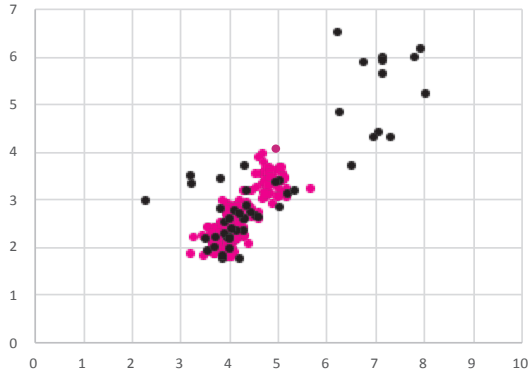


キヨツカ２号墳のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型

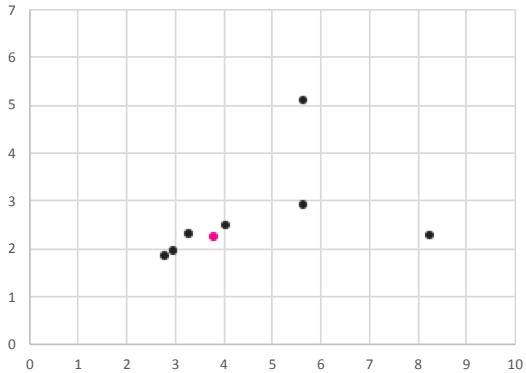
図２　新たに分析を行った３遺跡のガラス小玉の形状
（横軸・小口長径、縦軸・厚さ、単位 mm）



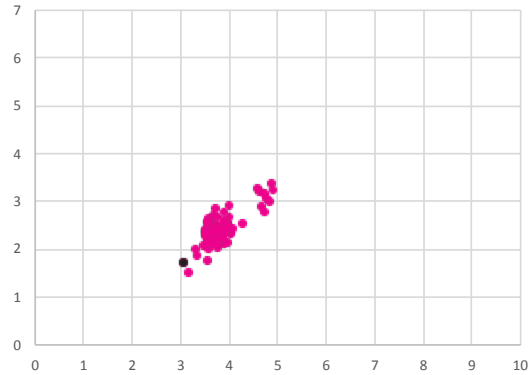
相生塚古墳のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型



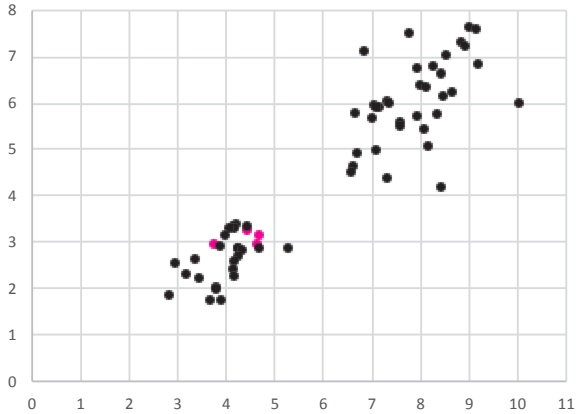
稲荷山１号墳のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型



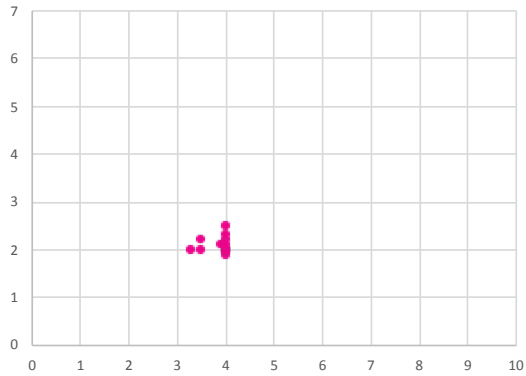
車塚遺跡 080SZ のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型



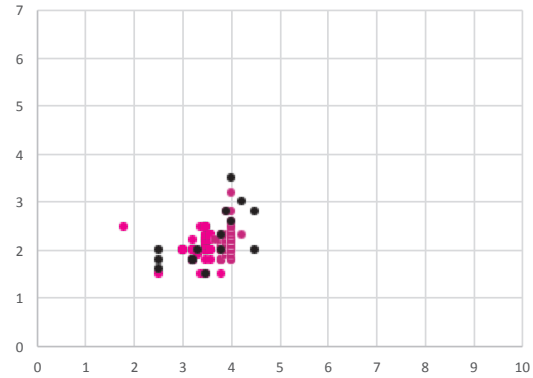
車塚遺跡 888SZ のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型



荒山１号墳のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型



岩長遺跡 ST05 のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型



岩長遺跡 ST06 のガラス小玉形状　黒：引き伸ばし　赤：鋳型

図３　これまでに分析を行った５遺跡のガラス小玉の形状（横軸・小口長径、縦軸・厚さ、単位 mm）

無いと思われるが、副葬時期の違いでは、鋳型法が占める割合の増加がH-15窯式期以降の車塚遺跡888SZ（岡崎市）、岩長遺跡ST06（豊田市）、岩長遺跡ST05（同）で顕著である（表1、図5）。

しかし、稲荷山1号墳およびキヨツカ2号墳は追葬時期を含めると幅があり、稲荷山1号墳は、今回は同一の分布図に統合しているが、出土状況からB、C、Eの3グループに分割され、追葬の時期が異なる装飾品の一部として副葬された可能性もあるが、最多の点数であるC群でも253点中200点が鋳型法によるものが約8割を占める。稲荷山1号墳は蝮ケ池～H-44窯式期初葬後、H-15窯式期まで副葬が行われたと考えられており、副葬の時期が早かった場合は、鋳型法が多数を占めるH-15窯式期以前の例となる。

反対に、キヨツカ2号墳（豊田市）は追葬時のH-15窯式期の副葬と考えられており、こちらは引き伸ばし法が多い例となる。

H-10~H-61窯式期頃の相生塚古墳（豊橋市）、H-61~H-44窯式期頃の平古古墳（蒲郡市）、竹谷城古墳（蒲郡市）、荒山1号墳（豊田市）、車塚遺跡080SZ（岡崎市）は点数に差はあるものの引き伸ばし法が7割以上を占める。H-15窯式期以降には出土ガラス小玉の点数自体が282点（全672点中。稲荷山1号墳を除く）と減少し、内219点、約78%が鋳型法となる。

5．ガラス小玉の形状分布

平古古墳のガラス小玉が他より大きいことは先述したが、今回分析を行った3遺跡中、近在する平古古墳と竹谷城古墳の2遺跡のガラス小玉の法量を比較した（図4）。

竹谷城古墳の法量分布は小口径4mm以下が多数を占めるが、平古古墳では4mm以上となり、竹谷城古墳では空白となっている小口径5mm前後を平古古墳の分布が占める状況となっている。

これまで分析を行ってきた、荒山1号墳、岩長遺跡ST05・ST06、車塚遺跡080SZ、888SZでも5mm前後はほぼ空白、相生塚古墳、稲荷山1号墳では、5mm以下に多数分布し、5mm

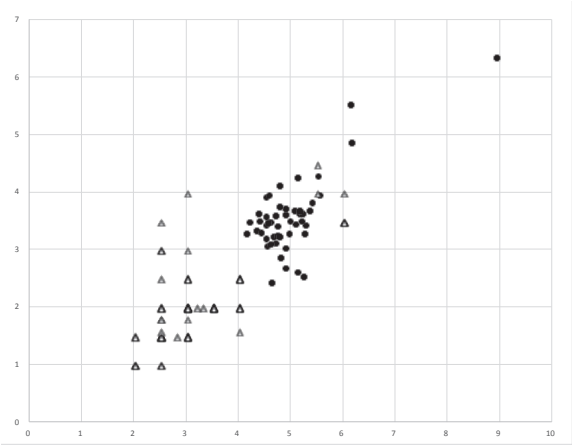


図4　平古古墳と竹谷城古墳の形状比較
△竹谷城古墳　▲平古古墳
（横軸・小口長径、縦軸・厚さ、単位mm）

を越えると極端に分布が減る状況である。他の遺跡と比較すると、平古古墳出土ガラス小玉の法量分布状況が5mm以上に多い状況は特徴的であり、ガラス小玉の色調に黄色が多数を占めることと合わせて、他の古墳出土ガラス小玉と比較すると異なった形状を示している。（鈴木）

6．ガラス小玉の組織と成分

（1）分析方法について

今回、測定を実施した試料は、平古古墳50個、竹谷城古墳79個、キヨツカ2号墳59点である。先の報告（鈴木ほか　2016、2015など）と同様に非破壊での分析を行った。測定には1試料につき3カ所、できるだけなめらかな箇所を設定した。使用した装置は（株）堀場製作所製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置XGT-5000XIIである。測定条件は、励起電圧：30kV、電流：自動設定、計測時間：300s、X線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、X線照射径：100μmである。また測定の結果から、比較を容易にするために、ファンダメンタルパラメータ法による定量分析を行った。特定の酸化物をNa_2O、MgO、Al_2O_3、SiO_2、K_2O、CaO、TiO、MnO、Fe_2O_3、CoO、CuOの11種と特定して、100%になるように算出した。

（2）各遺跡間と化学分析結果について

図6に、今回の3遺跡の分析結果から作成したMnO-K_2Oグラフを示す。主にガラス小玉

表１　各古墳出土ガラス小玉の副葬時期と製作技法別点数

	H-10窯式期 (MT15)	H-61窯式期 (TK10)	蝮ヶ池窯式期 (TK43)	H-44窯式期 (TK209)	H-15窯式期 (TK209)	H-16窯式期 (TK217)	I-17窯式期
相生塚古墳	188(引:135、鋳:53)						
稲荷山1号墳			283(引:55、鋳:228)				
平古古墳			50(引:39、鋳:11)				
竹谷城古墳		79(引:62、鋳:17)					
車塚080SZ			8(引:7、鋳:1)				
車塚888SZ					101(引:1、鋳:100)		
荒山1号墳			65(引:61、鋳:4)				
岩長ST06					108(引:14、鋳:94)		
岩長ST05							14(鋳:14)
キヨツカ2号墳				59(引:48、鋳:11)			

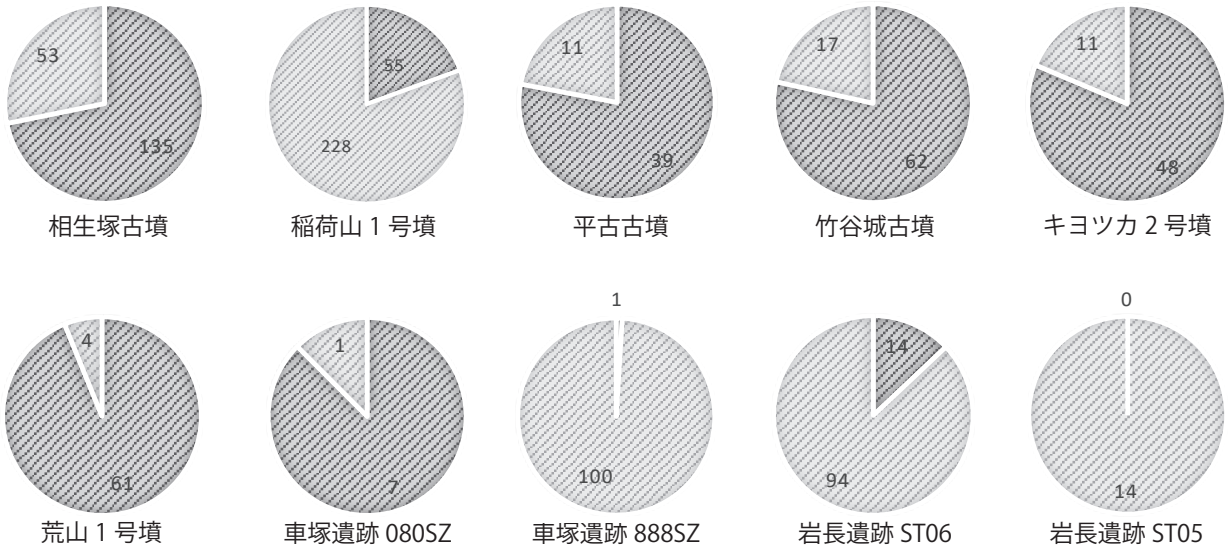


図５　各古墳出土ガラス小玉製作技法点数

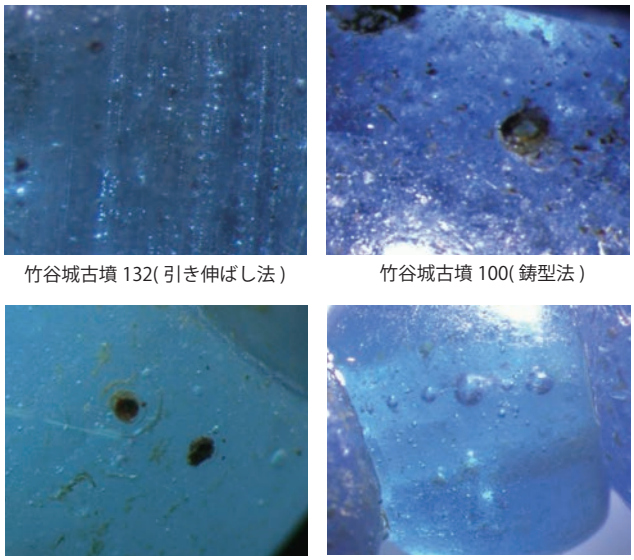

竹谷城古墳 132(引き伸ばし法)
竹谷城古墳 100(鋳型法)
平古古墳 GH-006(引き伸ばし法)
キヨツカ２号墳 M25(引き伸ばし法)

写真１　各古墳出土ガラス小玉拡大写真

写真２　キヨツカ２号墳出土ガラス小玉の番号

の組織（気泡の様子）に基づき作成したものである。今回の３遺跡のものは比較的よく似た分布域に止まっている。また組織による違いは、平滑なものの方がまとまりがよく、泡状組織のものは、Mn が多く含まれるようになる。

図６にこれまでに行ってきた試料との比較を行う。泡状組織を持つものが Mn の量が多くなることは、荒山１号墳以外では共通している。荒山１号墳は４点しか泡状組織を持たないことから不明である。また平古古墳、竹谷城古墳、相生塚古墳、岩長古墳 ST05 の５遺跡のものは、よくまとまった組成値を示している。

（３）黄色のガラス小玉について

８遺跡のうちキヨツカ２号墳から４点、相生塚古墳から４点、平古古墳から 31 点、竹谷城古墳から１点の合計 40 点の黄色いガラス小玉が確認された。これらの組成値比較すると、平古古墳では MgO によって大きく２分される。また、相生塚古墳では MgO と K_2O によって２種類となると考える。またキヨツカ２号墳のものも MgO と CaO、MnO により、３種類に分類できる。が、竹谷城古墳のものは、MgO や K_2O などの含有量から、いずれのものとも似ているとは判断できなかった（表２）。

まとめ

三河地域の８遺跡（10 遺構）の出土ガラス小玉について分析を行った。

形状と製作技法については、副葬時期を加味すると稲荷山１号墳とキヨツカ２号墳が他遺跡とは異なった傾向を示したが、これが地域差と呼べるかどうかの判断は周辺地域も含めた検討を要する。

化学分析では、今回はガラス小玉の組織と化学組成の関係に着目したが、明確な方向性を見いだすことはできなかった。しかし鋳型法で作られた（泡状組織をもつ）ガラス小玉の組成値のばらつきは、供給地や作成技術などの情報として捉えることができるかもしれない。

参考文献

大賀克彦　2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群 小羽山丘陵における古墳の調査』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書５ 清水町教育委員会

大賀克彦　2010「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊 文化財』566 号 文化庁文化財部

小村美代子　2003「烏帽子遺跡の土坑出土ガラス小玉、ガラス製勾玉の成分分析」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 117 集「烏帽子遺跡Ⅱ」, 愛知県埋蔵文化財センター ,53-54,

小瀬康行　1987「管切法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌 73－2』

肥塚隆保　1995「古代珪酸塩ガラスの研究」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所 ,929-967.

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦　2010「 材質とその歴史的変遷」『月刊 文化財』566 号 ,13-25.

酒巻忠史　2002「鋳造技法によるガラス小玉の特徴と類例」『國學院大学考古学資料館紀要』第 18 輯

新修豊田市史編纂委員会　2015『新修豊田市史　資料編 考古Ⅱ 弥生・古墳』

鈴木恵介・堀木真美子　2015「古墳時代後期ガラス小玉の製作技法 - 矢作川左岸地域３遺跡の分析から -」『研究紀要』第 16 号 愛知県埋蔵文化財センター ,31-38.

鈴木恵介・堀木真美子　2016「古墳時代後期ガラス小玉の製作技法 その２―東三河２遺跡の分析―」研究紀要 第 17 号　愛知県埋蔵文化財センター ,87-98.

富樫雅彦　2003「弥生・古墳時代のガラス」『考古資料大観』第６巻 小学館

福島雅儀　2006「古墳時代ガラス玉の製作技法とその痕跡」『考古学と自然科学』第 54 号 日本文化財科学会

堀木真美子　2005「蛍光Ｘ線分析装置 XGT-5000 により基本データ収集 - その 1-」『研究紀要』第６号 愛知県埋蔵文化財センター ,12-17.

堀木真美子　2006「弥生時代および古墳時代のガラス玉の化学組成」『研究紀要』第７号 愛知県埋蔵文化財センター ,144-150.

堀木真美子　2004「荒山古墳出土のガラス玉の蛍光Ｘ線分析」『荒山古墳群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 128 集 愛知県埋蔵文化財センター ,34-48.

愛知県史編さん委員会　2005『愛知県史 資料編３ 考古３古墳』

愛知県埋蔵文化財センター　2004『荒山古墳群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 128 集

愛知県埋蔵文化財センター　2015『車塚遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 190 集

蒲郡市教育委員会　2015「埋蔵文化財発掘調査報告書―竹谷城跡・五井城跡・形原城跡―」蒲郡市博物館編

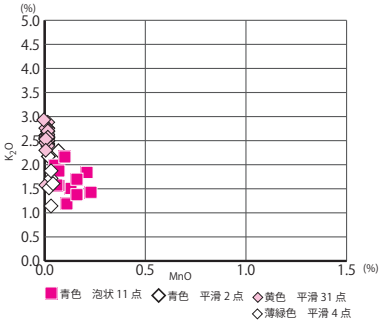
蒲郡市教育委員会　2016「馬乗古墳群・平古古墳・権現山古墳・三月田第２・３号墳・丸山古墳」蒲郡市博物館編

豊田市教育委員会　2000『岩長遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 15 集

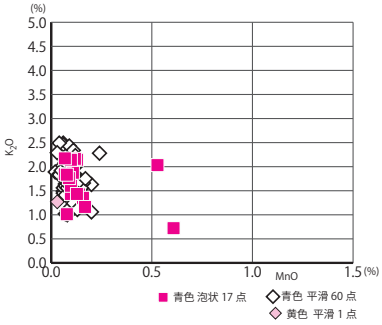
豊橋市教育委員会　2015『市内遺跡発掘調査』- 平成 24 年度 - 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 135 集

豊橋市教育委員会　2008『稲荷山古墳群（Ⅱ）』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 108 集

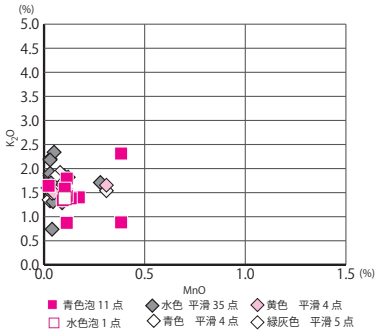
平古古墳



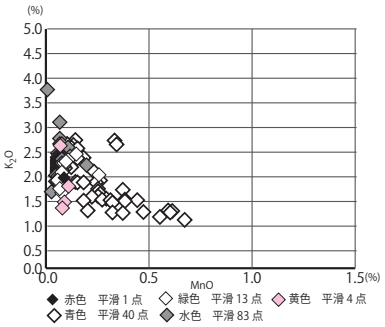
竹谷城古墳



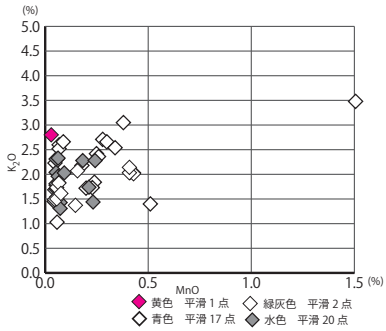
キヨツカ 2 号墳



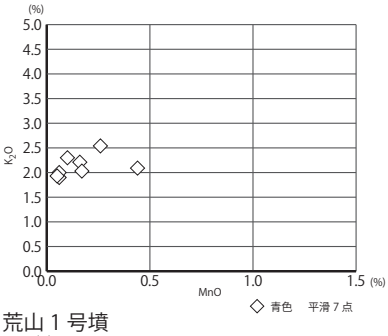
相生塚古墳



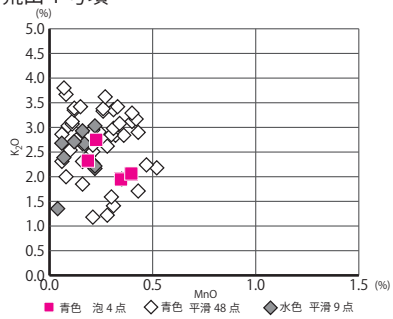
稲荷山 1 号墳



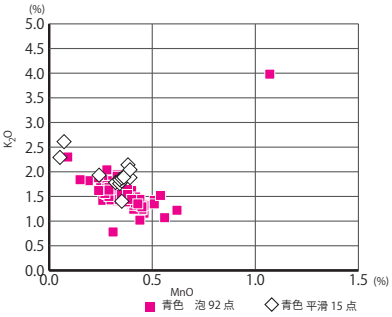
車塚遺跡　080SZ



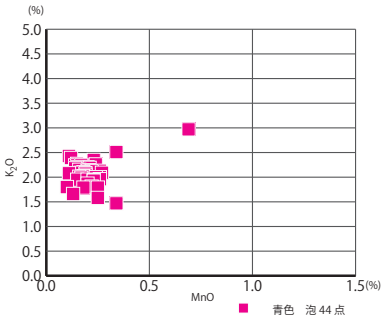
荒山 1 号墳



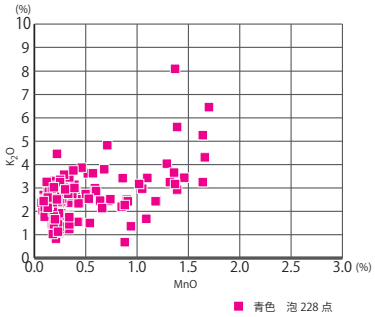
岩長遺跡　ST06



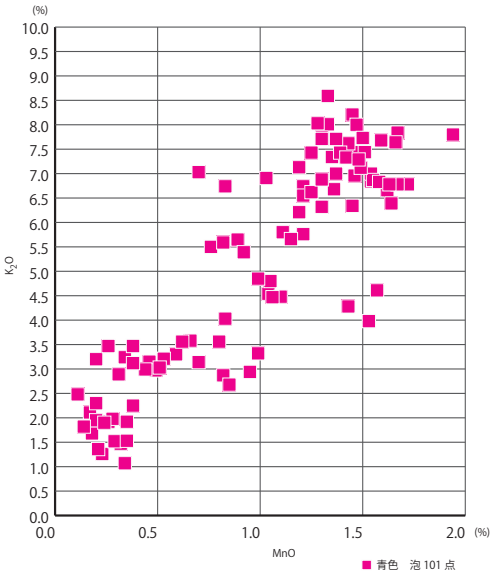
相生塚古墳



稲荷山 1 号墳



車塚遺跡　888SZ



岩長遺跡　ST05

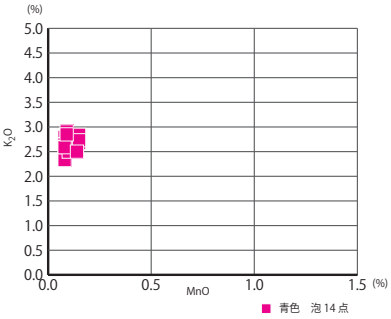


図 6　各遺跡毎の MnO-K2O 図

謝 辞

出土遺物の借用にあたり、諸機関のご協力をいただきました。記して感謝します。

蒲郡市教育委員会
豊田市教育委員会

表２　キヨツカ２号墳と黄色のガラス小玉の分析結果

キヨツカ古墳　ガラス玉　簡易化学組成値

	色調	表面	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO 2	MnO	Fe2O3	CoO	CuO	PbO	total
M53	緑灰	平滑	7.32	0.61	10.30	75.99	1.77	1.69	0.42	0.04	1.41	0.00	0.24	0.21	100.00
M33	緑灰	平滑	6.81	0.46	10.99	76.12	1.42	2.39	0.30	0.03	1.12	0.00	0.17	0.12	99.92
M37	緑灰	平滑	7.30	0.56	10.21	75.28	1.89	2.26	0.46	0.06	1.58	0.00	0.28	0.26	100.14
M38	緑灰	平滑	7.25	0.88	10.50	75.00	1.38	2.31	0.44	0.05	1.79	0.00	0.25	0.16	100.00
M51	緑灰	平滑	7.13	0.44	11.68	74.81	1.65	1.92	0.42	0.05	1.46	0.00	0.27	0.22	100.04
M39	紺	平滑	1.69	0.63	3.44	85.97	0.89	5.46	0.12	0.12	1.19	0.08	0.22	0.21	100.01
M56	紺	平滑	2.98	1.93	4.20	83.01	1.92	4.96	0.16	0.08	0.72	0.03	0.03	0.02	100.03
M58	紺	平滑	2.13	1.83	4.73	83.51	1.54	4.77	0.31	0.31	0.97	0.02	0.07	0.03	100.22
M59	紺	平滑	1.06	1.29	4.09	86.40	1.43	4.34	0.19	0.10	0.94	0.05	0.06	0.04	99.98
M45	透明紺	平滑	7.92	3.55	3.50	77.66	2.18	4.34	0.10	0.03	0.64	0.01	0.04	0.03	100.00
M01	透明水	平滑	2.79	0.16	8.63	82.71	1.71	1.60	0.67	0.28	1.11	0.00	0.32	0.00	99.99
M02	透明水	平滑	7.30	0.28	8.19	76.60	1.55	4.67	0.40	0.04	0.75	0.00	0.21	0.00	99.99
M04	透明水	平滑	6.87	0.22	9.76	75.62	1.63	4.46	0.39	0.04	0.79	0.00	0.21	0.00	99.98
M05	透明水	平滑	7.39	0.09	8.38	77.39	1.85	3.62	0.40	0.03	0.71	0.00	0.22	0.00	100.10
M06	透明水	平滑	7.07	0.07	8.13	77.25	1.62	4.46	0.39	0.04	0.76	0.00	0.22	0.00	100.00
M07	透明水	平滑	7.13	0.14	8.32	77.16	1.72	4.13	0.38	0.04	0.76	0.00	0.22	0.00	100.00
M08	透明水	平滑	6.89	0.11	8.25	77.06	1.58	4.67	0.40	0.04	0.78	0.00	0.22	0.00	100.00
M10	透明水	平滑	7.19	0.09	9.22	75.54	1.60	4.88	0.40	0.04	0.80	0.00	0.23	0.00	100.00
M11	透明水	平滑	7.12	0.23	8.17	76.75	1.63	4.65	0.39	0.03	0.79	0.00	0.22	0.00	99.99
M12	透明水	平滑	7.10	0.00	8.94	75.92	1.60	4.95	0.42	0.04	0.81	0.00	0.22	0.01	100.02
M14	透明水	平滑	7.02	0.05	8.47	77.13	1.58	4.37	0.37	0.04	0.75	0.00	0.21	0.00	100.00
M16	透明水	平滑	5.12	0.00	9.80	79.33	1.90	2.34	0.39	0.03	0.85	0.00	0.25	0.00	100.00
M17	透明水	平滑	7.43	0.17	8.31	77.05	1.51	4.23	0.37	0.03	0.69	0.00	0.19	0.00	100.00
M18	透明水	平滑	6.28	0.18	8.34	77.83	1.67	4.34	0.38	0.03	0.73	0.00	0.21	0.00	100.00
M19	透明水	平滑	6.88	0.38	9.04	76.23	1.63	4.45	0.40	0.04	0.76	0.00	0.21	0.00	100.00
M21	透明水	平滑	3.26	0.18	12.13	78.28	2.34	2.58	0.21	0.05	0.75	0.00	0.21	0.01	100.00
M22	透明水	平滑	6.60	0.21	8.85	78.54	1.85	2.35	0.41	0.10	0.78	0.00	0.28	0.03	99.99
M23	透明水	平滑	6.88	0.27	8.28	76.86	1.56	4.78	0.39	0.04	0.73	0.00	0.21	0.00	100.00
M25	透明水	平滑	6.74	0.32	9.30	77.51	1.82	2.66	0.44	0.12	0.80	0.00	0.30	0.00	100.00
M27	透明水	平滑	6.59	0.02	8.57	77.50	1.65	4.33	0.39	0.04	0.72	0.00	0.20	0.00	100.01
M29	透明水	平滑	5.84	0.01	9.02	77.27	1.66	4.77	0.40	0.04	0.76	0.00	0.21	0.00	100.00
M32	透明水	平滑	7.36	0.29	7.97	77.05	1.56	4.44	0.38	0.03	0.72	0.00	0.20	0.00	99.99
M34	透明水	平滑	6.42	0.11	8.85	77.27	1.49	4.50	0.38	0.04	0.73	0.00	0.20	0.00	100.00
M40	透明水	平滑	7.04	0.16	8.28	77.43	1.51	4.30	0.37	0.04	0.68	0.00	0.19	0.01	100.00
M41	透明水	平滑	7.57	0.50	7.97	76.91	1.66	4.06	0.38	0.03	0.70	0.00	0.20	0.00	100.00
M42	透明水	平滑	6.02	0.08	9.33	77.25	1.55	4.41	0.38	0.04	0.73	0.00	0.21	0.00	99.99
M46	透明水	平滑	1.55	0.18	11.47	82.06	1.60	1.57	0.41	0.02	0.66	0.00	0.45	0.03	100.00
M47	透明水	平滑	7.13	0.29	8.63	76.89	1.56	4.21	0.37	0.03	0.67	0.01	0.19	0.00	99.98
M49	透明水	平滑	2.98	0.05	9.28	81.10	1.59	3.52	0.41	0.10	0.70	0.00	0.23	0.03	99.99
M55	透明水	平滑	4.74	0.27	10.39	79.36	2.20	1.41	0.62	0.03	0.91	0.00	0.11	0.01	100.04
M48	濁水	平滑	7.37	0.37	10.23	75.82	1.33	2.88	0.36	0.03	1.36	0.00	0.32	0.01	100.09
M50	濁水	平滑	7.22	0.02	10.54	76.46	1.57	2.58	0.40	0.09	0.78	0.00	0.28	0.06	100.00
M28	濁水	平滑	3.91	0.34	6.57	85.77	0.74	0.59	0.59	0.04	1.19	0.00	0.25	0.00	99.99
M03	紺	泡	1.93	1.21	6.91	81.18	1.81	5.36	0.20	0.12	1.13	0.04	0.06	0.05	100.01
M13	紺	泡	2.65	1.19	5.75	82.74	1.48	4.59	0.19	0.12	1.06	0.05	0.07	0.05	99.93
M20	紺	泡	3.53	0.41	7.51	83.78	0.90	1.07	0.57	0.39	1.45	0.00	0.36	0.02	99.99
M24	紺	泡	3.49	1.07	9.80	77.39	1.42	4.84	0.22	0.18	1.42	0.05	0.07	0.05	99.99
M26	紺	泡	3.04	1.14	7.04	80.76	1.40	5.02	0.22	0.14	1.12	0.04	0.06	0.04	100.04
M30	紺	泡	0.85	0.49	13.89	76.01	1.45	4.34	0.37	0.12	2.33	0.02	0.05	0.04	99.96
M31	紺	泡	1.04	0.88	12.64	76.89	1.36	4.26	0.24	0.10	2.44	0.03	0.06	0.05	100.00
M36	紺	泡	3.33	0.56	15.40	72.53	1.60	3.99	0.36	0.11	1.91	0.03	0.11	0.04	99.97
M43	紺	泡	4.89	1.48	4.99	80.99	1.40	4.71	0.21	0.11	1.08	0.04	0.07	0.04	100.00
M52	紺	泡	3.78	0.98	11.25	76.64	1.29	4.11	0.29	0.09	1.41	0.04	0.06	0.06	99.99
M54	紺	泡	3.59	0.53	13.34	75.94	2.33	2.23	0.23	0.39	1.34	0.02	0.04	0.03	99.99
M09	濁水	泡	7.19	0.33	11.24	74.64	1.66	2.93	0.31	0.03	1.03	0.00	0.61	0.12	100.09
M15	黄	平滑	7.35	0.65	10.20	75.27	1.53	2.39	0.44	0.04	1.59	0.00	0.00	0.53	100.00
M35	黄	平滑	6.36	0.53	10.72	76.90	1.61	2.09	0.33	0.03	0.87	0.00	0.01	0.54	99.99
M44	黄	平滑	2.68	0.36	9.01	82.64	1.70	1.20	0.57	0.31	0.63	0.01	0.00	0.86	99.98
M57	黄	平滑	6.27	0.12	7.97	81.25	1.54	1.09	0.52	0.05	0.78	0.00	0.00	0.40	99.98

		色調	表面	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO 2	MnO	Fe2O3	CoO	CuO	PbO	total
相生塚	Al-113	黄	平	6.67	0.33	7.93	76.07	1.94	1.50	0.74	0.07	1.49	0.03	0.02	3.19	99.99
相生塚	Al-143	黄	平	6.44	0.33	6.43	79.32	1.62	1.23	0.59	0.05	1.44	0.03	0.05	2.48	100.00
相生塚	Al-207	黄	平	3.87	0.31	6.70	81.12	1.50	1.26	0.61	0.04	1.40	0.02	0.05	3.12	100.01
相生塚	Al-206	黄	平	7.02	0.03	10.78	72.23	2.76	1.66	0.51	0.03	1.19	0.01	0.01	3.76	100.01
平古	GH-040	黄	平	6.29	0.00	12.41	75.28	2.51	1.59	0.37	0.02	0.67	0.01	0.00	0.84	99.99
平古	GH-025	黄	平	6.46	0.00	10.58	77.67	2.60	1.26	0.29	0.02	0.51	0.01	0.00	0.62	100.02
平古	GH-039	黄	平	7.50	0.00	10.79	76.23	2.64	1.38	0.32	0.02	0.51	0.00	0.00	0.60	99.99
平古	GH-032	黄	平	7.65	0.00	11.23	75.83	2.57	1.27	0.32	0.02	0.48	0.01	0.01	0.62	100.01
平古	GH-030	黄	平	7.65	0.00	11.53	75.17	2.70	1.31	0.35	0.02	0.56	0.00	0.00	0.70	99.99
平古	GH-047	黄	平	7.65	0.00	10.45	76.37	2.47	1.31	0.30	0.01	0.30	0.01	0.00	0.96	99.83
平古	GH-042	黄	平	7.72	0.00	11.12	75.78	2.57	1.29	0.32	0.01	0.45	0.01	0.00	0.72	99.99
平古	GH-046	黄	平	7.72	0.00	11.12	75.73	2.57	1.27	0.30	0.02	0.45	0.00	0.01	0.81	100.00
平古	GH-035	黄	平	7.73	0.00	11.17	75.75	2.55	1.31	0.32	0.01	0.50	0.00	0.01	0.42	99.77
平古	GH-036	黄	平	7.73	0.00	11.03	75.77	2.61	1.32	0.30	0.01	0.48	0.00	0.01	0.74	100.00
平古	GH-037	黄	平	7.81	0.00	11.46	75.38	2.55	1.48	0.30	0.02	0.51	0.00	0.00	0.48	99.99
平古	GH-023	黄	平	7.82	0.00	10.59	76.21	2.62	1.28	0.32	0.01	0.47	0.01	0.00	0.67	100.00
平古	GH-034	黄	平	7.53	0.01	11.38	75.50	2.76	1.37	0.32	0.02	0.50	0.01	0.01	0.59	100.00
平古	GH-029	黄	平	7.76	0.01	10.98	75.93	2.51	1.32	0.37	0.02	0.47	0.01	0.00	0.62	100.00
平古	GH-031	黄	平	7.73	0.02	11.34	75.52	2.60	1.36	0.28	0.02	0.48	0.01	0.00	0.63	99.99
平古	GH-026	黄	平	5.04	0.04	11.47	77.79	2.70	1.28	0.34	0.02	0.59	0.00	0.00	0.73	100.00
平古	GH-044	黄	平	6.88	0.06	12.06	75.27	2.77	1.46	0.32	0.01	0.58	0.01	0.00	0.58	100.00
平古	GH-022	黄	平	6.75	0.08	11.04	76.66	2.48	1.38	0.31	0.01	0.44	0.00	0.01	0.85	100.01
平古	GH-024	黄	平	7.60	0.08	11.73	75.37	2.43	1.24	0.29	0.02	0.48	0.01	0.00	0.78	100.03
平古	GH-021	黄	平	7.57	0.10	10.24	77.07	2.45	1.20	0.26	0.02	0.44	0.00	0.01	0.64	100.00
平古	GH-041	黄	平	7.30	0.12	11.91	74.83	2.57	1.49	0.35	0.02	0.55	0.00	0.01	0.85	100.00
平古	GH-048	黄	平	7.65	0.16	11.37	75.34	2.58	1.31	0.32	0.02	0.54	0.00	0.00	0.67	99.96
平古	GH-033	黄	平	5.96	0.31	12.08	75.50	2.77	1.50	0.36	0.02	0.75	0.01	0.00	0.71	99.97
平古	GH-027	黄	平	7.76	0.37	10.88	75.72	2.49	1.25	0.33	0.02	0.44	0.01	0.00	0.76	100.03
平古	GH-050	黄	平	7.98	0.37	9.78	76.95	2.31	1.15	0.29	0.01	0.42	0.01	0.00	0.72	99.99
平古	GH-028	黄	平	7.56	0.38	11.55	74.85	2.89	1.38	0.30	0.02	0.57	0.00	0.00	0.49	99.99
平古	GH-045	黄	平	7.63	0.43	11.47	75.16	2.71	1.44	0.33	0.02	0.54	0.01	0.00	0.27	100.01
平古	GH-043	黄	平	7.29	0.44	12.78	74.15	2.40	1.34	0.31	0.02	0.57	0.01	0.00	0.70	100.01
平古	GH-038	黄	平	7.31	0.55	11.26	75.33	2.51	1.34	0.30	0.02	0.49	0.00	0.00	0.88	99.99
平古	GH-049	黄	平	7.24	0.61	10.14	76.27	2.54	1.28	0.31	0.01	0.45	0.00	0.00	0.55	99.40
平古	GH-020	黄	平	5.14	0.63	5.78	84.30	1.59	1.10	0.37	0.01	0.50	0.01	0.00	0.57	100.00
竹谷城	131	黄	平	7.43	0.01	7.68	79.77	1.27	2.23	0.35	0.03	0.60	0.00	0.06	0.57	100.00

鳥の子皿稿

—伝世した白磁の皿—

小澤一弘*・堀木真美子

*愛知県埋蔵文化財センター専門委員

中国宋代の定窯の白磁に倣った白磁を、茶人が淡黄色で光沢のある白い鶏卵に似ていることから「鳥の子手」「鳥子」と称した。伝世した白磁の皿より「鳥の子」製品について検討した。『策彦入明記』と茶会記から「トリ皿」にはじまり「鳥皿」「鳥の子」への名称の変遷をたどり、遺跡出土品と茶会記から天正年間以前に「鳥の子」が存在していたことをあきらかにするとともに、名称では天文16年頃にさかのぼる可能性があることを推察した。

今回紹介した伝世品の釉薬や覆輪などの蛍光X線分析を行った。その結果、覆輪が真鍮製であることが判明した。

1．はじめに

「鳥の子」とは、一般的には和紙の一種を指し示す名で、鶏卵のような光沢のある淡黄色の和紙で、滑らかな肌合いが鶏卵を連想されることから「鳥の子」の名称が付いたと言われる。

この「鳥の子」を冠した「やきもの」が伝世品の中に見られる。中国宋代の定窯の白磁に倣った白磁を、茶人が淡黄色で光沢のある白い鶏卵に似ていることから「鳥の子手」、「鳥子」と称したとされる。ここでは伝世品を紹介し、遺跡出土品、茶会記から、「鳥の子皿」について考えてみたい。

2．伝世品

腰折れの端反皿、平底皿、五花平底皿、向付等がある。器種名の前の番号は実測図番号。表1に伝世品法量表。

（Ⅰ）箱書に『唐物　平茶碗』とある。

図1、写真1。

1. 端反皿（盤）　口径 16.4cm　高台径 5.6cm
　　器高 3.2cm　重さ 161.1g

腰部に稜のある腰折れした端反の浅い皿で高台には兜巾が見られる。高台内側まで釉が掛けられた全面施釉で、口縁がやや外反し覆輪が施される。器体は薄く軽い。内底はやや浅く窪ませたようにも見うけられる。内底には、片切彫りのような鋭い刻線で流麗に表現豊な劃花が描

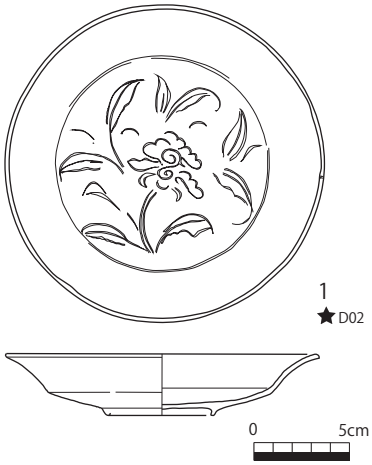


図1　端反皿（1）実測図

写真1　端反皿（1）

かれているが文様は細く浅い。釉色は青みを帯びた白色の透明釉、釉肌は光沢があるが、高台付近から口縁へと放射状の貫入が激しく内底の劃花は視づらい。劃花は花開く蓮花ひとつを折枝に表した蓮花文か、蓮の花が省略されているが、大きな蓮葉に支えられるように一株の蓮花をまとめる構図かもしれない。

（Ⅱ）箱書は無い。図２、写真２。

2. 平底皿（碟）　口径 14.2cm　底径 10.4cm
器高 2.2cm　重さ 108g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉が全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入が入る。底部の器厚が薄いところで 1mm と薄い底である。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅 2mm）で描かれているが彫りが浅く視づらい。龍が簡略化されるものの、体躯を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方には二つの鉤爪が前後の２カ所に描かれている。内面に黒色茶色の斑点、鉄分の吹き出し斑点がみられる。底部裏面には釉の気泡痕が底部縁辺に巡ったごとく多く見られ、気泡痕が剝落し、５カ所（2 ～ 1mm）に白い緻密な素地が見られる。覆輪部分の釉は他の部位に比べ薄く、口縁端部の釉を施釉後拭き取ったのかもしれない。

3. 平底皿（碟）　口径 14cm　底径 10.3cm
器高 1.9cm　重さ 126.5g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 2mm である。頭をもたげた龍が太い丸鑿（幅 4mm）で描かれ彫りが深い。体躯を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、龍の頭の右側が二重となり、消し忘れか眼が３点見られる。下方には鉤爪が２カ所にあり後ろの鉤爪が４爪描かれている。底部裏面には釉の気泡痕が底部縁辺に一部見られるが、他の４点に比べ気泡痕は一番少ない。内面に鉄分の吹き出し斑点がみられる。覆輪部分の釉は他の部位に比べ薄く、口縁端部の釉を施釉後拭き取

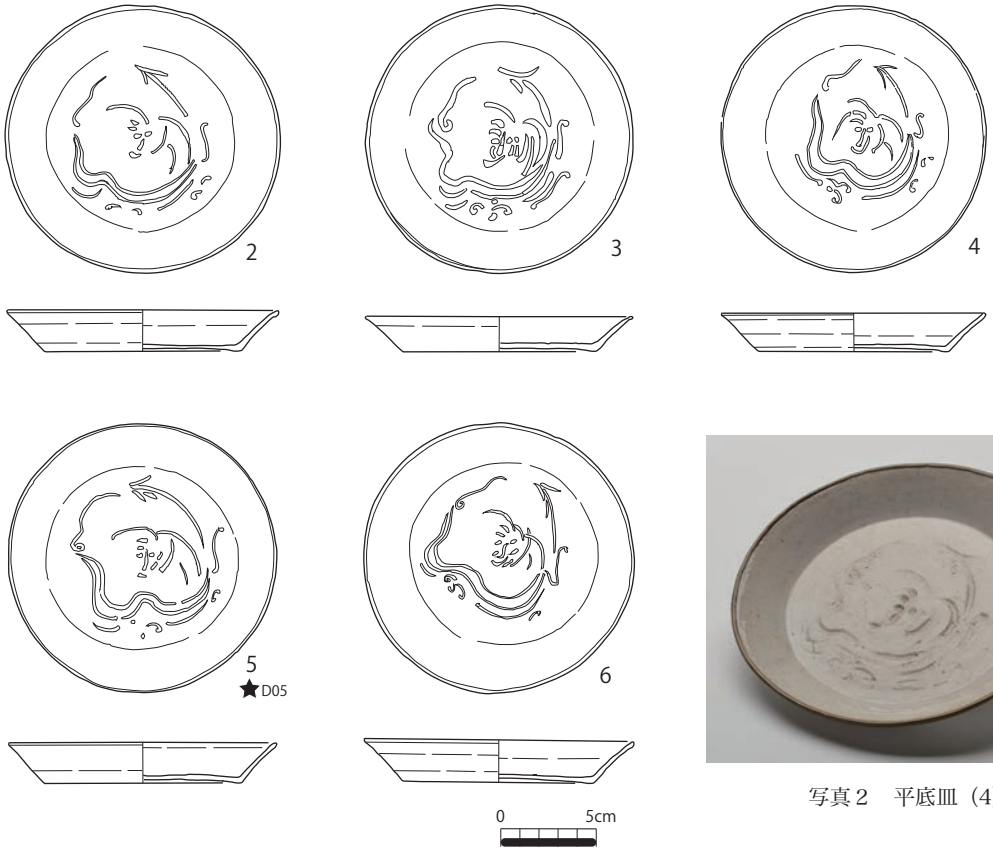


図２　平底皿（2 ～ 6）実測図

写真２　平底皿（4）

ったのかもしれない。

4. 平底皿（碟）　口径 13.9cm　底径 10cm
器高 2cm　重さ 95.2g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 1mm である。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅 2 ～ 1.5mm）で描かれ彫りが深い。体躯を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方には鉤爪が 2 カ所にありいずれも簡略化されている。底部裏面には釉の気泡痕が底部縁辺の一方に見られ、釉の剝落（2 ～ 4mm）も目立ち、21 カ所で緻密な白い素地が見られる。内面に黒色茶色の鉄分の吹き出し斑点がみられ、覆輪部分の釉は他の部位に比べ薄く、口縁端部の釉を施釉後拭き取ったのかもしれない。

5. 平底皿（碟）　口径 14cm　底径 10.4cm
器高 2.1cm　重さ 108.9g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 1.5mm の薄い底である。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅 2mm）で描かれているが彫りが浅く視づらい。龍が簡略化されるものの、体躯を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方には簡略化された鉤爪が前後の 2 カ所に描かれている。底部裏面には釉の気泡痕が底部縁辺の相対する二カ所に見られるが気泡痕が少なく裏面は他に比べきれいである。釉の剝落が 9 カ所、その中には 5mm 幅を測る 1 カ所がある。内外面に黒色茶色の鉄分の吹き出し斑点が多くみられる。覆輪部分の釉は他の部位に比べ薄く、口縁端部の釉を施釉後拭き取っ

表 1　伝世品　法量表

箱	No.　器種	口径	高台・底 径	器高	底部 最小厚	胴部 最大厚	総重量	分析番号
(Ⅰ)	1. 端反皿	14.6cm	5.6cm	3.2cm	2mm	2mm	161.1g	★D02
(Ⅱ)	2. 平底皿	14.2cm	10.4cm	2.2cm	1mm	2mm	108g	
	3. 平底皿	14cm	10.3cm	1.9cm	2mm	2.5mm	126.5g	
	4. 平底皿	13.9cm	10cm	2cm	1mm	2mm	95.2g	
	5. 平底皿	14cm	10.4cm	2.1cm	1.5mm	2mm	108.9g	★D05
	6. 平底皿	14cm	10cm	2.2cm	1.5mm	2mm	108.8g	
(Ⅲ)	7. 平底皿	13cm	9.1cm	2.1cm	2mm	2.5mm	104g	
	8. 平底皿	12.8cm	9cm	1.9cm	2mm	3mm	107.5g	
	9. 平底皿	13.1cm	8.8cm	1.9cm	2.5mm	2mm	109.8g	
	10. 平底皿	12.8cm	8.9cm	2.1cm	2.5mm	3mm	114.7g	★D04
	11. 平底皿	12.9cm	9.4cm	2cm	2.5mm	4mm	117.5g	
(Ⅳ)	12. 五花平底皿	14.8cm	10.6cm	2.6cm	2.5mm	2mm	144.6g	
(Ⅴ)	13. 端反皿	16.6cm	8.6cm	4.2cm	3mm	4mm	300.9g	★D01
(Ⅵ)	14. 端反皿	16.4cm	8.6cm	4cm	4.5mm	4mm	280.1g	元和7年
	15. 端反皿	16.5cm	7.7cm	3.7cm	4mm	3mm	241.1g	
	16. 端反皿	16.6cm	7.6cm	3.8cm	4.5mm	3mm	224.4g	★D03
	17. 端反皿	16.7cm	7.4cm	4cm	5mm	3.5mm	235.9g	
	18. 端反皿	16.7cm	8.1cm	4cm	4mm	3mm	271.2g	
	19. 端反皿	17cm	8.5cm	4.2cm	5mm	3.5mm	317.3g	
	20. 端反皿	17cm	8.4cm	4cm	5mm	3.5mm	292.8g	
	21. 端反皿	17.1cm	8.5cm	4.3cm	5mm	4mm	324.2g	
	22. 端反皿	16.6cm	8.4cm	4.3cm	5.5mm	4mm	333.5g	
	23. 端反皿	17.4cm	8.4cm	4.2cm	3mm	4mm	303.1g	
(Ⅶ)	24. 向付	10cm	4.2cm	5.2cm	4mm	3mm	107.4g	
	25. 向付	10cm	4cm	5cm	3.5cm	2mm	92.5g	
	26. 向付	10cm	4.4cm	5.1cm	4mm	2mm	91.9g	
	27. 向付	10cm	4.2cm	5.1cm	3.5cm	2mm	95g	
	28. 向付	10cm	4cm	5.1cm	4mm	2mm	91.6g	
(Ⅷ)	29. 丸皿	13.6cm	7.5cm	3cm	図なし	10客のうち　覆輪付7客		元禄6年
	30. 端反皿	13.5～14cm	7.6～8.1cm	3～3.3cm	図なし	10客　高台付		
	31. 小鉢	14.8cm	5.2cm	7.9cm	図なし	龍文が内底と外面に		

たのかもしれない。

6. 平底皿（碟）　口径 14cm　底径 10cm
器高 2.2cm　重さ 108.8g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 1.5mm と薄い底である。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅 1 ～ 2mm）で描かれているが彫りが浅く視づらい。龍の頭で眼が上下にあることから書き損じの可能性が考えられる。体躯を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方には鉤爪が前後の 2 カ所に描かれているが前の鉤爪は簡略され一爪のみ。底部裏面には釉の気泡痕が底部縁辺に見られ片側一方の気泡痕の幅が 1.5cm と広い。口縁の一部には覆輪装着の際生じたヒビがある。

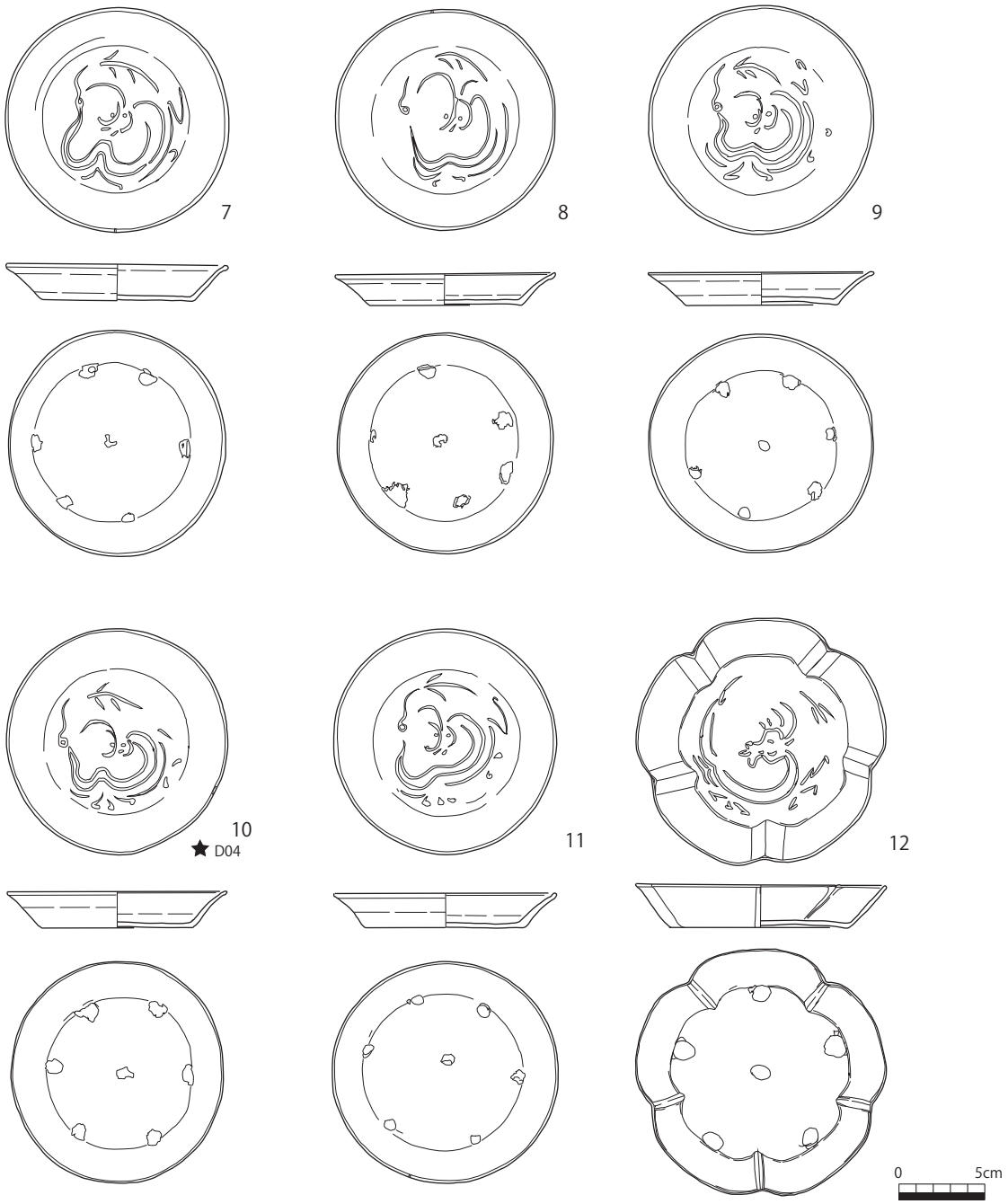


図 3　平底皿（5 ～ 11）・五花平底皿（12）実測図

（Ⅲ）箱書に饒洲窯とある。図３。

饒洲窯の名（景徳鎮窯）は長く白磁の総称のように用いられ箱書によく見受けられる。

箱書の蓋の表に『饒洲窯　小川珎蔵』

裏に『明治四拾三年六月壱日　名古屋
東袋町長谷川長［冝宣］堂ゟ購求
代價金貳拾貳円五拾銭也』とある。

7. 平底皿（碟）　口径 13cm　底径 9.1cm
器高 2.1cm　重さ 104g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が底部裏縁辺にはピン痕が６カ所と中央に１カ所見られる。覆輪内側の下に一部緋色が見られ、口縁端部の釉を施釉後拭き取ったのかもしれない。口縁外面の釉がやや厚く流れており覆焼（伏せ焼き）ではない。薄いところで 2mm を測る。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅１～ 1.5mm）で描かれ、彫りが浅く視づらい。体躯を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に描かれる構図は同じであるが、何が描かれているのかわからない程簡略化されている。

8. 平底皿（碟）　口径 12.8cm　底径 9cm
器高 1.9cm　重さ 107.5g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが､全面に細かい貫入。外面に茶色い鉄分か、吹き出し斑点が一部に見られる。底部の器厚が薄いところで 2mm を測る。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅１～ 1.5mm）で描かれているが彫りが浅く視づらい。体躯を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に描かれる構図は同じであるが、簡略化された構図全体が中央から右側にずれており、龍も縦長に描かれている。底部裏縁辺にはピン痕が６カ所と中央に１カ所見られる。口縁外面の釉が流下している。

9. 平底皿（碟）　口径 13.1cm　底径 8.8cm
器高 1.9cm　重さ 109.8g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内外面に黒い鉄分の吹き出し斑点が一部見られるも外面に多い。底部の器厚が薄いところで 2.5mm を測り、底中央部が少し盛り上がる。頭をもたげた龍が簡略化され、太い丸鑿（幅 2mm）で描かれているが、彫りは浅く視づらい。簡略化されているが、太い彫りのため龍の構図がはっきりと見られる。底部裏縁辺には楕円形を呈したピン痕が６カ所と中央に１カ所見られる。口縁下に釉たまりが見られる。

10. 平底皿（碟）　口径 12.8cm　底径 8.9cm
器高 2.1cm　重さ 114.7g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。外面に鉄分の吹き出し斑点が一部に見られる。底部の器厚が薄いところで 2.5mm を測る。頭をもたげた龍が簡略化され、細い丸鑿（幅１～ 1.5mm）で描かれているが、彫りは浅く視づらい。簡略化された構図全体が中央から下側にずれており、下側部分に押し込まれたように描かれている。底部裏縁辺にはピン痕が６カ所と中央に１カ所見られる。覆輪内側の下に一部緋色が見られ、口縁端部の釉を施釉後拭き取ったのかもしれない。口縁下には釉たまりが見られる。

11. 平底皿（碟）　口径 12.9cm　底径 9.4cm
器高 2cm　重さ 117.5g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。外面に鉄分の吹き出し斑点が一部に見られる。底部の器厚が薄いところで 2.5mm を測る。頭をもたげた龍が簡略化され、細い丸鑿（幅１～ 1.5mm）で描かれているが、彫りは浅く視づらい。底部裏縁辺にはピン痕が６カ所と中央に１カ所見られる。口縁下には釉たまりが見られる。

（Ⅳ）箱書は無い。図３、写真３。

12. 五花平底皿　口径 14.8cm　底径 10.6cm
器高 2.6cm　重さ 144.6g

平底で真っ直ぐに外に開いた五花形で、口縁には覆輪が施される。うすい黄色味を帯びた白色を呈し透明釉が全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入が入る。鉄分の吹き

出しが黒い点となり見られる。底部の器厚が薄いところで2mmと薄い底である。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅1.5mm）で描かれている。龍が簡略化されるものの、体躯を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方の二花には三つの鉤爪が描かれ、前足の鉤爪の方が長い。底部裏には布痕が、縁辺にはピン痕が5カ所と中央に1カ所見られる。覆輪内側五花の凹んだ口縁部分の一部に緋色が見られる。

（V）箱書は無い。図4、写真4。

13. 端反皿（盤）　口径16.6cm　高台径8.6cm
　　器高4.2cm　重さ300.9g

稜のある腰部から、斜めに直線的に立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。黄色味を帯びた乳灰濁色の釉がかかっている。全面に施釉されるが、高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで3mm、胴部の器厚が薄いところで4mmを測る。胴部内側面に一条の削りによる段を設けている。内底面には、焦げ痕か、やや黄ばんだ影としてピン痕が6カ所丸く巡り、径は約8cmを測る。内外面に黒い鉄分か、吹き出しが見られ外面に多い。

（VI）元和7年銘の箱書。図5、写真5・6。

箱蓋　中央に墨書有り
　　『くわんにゅう　　大皿　拾』

箱側面の貼付け紙（3.2cm×10.7cm）には三行書かれ、右側より

図4　端反皿（13）実測図

写真3　五花平底皿（12）

写真4　端反皿（13）

『貫入
　鳥乃子皿　十
　金フクリン』

上記の反対面の箱側面の貼付け紙は二枚重なっていた。

上紙（3.2cm×10.7cm）には三行書かれていた。判読不明部分は○とした。右側より

『○
　鳥乃子皿　　十
　貫入金フクリン』

下紙（4.2cm× 約 13cm）では二行書かれ、右側より

『○五○日
　○皿拾人分』

箱の裏底には紀年銘が見られた。右側より

『元和七年（1621）
　（削られ不明）○○
　辛酉　正月吉日』

箱は黒漆塗り、箱紐は丸紐で、箱蓋は縦 23cm、横 23cm、高さ 3.8cm 厚さ 8mm、箱身は縦 2.8cm、横 20.8cm、高さ 20.4cm、総高さ 21.5cm　を測る。

14. 端反皿（盤）　口径 16.4cm　高台径 8.6cm
　　器高 4cm　重さ 280.1g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には、覆輪が施される。黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり、塗りむらが見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 4.5mm、胴部の器厚が薄いところで 3mm を測る。口縁下の釉が流下している。外面に鉄分の吹き出し斑点が多くみられる。

15. 端反皿（盤）　口径 16.5cm　高台径 7.7cm
　　器高 3.7cm　重さ 241.1g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。黄白色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分では緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 4mm、胴部の器厚が薄いところで 3mm を測る。釉の流下状

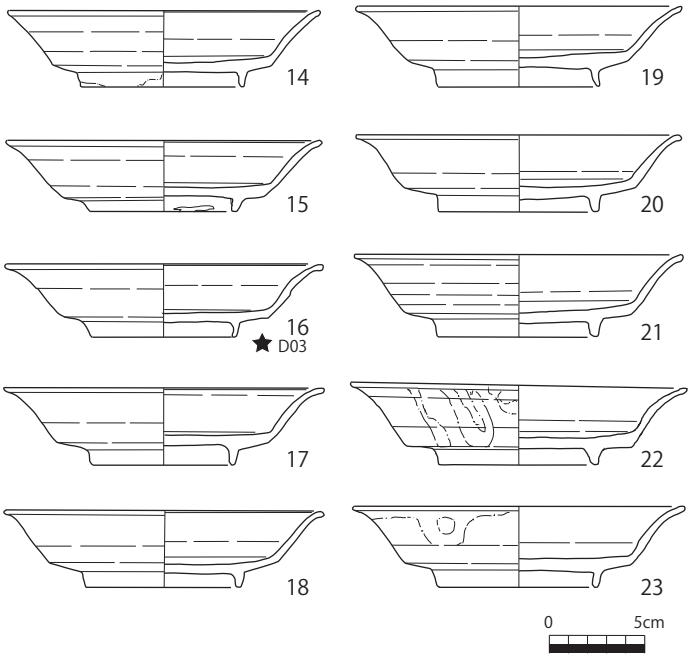


図 5　端反皿（14 ～ 23）実測図

写真 5　（VI）箱蓋

写真 6　（VI）箱裏底

況から横に立てて焼成か、あるいは焼成中にずれて立てた状態になったのかもしれない。。

16. 端反皿（盤）　口径 16.6cm　高台径 7.6cm
器高 3.8cm　重さ 224.4g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分では緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 4.5mm、胴部の器厚が薄いところで 3mm を測る。胴部上方には段上になったろくろ痕が見られ、口縁下の釉が流下している。

17. 端反皿（盤）　口径 16.7cm　高台径 7.4cm
器高 4cm　重さ 235.9g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 5mm、胴部の器厚が薄いところで 3.5mm を測る。胴部にはろくろ痕が見られ、口縁下の釉が流下している。

18. 端反皿（盤）　口径 16.7cm　高台径 8.1cm
器高 4cm　重さ 271.2g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分では緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 4mm、胴部の器厚が薄いところで 3mm を測る。胴部には段上になったろくろ痕が見られ、口縁下の釉が流下している。

19. 端反皿（盤）　口径 17cm　高台径 8.5cm
器高 4.2cm　重さ 317.3g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 5mm、胴部の器厚が薄いところで 3.5mm を測る。口縁下の釉が流下している。

20. 端反皿（盤）　口径 17cm　高台径 8.4cm
器高 4cm　重さ 292.8g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 5mm、胴部の器厚が薄いところで 3.5mm を測る。口縁下の釉が流下している。

21. 端反皿（盤）　口径 17.1cm　高台径 8.5cm
器高 4.3cm　重さ 324.2g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 5mm、胴部の器厚が薄いところで 4mm を測る。口縁下の釉が流下している。

22. 端反皿（盤）　口径 17.6cm　高台径 8.4cm
器高 4.3cm　重さ 333.5g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄白色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで 5.5mm、胴部の器厚が薄いところで 4mm を測る。口縁下の釉が流下し釉溜まりが目立つ。

23. 端反皿（盤）　口径 17.4cm　高台径 8.4cm
器高 4.2cm　重さ 303.1g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄白色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり緋色が見られる。高台の接地面が素地であることか

ら、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで5mm、胴部の器厚が薄いところで3.5mmを測る。口縁下の釉が流下している。内底隅の一部釉が白濁化している。

(Ⅶ) 箱書の和紙（3cm×10cm）に『鳥之子手向附五』とある。図6、写真7・8。

口縁下に涙痕といわれる釉溜まりが見られることから、覆焼（伏せ焼き）で焼かれていた。

24. 向付　口径10cm　高台径4.2cm
　　器高5.2cm　重さ107.4g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉が全面に施釉されるが、高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内底面（見込）部分が広い。底部の器厚が薄いところで4mm、胴部の器厚が薄いところで3mmを測る。口縁下には釉溜まりの涙痕が2カ所と胴部に金継ぎによる補修が見られる。

25. 向付　口径10cm　高台径4cm
　　器高5cm　重さ92.5g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉が全面に施釉されるが、高台の接地面は素地で、施釉後拭き取っている。釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内底面（見込）部分が広い。底部の器厚が薄いところで3.5mm、胴部の器厚は薄い所で2mmを測る。

26. 向付　口径10cm　高台径4.4cm
　　器高5.1cm　重さ91.9g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉で全面に施釉されるが、高台の接地面は素地で、施釉後拭き取っている。釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内底面（見込）部分が広い。底部の器厚が薄いところで4mm、胴部の器厚は薄い所で2mmを測る。高台脇には釉溜まりの涙痕が、端反口縁下にも釉たまりが見られる。

27. 向付　口径10cm　高台径4.2cm
　　器高5.1cm　重さ95g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉で全面に施釉されるが、高台の接地面は素地で、施釉後拭き取っている。釉肌は光沢があり、全面に細かい貫入。内底面（見込）部分が広い。底部の器厚が薄い所で3mm、胴部の器厚は薄い所で2mmを測る。口縁下に釉溜まりが見られる。

28. 向付　口径10cm　高台径4cm
　　器高5.1cm　重さ91.6g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち

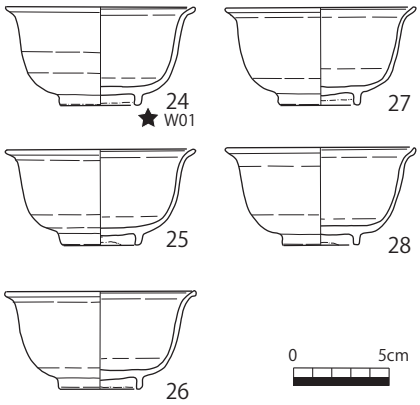


図6　向付（24～28）実測図

写真7　向付（24）

写真8　(Ⅶ)『鳥之子手　向附五』の箱書

上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉で全面に施釉されるが、高台の接地面は素地で、施釉後拭き取っている。釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内底面（見込）部分が広い。底部の器厚が薄いところで 4mm、胴部の器厚は薄い所で 2mm を測る。口縁下に釉溜まりが見られる。

（Ⅷ）その他

29. 元禄 6 年（1693）銘の箱書。写真 9・10。箱底に四行

『丑四月吉日』

『樽ヵ味』

『元禄六　酉　七月吉日　求』

『上田李保』

箱の側面には『○○皿十』の墨書がある。丸皿が十客で、文様はない。その内三客は口縁に覆輪がなく口紅で鉄釉が施されている。覆輪付七客は口径 13.6cm、底径 7.5cm、器高 3cm を測る。覆輪がない鉄釉口紅の三客は、口径 13.8cm、底径 7.6cm、器高 3.3cm を測る。乳灰濁色の釉が全面に施釉され釉全面に細かい貫入が。箱の紐穴より紐は丸紐であった。丑四月（1697）と七月に筆跡の違いがある。

30. 箱書は無い。写真 11。

高台付端反皿が十客で、文様はない。口縁に覆輪が施され、全面に貫入。口径 13.5 ～ 14cm、底径 7.6 ～ 8.1cm、器高 3 ～ 3.3cm を測る。

31.『とりの子　はち』の箱書。写真 12。

龍文小鉢で、口径 14.8cm、底径 5.2cm、器高 7.9cm を測る。碗形の小鉢で口縁に覆輪が施され、見込みにも龍文が描かれている。黄色が強い。

3．伝世品の蛍光Ｘ線分析

今回の伝世品の釉薬及び胎土、覆輪の成分について、蛍光 X 線分析を行なった。1 資料につき、無釉部分による素地、釉薬の表面、覆輪

写真 9　（Ⅷ）元禄六年銘の箱

写真 11　高台付端反皿（30）

写真 10　丸皿（29）

写真 12　龍文小鉢（31）

部分の金属、覆輪の継目部分の金属の４種類の素材部分について、それぞれ２箇所ずつ測定を行なった。分析装置は（株）堀場作所製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 XGT-5000XII を用いた。素地部分と釉薬部分の測定条件は、励起電圧：30kV、計測時間：500s、Ｘ線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、Ｘ線照射径：100μm である。覆輪に関する金属部分の測定条件は、励起電圧：50kV、計測時間：500s、Ｘ線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、Ｘ線照射径：100μm である。試料の測定箇所については、軽く布で汚れを落とす程度の表面調整をおこなった。

分析の結、素地及び釉薬の測定では、それぞれに検出される元素に大きな違いがみられなかったことから、Na（ナトリウム）、Mg（マグネシウム）、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、P(リン)、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Fe（鉄）について、それぞれを酸化物としてファンダメンタル法によって、成分比を算出した。この値は、あくまでも目安であり、分析の絶対値としては扱えないものである。

釉薬は、長石や植物灰などの珪酸を骨材とし、酸化アルミニウムを糊材、酸化カルシウ

表２　蛍光Ｘ線分析結果

素地部分	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_3	K_2O	CaO	TiO_2	Fe_2O_3
D01-1	0.0	0.0	17.5	78.2	0.0	3.0	0.9	0.2	0.3
D01-2	0.0	0.0	22.8	73.2	0.0	2.2	0.8	0.4	0.6
D01-3	0.0	0.0	19.2	75.8	0.4	2.8	1.3	0.1	0.4
D02-1	0.0	0.0	11.0	86.0	0.0	0.3	2.6	0.0	0.1
D02-2	0.0	0.0	11.3	82.0	0.0	2.3	4.1	0.0	0.2
D03-1	0.0	0.0	22.9	71.8	0.2	3.1	0.3	0.6	0.9
D03-2	5.4	0.7	23.8	64.9	0.3	3.3	0.3	0.5	0.8
D04-1	5.5	0.0	7.1	83.8	1.0	2.1	0.4	0.1	0.2
D04-2	3.9	0.0	11.1	73.8	1.8	5.4	0.4	0.8	0.9
D05-1	0.0	0.0	26.3	71.9	0.0	1.3	0.2	0.1	0.3
D05-2	0.0	0.0	28.4	68.0	0.0	2.0	0.2	0.1	0.3
W01-1	0.0	0.0	15.7	79.5	0.0	3.3	0.9	0.0	0.6
W01-2	0.0	0.0	21.1	74.6	0.1	2.7	0.7	0.1	0.7
釉薬部分	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_3	K_2O	CaO	TiO_2	Fe_2O_3
D01-6	0.0	0.0	17.0	74.5	0.1	6.2	2.0	0.1	0.1
D01-7	0.0	0.0	18.0	73.0	0.2	6.1	2.3	0.3	0.2
D02-3	0.0	0.0	12.0	78.6	0.0	2.3	6.8	0.0	0.2
D02-4	0.0	0.0	11.6	79.4	0.0	2.4	6.4	0.0	0.3
D03-3	6.3	0.0	18.0	68.6	0.1	4.4	2.0	0.1	0.5
D03-4	2.6	0.7	17.8	71.0	0.1	4.6	2.5	0.2	0.5
D04-3	5.4	0.0	17.2	71.7	0.1	5.1	0.5	0.0	0.1
D04-4	6.6	0.0	16.9	71.2	0.1	4.6	0.5	0.0	0.1
D05-3	0.0	0.0	17.8	77.7	0.0	3.7	0.5	0.0	0.3
D05-4	0.0	0.0	18.1	77.6	0.0	3.5	0.6	0.0	0.3
W01-3	6.7	0.0	16.4	72.7	0.1	2.2	1.4	0.0	0.5
W01-4	0.0	0.0	16.3	79.0	0.2	3.0	1.2	0.0	0.5

表３　江本による定窯の分析結果

釉薬の表面のX線マイクロアナライザーによる定量分析結果（%）

			SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	P_2O_3
No.01	澗磁村	5-8	70.0	20.2	0.8	0.3	4.6	0.4	0.7	1.9	0.3
No.06	澗磁村	82-12	70.9	19.0	0.9	0.2	4.0	2.3	0.3	2.1	0.3
No.10	澗磁村	11-1	61.3	17.2	0.8	0.1	14.2	3.3	0.5	1.8	0.7
No.12	澗磁村	15-3	63.7	13.8	1.0	0.1	15.1	2.9	0.4	2.1	1.0
No.16	燕山	86-9	72.3	16.6	0.6	0.04	4.5	2.7	0.3	2.6	0.4
No.17	燕山	86-11	63.3	14.7	3.2	0.3	12.5	2.3	0.2	2.2	1.3

＊江本1986より引用

ム:CaO) などのアルカリ土類酸化物や土灰（木灰）などを媒熔媒熔剤、酸化コバルト（CoO）などを着色剤として含有している。例えば、糊材とされる酸化アルミニウムは釉薬が結晶化するのを防ぎ、釉薬の清澄性を促進すると同時に適当な粘りを持たせ、厚みを均一にするような働きがあるとされる。媒熔剤は、釉薬の溶ける温度を調節するために加えられるものである。そこで、この釉薬の分析結果について、Al_2O_3-CaO-K_2O の 3 元素の比率に注目し、三角ダイアグラムに表した。その結果、D02 が他の資料にくらべ、やや CaO が多いことが判明した。

定窯産の皿に関しては、江本 1983 に詳細な分析値が示されている。この分析では、釉薬の

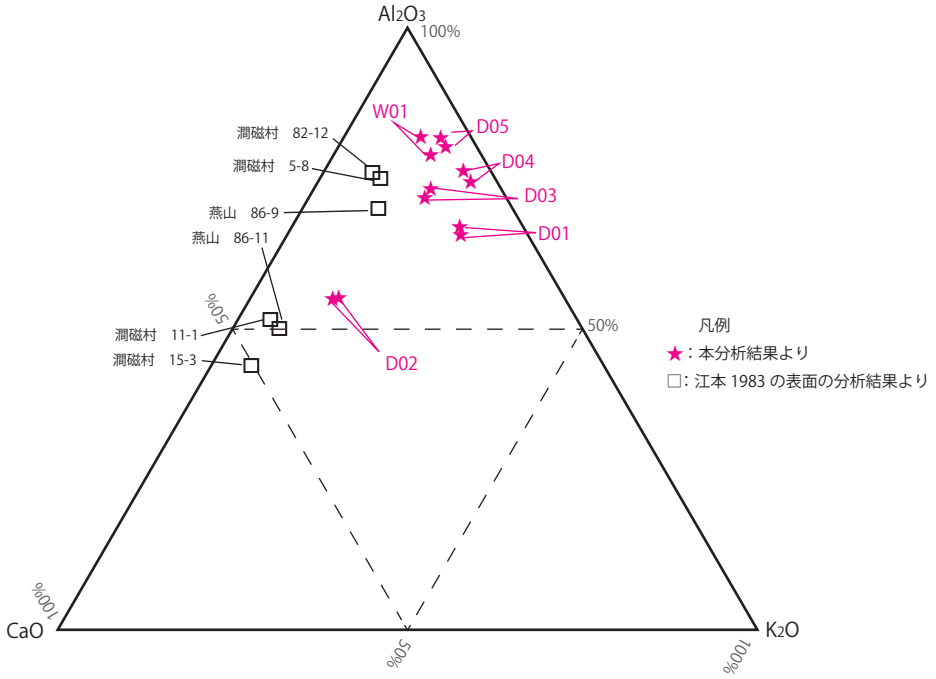


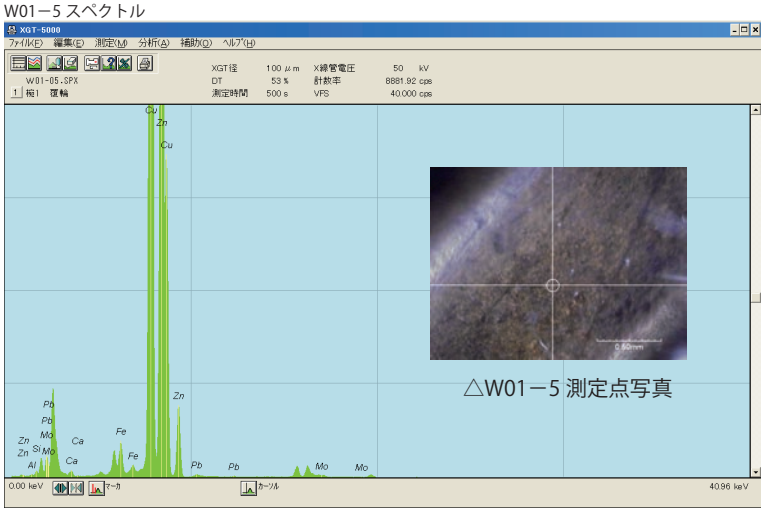
図 7　Ai_2O_3-CaO-K_2O ダイアグラム

表 4　覆輪部分で検出された元素

	Cu	Zn	Pb	Sn	Fe	Mn	Ca	Si	P	Cl	Al	Ti	K	Ni	Cr	As	Rb	Au	Cd	Mo
D01-4（覆輪）	◎	◎			○				△											
D01-5（覆輪）	◎	◎			○	○	○		△											
D01-8(つなぎ目)	◎	◎	◎	◎	○					○		○								
D02-5（覆輪）	◎	◎				○	△													
D02-6（覆輪）	◎	◎					△												○	○
D02-7(つなぎ目)	◎	◎	○	◎				△			△	△								△
D02-8(つなぎ目)	◎		○	◎							△									
D03-5（覆輪）	◎	◎			○	○	△	△		○	△		△							
D03-6（覆輪）	◎	◎			○		△	△		○	△		△							
D03-7(つなぎ目)	◎	◎	○	◎				△			△									
D03-8(つなぎ目)	◎	◎	○	◎							△									○
D04-5（覆輪）	◎	◎	○		○	○	△	△	△											
D04-6（覆輪）	◎	◎	○		○	○														○
D04-7(つなぎ目)	◎	◎	○	◎	○			△	○						○	△				
D04-8(つなぎ目)	◎	◎	○	◎				△	○							△				
D05-5（覆輪）	◎	◎			○		△	△	△						○					
D05-6（覆輪）	◎	◎	○		○		△	△	△		△									
D05-7(つなぎ目)	◎		○	◎	○											△				
D05-8(つなぎ目)	◎	◎	○	◎																
W01-5（覆輪）	◎	◎	○		○		△	△			△				△					
W01-6（覆輪）	◎	◎	○		○	○	△	△			△									
W01-7(つなぎ目)	◎	○	○	◎	○	○	△	△	△			△				△				
W01-8(つなぎ目)	◎	○	○	◎	○	○					△					△				
W01-9(金継)	◎	○			○	○		○			△	△			△		○	○		
W01-10(金継)	○				○		△										○	○		

覆輪部分の測定

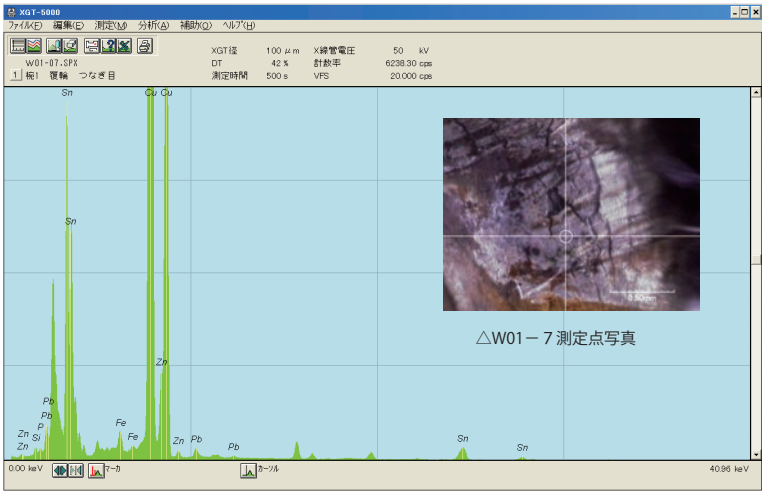
W01－5 スペクトル



△W01－5 測定点写真

覆輪（継目）の測定

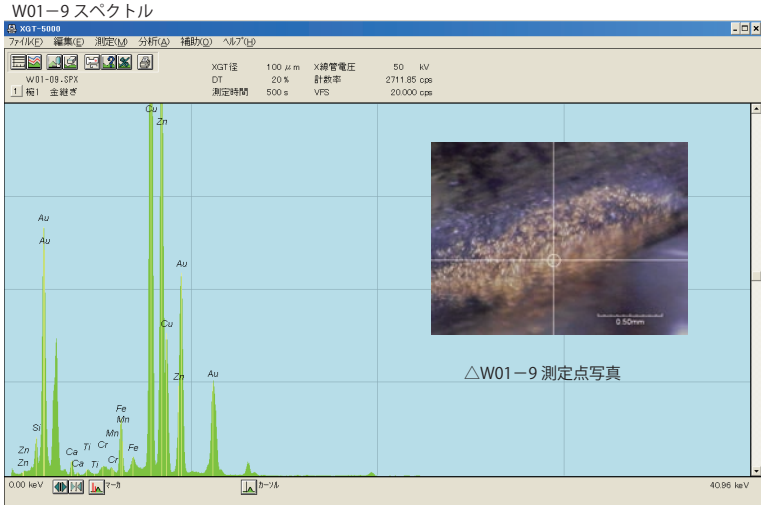
W01－7 スペクトル



△W01－7 測定点写真

金継部分の測定

W01－9 スペクトル



△W01－9 測定点写真

図８　覆輪部分の蛍光Ｘ線分析結果

表面を研ぎ落した粉末を主な試料とし、溶融または粉末のまま分析を行ったものである。本論の分析は、試料の表面に対し、未処理の状態で蛍光X線を照射して測定したものである。江本の測定とは、対象物そのものが異なるっているため、直接の比較は意味をなさない。ただし、江本の分析のうち、釉薬表面のマイクロアナライザーによる定量分析がある。この分析については、測定対象が同じである。が、測定方法が異なることから、直接の比較はできない。そこで、Al_2O_3-CaO-K_2O の3元素の比率で本論の結果との比較を行った。その結果、江本の分析でも本論でも共に CaO に偏りがみられた。

次に覆輪の金属部分の測定について述べる。覆輪部分の金属部分の分析では、各部分で異なる元素が認められた。覆輪自体は、Cu（銅）と Zn（亜鉛）が多く含まれていることから、真鍮製であると判断した。また継目部分では、Cu、Zn に加え Pb（鉛）と Sn（錫）が含まれていることから、ハンダ合金が使用されていると考えられる。

向付の資料（W01）では、金継ぎが認められた。この金継ぎ部分を測定したところ、Au(金)、Cu（銅）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）が認められた。

4．徳川美術館の所蔵品

尾張徳川家に伝世した「鳥の子」がある。徳川美術館の所蔵品に刻花蘭文皿、刻花竜雲気文皿、刻花龍文皿がそれぞれ展覧会に出品された。( ) の数字は枚数、表5に法量表。

白磁刻花蘭文皿（五）、白磁刻花竜雲気文皿（五）、白磁刻花龍文皿（八）、白磁刻花龍雲気文皿（十）が京都国立博物館、根津美術館、五島美術館の展覧会図録に掲載されており、「鳥の子」の研究史とも言える解説を、各図録より転載した。No. は展覧会の展示 No. そのままである。

（1）『特別展覧会日本人が好んだ中国陶磁』
平成3年（1991）京都国立博物館

113. 白磁刻花蘭文皿（鳥の子皿）　五口
高 2.7cm　口径 12.1cm　高台径 4.2cm
明時代（15～6世紀）

尾張徳川家（徳川美術館）に「鳥の子砂張覆輪鱠なます皿」として伝えられている作品である。端反り風の浅い皿で、腰でかっきりと段をつけ、小さい高台を削り出し、見込みには蘭のような文様を刻花で表している。宋代の名窯定窯の作風に倣ならった中国南方の民窯で製作されたものであろう。こうした淡黄色の軟陶を、多分鳥の卵と重ね併せて「鳥の子」と呼び習わしたものであろう。製作時期も長期にわたるものと思われる。

114. 白磁刻花龍雲気文皿　五口
高 3.3cm　口径 16.1cm　底径 9.7cm
明時代（15～6世紀）

113図の作品とよく似た浅い皿であるが、この方は高台を削り出さず、平底に作り、口縁部には砂張の覆輪を施している。素地も灰白色の

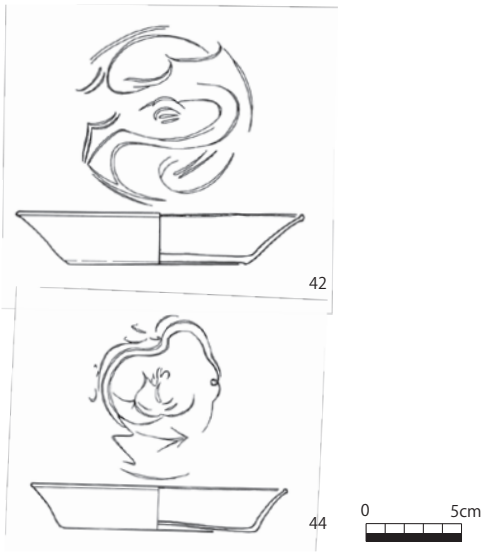


図9　徳川美術館収蔵品（42・44）

表5　徳川美術館所蔵品　法量表

No.	器　種	点数	口径	高台・底径	器高	備考
113	白磁刻花蘭文皿	5口	12.1cm	4.2cm	2.7cm	
114	白磁刻花龍雲気文皿	5口	16.1cm	9.7cm	3.3cm	平底
41　91	白磁刻花龍文皿	8枚のうち	17.2cm	5.7cm	3.8cm	
42	白磁刻花蘭文皿	5枚	13.3cm	9.6cm	2.8cm	実測図
44	白磁刻花龍雲気文皿	10枚のうち	14.1cm	10.3cm	2.5cm	実測図

比較的軽い感じの柔らかめのもので、その上に黄味をわずかに帯びた白濁失透性の上釉が全体に施されている。釉下に雲気や竜文を刻花で表したもの二種が混ざって伝えられている。焼成は定窯と同様、伏せ焼きしている。やはり定窯写しの製品と見られ、日本では「鳥の子」と呼ばれ、またあるいは「切っ立皿」と呼ばれたものを想像させる器形の作品である。

（2）『華南のやきもの　- 黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて - 』鑑賞シリーズ 1

平成 10 年（1998）根津美術館

41. 白磁刻花龍文皿　8 枚のうち

高 3.8cm　口径 17.2cm　底径 5.7cm

「大鳥子刺身皿」の箱書をもつ白磁皿である。見込みには文様を刻線で施し、外側に菊花弁を表した皿もある。砂張の覆輪が付く。（8 枚のうち 5 枚。五島美術館 No.99 と同じ皿。）

42. 白磁刻花蘭文皿　5 枚。図 9

高 2.8cm　口径 13.3cm　底径 9.6cm

尾張徳川家ではこのような皿を、「会席道具」と分類した。端反りの浅い皿で、腰に段を付け小さな高台を削り出し、定窯の作風に倣ならっている。（実測図 2 に図があり、京都国立博物館 No.113 と同じ皿か。法量に違いがある。）

44. 白磁刻花龍雲気文皿　10 枚のうち。図 9。

高 2.5cm　口径 14.1cm　底径 10.3cm

白高麗ともいわれた白磁皿で、灰白色の胎土にわずかに黄味を帯びた白濁釉が掛かる。伏せ焼きし、口縁に砂張の覆輪が付く。（10 枚のうち 5 枚。実測図 2 に図が有り。京都国立博物館 No.114 と同じ皿か。法量に違いがある。）

（3）『向付 茶の湯を彩る食の器』特別展「向付　茶の湯を彩る食の器」図録

平成 21 年（2009）財団法人五島美術館

交趾・鳥子　「鳥子」は、釉調が鳥の卵に似て白く柔らかな趣であることから付いた中国産と考えられる白磁をいう。現在のところ、産地も時代も不明である。茶碗の中には、東南アジアのベトナムなどの白磁も含まれている。桃山時代の茶会記には懐石の食器として「鳥子」があらわれるが、江戸時代に入ると日本国内でも伊万里が磁器を制作するようになり、その実態が記録や記憶から失われていったものの一つである。

99. 大鳥子刺身皿（白磁刻花龍文皿）

磁器 / 八枚　明時代・十七世紀

高さ 3.8cm　口径 17.2cm　底径 5.7cm

白磁で、銅を主体に錫を加え、銀や鉛などを少量含んだ、砂張という合金の覆輪（口縁部を覆う金属）がある。見込みの底には、雨龍という角のない竜が丸くうずくまる様子を線彫している。八枚が同じ箱に入って伝わるが、五枚には外側に二重の蓮弁が型押しで表され、三枚は無文である。器の内側と外側に釉薬が掛かる。蓮弁文のあるものの高台内には、輪トチのような痕跡がみられるが、無文のほうには無い。柔らかい釉調の白磁で細かな貫入（釉面に現れるひび）があらわれている。

箱書付には「ふち懸り　大鳥子指身皿　八つ」とあり、こうした白磁を「鳥子」と呼んでいたことがわかる。江戸時代、その用途は会席における指身（刺身）を盛る皿であった。（根津美術館 No.41 と同じ皿。）

5．遺跡出土資料

伝世品にみられた平底皿と腰折れの端反皿が、堺環濠都市遺跡と一乗谷朝倉遺跡より出土している。発掘調査報告書の各報告文による。表 6 に遺跡出土法量表。

（1）一乗谷朝倉氏遺跡

31 次、35 次、51 次、57 次の調査より出土。

31 次調査　（23）は白磁の皿である。破片資料から復元を試みた。外反気味に開く、底の浅い皿で高台はない。全体につくりは薄手で胎土は乳白色、釉調は黄白色を呈す。細かい貫入がみられる。口唇部は露胎で、いわゆる口禿口縁となっている。器壁内面に曲線の暗文がみられる。底部裏面にも釉がかけられている。顕著なろくろ目をのこす。

35 次調査　（160）の白磁皿も胎土は灰褐色で細かい貫入が全体に入る。碁笥底で、体部から口縁部にかけて直線的に、わずかに外反して広がる。畳付は尖らせて丁寧に釉が削り取られている。

51 次調査　中国製陶磁器の中に平底の白磁皿。（229）～（231）は、無高台の平底から体部はやや外反ぎみに立ち上がる。器壁はかなり

薄く 2 ～ 3mm で、見込みに片篦描きの唐草文を施文する。3 点は同一サイズで、最も良く残る（231）は、口径 16.5cm、器高 3.3cm を測る。

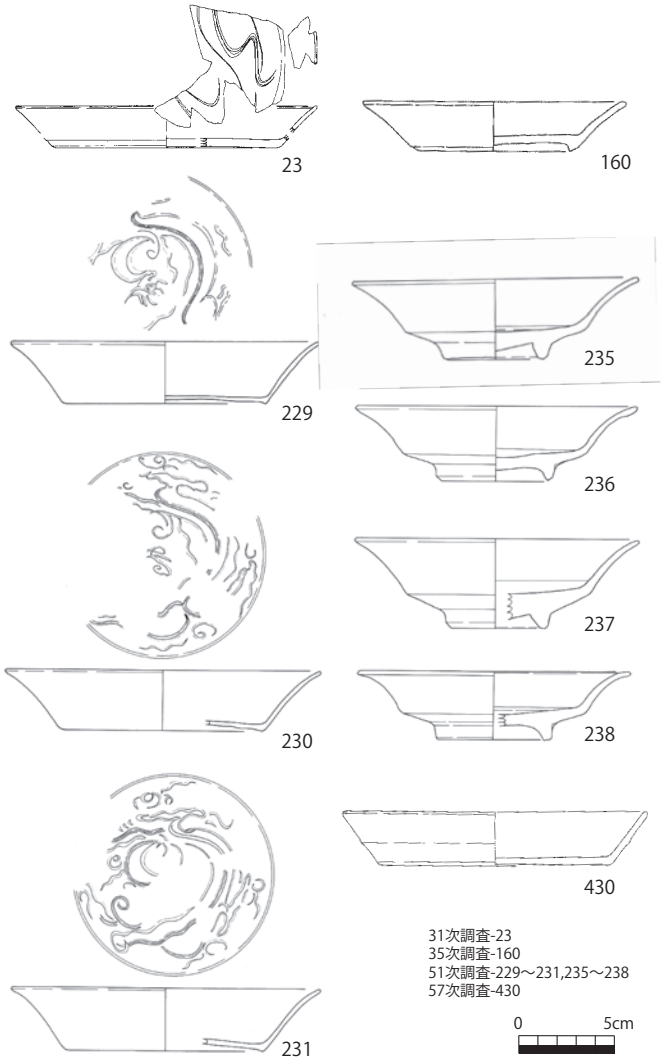


図 10　一乗谷朝倉氏遺跡出土品

（235）～（238）は白磁の端反皿で、腰折れのタイプ。高台畳付け以内が露胎となる。（235）は口径 15.4cm、器高 4.25cm、高台内の中心が回転ケズリにより円錐状に尖る。（236）は口径 15.8cm、器高 4.0cm。（237）は口径 15.0cm、器高 4.7cm。（238）は口径 14.5cm、器高 3.7cm で、高台内のケズリ痕がナデ消され、畳付けは平坦で幅広い特徴を有す。

57 次調査　中国製陶磁器中の白磁皿（430）で口径 16.4cm、器高 2.9cm を測る。底部外面

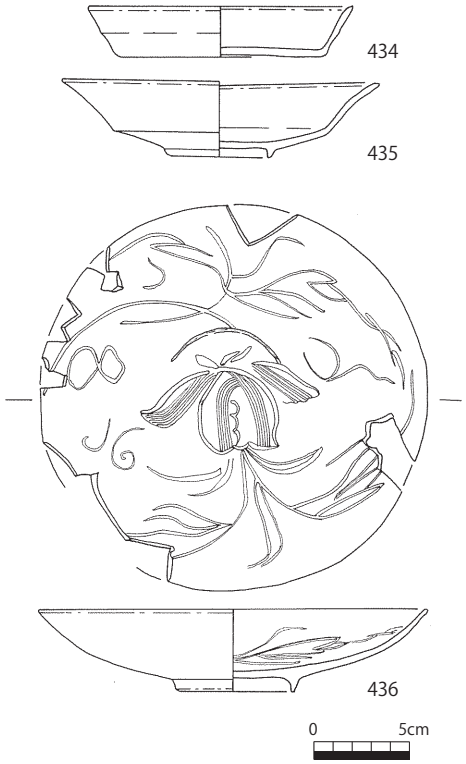


図 11　堺環濠都市出土品

表 6　遺跡出土（一乗谷朝倉氏遺跡・堺環濠都市遺跡）　法量表

遺跡名		器種	遺物No.	口径	高台・底径	器高	文様・備考
一乗谷朝倉氏遺跡	31次	平底	23	(15.8cm)	(11.6cm)	(2.1cm)	刻文
	35次	端反皿	160	(13.8cm)	(8cm)	(2.6cm)	碁笥底
	51次	平底	229	(16.4cm)	(10.6cm)	(3.2cm)	唐草文
		平底	230	(16.6cm)	(10.6cm)	(3.2cm)	唐草文
		平底	231	16.5cm	(10.4cm)	3.3cm	唐草文
		端反皿	235	15.4cm	(5.2cm)	4.25cm	
		端反皿	236	15.8cm	(5.6cm)	4cm	
		端反皿	237	15.0cm	(5.0cm)	4.7cm	
		端反皿	238	14.5cm	(5.8cm)	3.7cm	
	57次	平底	430	16.4cm	(12.0cm)	2.9cm	
堺環濠都市遺跡	SKT263	平底	434	(14.0cm)	(10.6cm)	(2.6cm)	4個体
		端反皿	435	(16.8cm)	(5.4cm)	(4cm)	
		口縁内湾	436	(20.6cm)	(6.0cm)	(4.4cm)	牡丹唐草文

（　）の数値は実測図より

外周に潰れた三角形状の僅かな高台を有し、体部は直線的に外上方へ伸び口縁に至るという特徴的な形態を呈する。白濁化した乳白色の釉がかかるが、口唇部ではこれを拭き取り口禿としている。朝倉氏遺跡では少数ではあるものの定量存在するタイプである。

（2）堺環濠都市遺跡 SKT263

第 1 次焼土層（塼列建物 SB3）より出土。

陶胎の口禿白釉皿（434 ～ 435）は二次焼成により淡ピンク色となる。貫入は多く高台は貼付ける。皿(435)は体部付近で大きく腰折れし、皿（436）は口縁が内湾し見込みに牡丹唐草文が彫られ、皿（434）は平底で 4 個体出土した。

一乗谷朝倉氏遺跡、堺環濠都市遺跡から出土の白磁皿、平底皿、腰折端反皿は白濁化した乳白色、もしくは黄白色を呈し、細かい貫入が入り、口唇部が露胎した、いわゆる口禿口縁である。口禿口縁には覆輪が施され使用されていたものである。平底皿は器厚が 2 ～ 3mm を測る薄い製品である。

伝世品にみられた器種、平底皿と腰折れの端反皿の他に、一乗谷朝倉氏遺跡の碁笥底白磁皿（160）は細かい貫入が全体に入っている等覆輪を付ければ口禿口縁と差異がなくなり、碁笥底白磁皿は第 44・49・50 次調査からも出土しており、貫入のあるものとないものの二種類あったのかもしれない。また堺環濠都市遺跡からは内湾する皿（436）が出土している。

6．定窯の折腰盤と碟（せつ）平底皿

定窯の窯址は中国河北省保定市曲陽県にあり、曲陽県霊山鎮の澗磁、北鎮村および東西燕川、野北村一帯に集中して分布しており、邢窯の影響下に 9 世紀前半の唐代中期に誕生、晩唐・五代、宋代、金代、と発展し元代になると定窯は衰退している。700 年余りに及ぶ定窯の歴史のなかで、宋代は最も高い評価を得た白磁製品が生産された時代で、宋代五大名窯の一つであり、中国の歴史において皇帝、宮廷に献上した期間が最も長く、またその文献記録の最も多い窯でもある。宋代、金代の定窯の刻花や印花の製品は名声を得るが、同時に各地の窯場ではその摸倣製品が作られている。定窯が衰退した元代以降、とくに明・清時代には倣定窯製品が多く見られるようである。

清の藍浦『景徳鎮陶録』には、「純白滋潤なるものを白定または粉定と称し、その質粗にして微黄を帯びるものを俗に土定と呼ぶと見える。然し又一説に粉定は南定を指し、土定は山西省の平陽窯に於ける倣定器を称するといふ。」 南定は景徳鎮。明代の景徳鎮で定窯に見間違うほどの倣定器がつくられていたことを伝えている。

根津美術館と大阪市立東洋美術館の展示図録に腰折れ皿・盤と平底皿が見られる。

（1）『定窯白磁』 昭和 58 年（1983）の展示図録

根津美術館に小山冨士夫氏の定窯窯址採集陶器片が収蔵されている。この陶器片の整理研究報告を兼ねて昭和 58 年（1983）「定窯白磁展」が根津美術館で開催された。腰折れ皿実測図④⑰と平底皿実測図⑭㉒。図録より解説、図を転載した。表 7 に小山冨士夫氏採集陶磁器片法量表。

「定窯窯址採集陶磁片考察表」より

実測図④、器形・皿、残存部位・口、胎土・白磁土、釉色・黄白、文様・劃蓮華文、備考・口縁施釉無

実測図⑰、器形・皿、残存部位・底 / 口、胎土・白磁土、釉色・黄白、文様・劃蓮華文、備考・畳付け施釉有り

実測図⑭、器形・皿、残存部位・底 / 口、胎土・白磁土、釉色・黄白、文様・劃蓮華文、備考・高台無　口縁施釉無

実測図㉒、器形・皿、残存部位・底 / 口、胎土・白磁土、釉色・黄白、備考・高台無

白磁土とは夾雑物を全く含まないきめ細やかな白色磁土

釉色の黄白とは黄白色の透明釉

劃蓮華文とは劃花（片切彫）による蓮華文（萱草文）のあるもの。

（2）『定窯・優雅なる白の世界ー窯址発掘成果展』 平成 25 年（2013）の展示図録

腰折盤と碟（せつ）平底皿が見ら、図録より図を転載した。No. はそのままである。表 8 に定窯出土品法量表。

澗磁嶺窯 A 区の第三期、北宋晩期（1086 ～

1127）の段階に、内底面に萱草文か蓮花文の装飾が彫り込まれた胴の深い腰折れ盤、図 32（本稿図 13）と内底面に角のない龍とされる「螭（ち）」が、胴部外面には蓮弁文が彫り込まれた腰折れ盤、図 36 （本稿図 13）と内底面に角のない龍とされる「螭（ち）」が、「螭」は龍に類し、とぐろを巻きくねくねと這う姿から「蟠螭（ばんち）」とも呼ばれる。

出土品の解説は展示図録よりの抜粋で No. はそのままである。

金（1115 ～ 1234）前期で澗磁嶺 C 区の出土品、

39. 白磁刻花蓮花文碟

高 2.0cm　口径 11.5cm　底径 7.7cm、

小ぶりの平皿で、「碟」と呼ばれ見込みには刻花により折枝状の蓮華文。釉薬は酸化焼成のためやや黄味を帯びた牙白色（アイボリーホワイト）で、光沢と潤いのある質感を見せています。口縁部は釉薬が拭き取られた露胎となっており、覆焼（伏せ焼き）されていたことが分かります。満釉の底部は平底で内側がやや凹んでいます。底部周囲には幅広の削りが施されています。

金（1115 ～ 1234）後期で澗磁嶺 A 区の出土品、

45. 白磁刻花龍文“東宮”銘輪花盤

高 5.6cm　口径 24.6cm　底径 8.1cm、

口縁部に 6 ヶ所の切り込みを入れて輪花形にした大振りの盤です。見込みいっぱいに刻花により龍文と宝珠文が表されており、龍の髭や体毛の表現には櫛目技法も用いられています。龍文は、頭がちょうど盤の中央にあり胴部を反時計回りにくねらせ環状としたいわゆる団龍文となっており、龍の表情はどこかユーモラスで愛嬌が感じられます。こうした龍の表現は金代定窯の特徴の一つといえるかもしれません。釉薬はやや黄味がかった牙白色（アイボリーホワイト）で、光沢のある質感を見せています。底部を含めた全面に施された満釉で口縁のみ拭き取られて露胎となっていることから、覆焼（伏せ焼き）されていることが分かります。この種の盤は盤形支圏と環形支圏を用いて匣鉢の中で重ね焼きされており、金代定窯の主要な器種の一つといえます。背の低い、幅の細かい輪高台が付いており、高台内には施釉後に線刻された「東宮」銘が見られます。この銘によりこの盤が金の宮廷用につくられたものであることがはっきりと分かります。

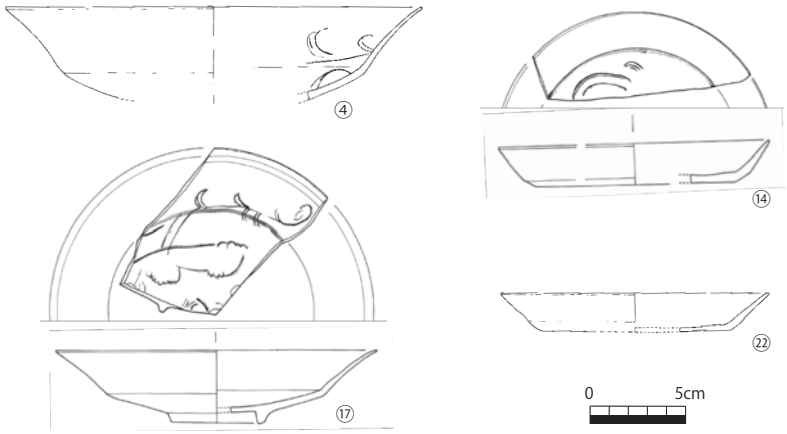


図 12　小山冨士夫氏採集腰折れ皿・平底皿実測図

表 7　小山冨士夫氏採集陶磁片　法量表

No.	器　種	内　文様	口径	高台・底径	器高	備考
④	皿	劃蓮華文	(22cm)			実測図
⑰	皿	劃蓮華文	(17cm)	(4.8cm)	(3.8cm)	実測図
⑭	皿	劃蓮華文	(14.4cm)	(10.5cm)	(2.2cm)	実測図
㉒	皿		(14.2cm)	(10cm)	(2cm)	実測図

『定窯白磁』より　　（）の数値は実測図より

46. 白磁刻花龍文“東宮”銘輪花盤、
図 46（本稿図 14）
高 5.5cm　口径 25.0cm　底径 8.2cm

No.45 と同じ「東宮」銘の盤で、器形や大きさなどもほぼ同じです。見込みの龍文の基本構図や刻花のタッチも同様であることから、同一陶工の手になるものかもしれません。「東宮」刻銘はやはり高台内のやや右寄りに位置し、書体も No.45 とほぼ同じです。釉薬は酸化焼成によりやや黄味を帯びた牙白色（アイボリーホワイト）で、光沢と潤いのある質感で、外面には定窯ならではの「涙痕」と呼ばれる釉が流下して少し厚くなった部分が見られます。宮廷向けの規格化された製品の生産の状況をうかがい知ることができる貴重な資料です。

なお遺跡出土資料で、現在定窯白磁と確認されたのは、鎌倉北条時房・顕時邸出土の白磁片 2 点と一乗谷朝倉氏遺跡の白磁片 2 点と福岡鴻臚館跡の定窯系稜花口縁皿の 3 例のみである。

7．茶会記の「鳥子皿」

茶会記に「鳥子」が記載されていた。五島美術館の特別展『向付　茶の湯を彩る食の器』の図録中、第六部論考編に、砂澤祐子編「茶会記に見る会席の陶磁器一覧」があり、『松屋会記』、『天王寺屋会記』、『神屋宗湛日記献立』、『槐記』より、会席に利用された陶磁器（土器かわらけを除く）の種類を抽出されている。同じ茶会で違う陶磁器が使用されている場合は、/ で区切り区別される。

茶会では抹茶を飲む前に懐石（会席）で軽い

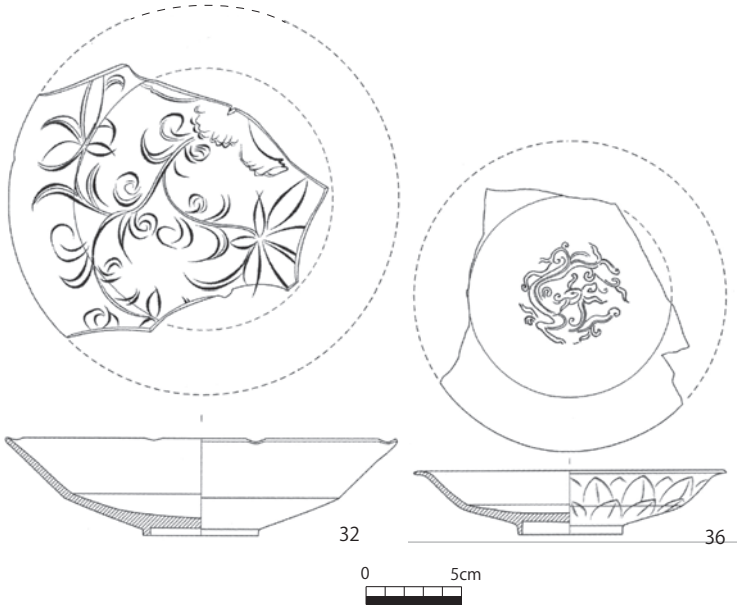


図 13　腰折れ盤

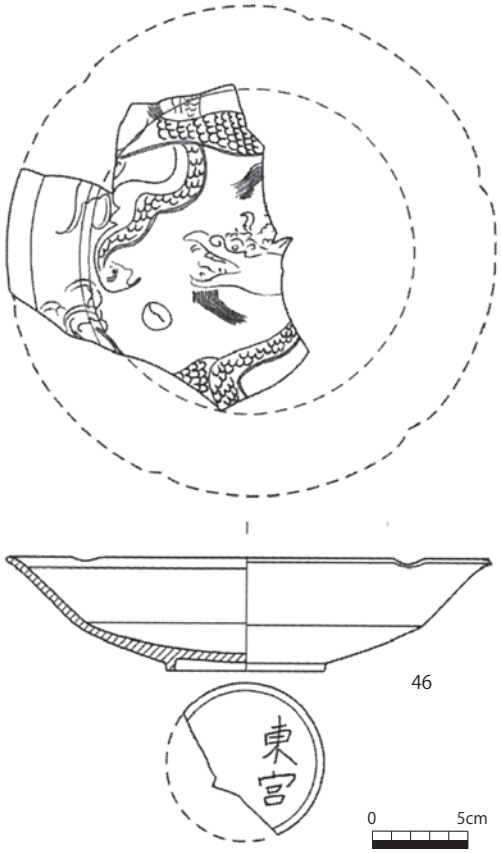


図 14　“東宮”銘輪花盤

表 8　定窯出土品　法量表

No.	器　種	内底文様	口径	底径	器高	備考
32	白磁刻花蓮花輪花盤	蓮華文	(20.8cm)	(6cm)	(5cm)	
36	白磁刻花龍文輪花盤	蟠螭文	(16.4cm)	(5.4cm)	(3.4cm)	
39	白磁刻花蓮花文碟	折枝状蓮華文	11.5cm	7.7cm	2cm	
45	白磁刻花龍文輪花盤	団龍文	24.6cm	8.1cm	5.6cm	東宮銘
46	白磁刻花龍文輪花盤	団龍文	25cm	8.2cm	5.5cm	東宮銘

『定窯』　「出品作品解説」　より　　（）の数値は実測図より

食事をする。向付は懐石で使用された器で陶磁製、黄瀬戸、志野、織部の桃山陶の向付がよく知られている。

天正2年（1574）から享保19年（1734）までの160年間に158回の茶会が開催されている。天正年間（1573～1592）では20年に78回、文禄年間（1592～1596）では4年に5回、慶長年間（1596～1615）では20年に9回、元和年間（1615～1624）では9年間に1回、寛永年間（1624～1644）では20年に22回、正保年間（1644～1648）では4年に5回、享保年間（1716～1736）では20年間に38回、の茶会記に記載された会席の陶磁器一覧である。

これを基に作成したのが、表9の茶会記に見る会席の「鳥子皿」である。

「鳥子皿」「鳥ノ子」「鳥子」の記述が19カ所、ただし天正2年(1574)2月3日朝主が上様(織田信長）官用皿/鳥皿『天王寺屋会記』宗及他会記に、「鳥皿」とあり、「鳥子皿」の可能性もあるが「鳥子」でないため表9からは除外した。

天正3年（1575）8月10日に津田宗及の茶会に「鳥子皿」が初めて登場する。

天正年間の78回の茶会記で「鳥子皿」が記載された茶会記は15回で、天正3年（1575）から天正8年（1580）までの6年間に集中しており、津田宗及が亭主となった茶会は天正6年（1578）11月22日の茶会まで合わせて13回、「鳥子皿」が使用されていたことがわかる。津田宗及は「鳥子皿」をたいへん気に入り、茶会のたびに毎回使用していたとも推察される。

天正7年（1579）には佐久間勘九郎が「鳥子皿」を、織田信長の老家臣で武将随一といわれた佐久間信盛の息子が勘九郎である。天正8年（1580）には惟任日向守（明智光秀）が「鳥子皿」を、寛永4年（1627）には中左近が「鳥子皿」を、寛永15年（1638）には松平下総守が「鳥ノ子サラ」を、松平忠明は江戸幕府大政参与で徳川家光の後見人である。寛永18年（1641）には大蔵長右衛門が「鳥子皿」を、大蔵六蔵の通称が長右衛門、能役者小鼓方である。正保3年（1646）には石井宗有「鳥子フクリンキク皿」を使用しており、様々な人に「鳥子皿」が好まれていたことが窺われる。

天正、享保、寛永は存続期間が長い20年間で、茶会も多く開催されているが、「鳥子皿」

表9　茶会記に見る会席の「鳥子皿」

西暦	年	月　日	時	主	陶磁器	会　記
1575	天正3年	8月10日	朝	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
1576	天正4年	7月22日	朝	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿/菊皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
		8月4日	朝	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿/菊皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
1577	天正5年	5月15日	昼	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
		5月20日	朝	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
		8月30(晦)日	晩	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
		9月8日	朝	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
		9月15日	朝	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
		9月25日	朝	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
1578	天正6年	2月29日	昼	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
		6月7日	朝	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿/菊皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
		6月15日	昼	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
		11月22日	朝	天王寺屋（津田）宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
1579	天正7年	10月28日	朝	佐久間甚九郎	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及他会記
1580	天正8年	1月9日	朝	惟任日向守（明智光秀）	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及他会記
1627	寛永4年	7月6日	晩	中左近	鳥子皿	『松屋会記』久重茶会記
1638	寛永15年	1月4日	朝	松平下総守	鳥ノ子サラ	『松屋会記』久重茶会記
1641	寛永18年	2月19日	朝	大蔵長右衛門	鳥子皿	『松屋会記』久重茶会記
1646	正保3年	3月7日	朝	石井宗有	鳥子フクリンキク皿	『松屋会記』久重茶会記

砂澤祐子編『茶会記に見る会席の陶磁器一覧』より抽出

の記載例は、天正年間の78回の開催では15回、ところが享保年間の38回の開催では使用例は無く、寛永年間の22回の開催では3回である。「鳥子皿」は天正年間の前半に登場しており、織田信長が茶道具の名品を収集した「名物狩り」を行っていた頃でもあり、その後空白の47年間を経て、再登場するのが寛永4年(1627)である。

千利休の詫茶大成の時期と小堀遠州らが新しい茶の湯を発展させた時期に「鳥子皿」が使われている。唐物から和物への変化の中で、見いだされたのかもしれない。将軍家の御成による武家の茶の湯でも、この「鳥子皿」が好まれたのは、定窯の白磁製品に対する、白いやきものへの憧れが連綿と続いていたからではないのだろうか。それ故に長く使われ伝世したのかもしれない。

8.「トリ皿」

日明貿易の末期を知る貴重な資料『策彦入明記』は天文6年（1537)、天文16年（1547）の二度、大内義隆が指導して行った遣明使節の記録類である。遣明船で明に渡った禅僧策彦周良の克明な記録を総称したもので、中国寧波での中国係官との交渉や、寧波沖に仮泊していたころの買物帳や、北京まで各地での見聞、北京での皇帝拝謁など朝貢の様子が記録される。明で様々な陶磁器を購入しておりその中の陶磁器の記載に、青磁、白磁、染付が見られる。天文19年（1550）6月9日に帰国。天竜寺塔頭妙智院の3世住持策彦周良は五山文学史に足跡を残し、武田信玄、織田信長らとも交渉があったという。

長谷部楽爾著『原色日本の美術第29巻請来美術（陶芸)』「日本人の趣味と請来陶磁（室町時代)」1972の策彦周良の請来陶磁より抜粋する。

砕器香炉一　青茶碗三　小茶碗二
　　青茶碗盃一　白トリ皿十
白キツタテ 十　白ワキ皿 十
　　クワンニウ大トリ皿 十　キツタテ 十
青キツタテ 十　砕器茶碗 一
　　船様花瓶 一　定器大 四　定器小 八
芙蓉盃 三　砕器皿小 十　砕器芙蓉盃 一
　　四角砕器皿 四　土物水続 一
柱花瓶 一　青茶碗皿 二十　酢塩皿 三百
　　染付茶碗 三十　染付皿 百
白菊皿 二十　砕器二号大皿 十
　　白菊前塩小皿 十　前塩皿 四十
白切立茶碗皿 十　青酢塩皿 四十
　　白トリ皿 十　クワンニウ大トリ皿十
白キツタテ 十　白ワキ皿 十

と多くの陶磁器が見られる。青は青磁、白は白磁、砕器は釉に貫入のある器で、キツタテは、胴または縁がまっすぐに立ち上がった碗や皿のことである。

この「トリ皿」については河原正彦氏が『特別展覧会 日本人が好んだ中国陶磁』平成3年（1991）において「トリ皿も後世「鳥の子皿」とか単に「鳥の子」と呼ばれ、鳥の卵殻に似た粗製の定窯風の白磁ではなかったかと思われる。また芙蓉も菊形も花形（稜花）の盃や小皿で、とくに日本人には好まれた器形であった」と書かれている。

天文年間（1532～1555）には「トリ皿」、砂澤祐子編「茶会記に見る会席の陶磁器一覧」には、天正2年（1574）2月3日朝、主が上様（織田信長)、官用皿/鳥皿『天王寺屋会記』宗及他会記には織田信長が「鳥皿」との記述がある。

9.「鳥の子皿」とは

伝世品の「鳥の子皿」に共通するのは、黄味をおびた光沢のある白い透明の釉が全面施釉され、全面施釉の釉には細かい貫入が入る。内定面には蓮華文や龍文が描かれるが貫入のため文様がたいへん視づらく、実測図も苦心の図となった。古い段階のものは器厚が薄く軽い。文様は新しくなるに従って簡略化され、はじめの構図が理解できていないと、何が描かれているのかわからないほど簡略化が進む。

腰折れの端反皿、高台付端反皿、平底皿、五花平底皿、高台付丸皿、向付、小鉢等の器種が見られたが、腰折れの端反皿、平底皿、五花平底皿について、口禿は確認できるものの仔細に観察したが覆焼きの痕跡は認められなかった。

しかし小碗形の向付は涙痕の釉溜まりが見られ覆焼きが認められた。

腰折れの端反皿は、古い段階のものは釉調が少し青味をおびた白色（1）で底部の器厚が薄く総重量が 161.1g と軽い。しかし新しくなると釉が灰乳濁色（13 ～ 23）の白磁と思えないような釉調になり、器厚が 3mm ～ 5mm と全体に厚く総重量が 312.5g（平均値）と重い。鉄分の吹き出しが見られ、どの製品にも釉に細かな貫入がはいる。

平底皿（2 ～ 11）は、黄色味をおびた透明で光沢のある釉が全面に施釉され、内定面には蓮華文や龍文が描かれる。全面に細かい貫入がはいる。底部の器厚が薄いものでは 1mm と薄く総重量が 110.1g（平均値）と軽い。底部に窯道具の痕跡（7 ～ 11）が、縁辺にピン痕が 5 カ所と中央に 1 カ所見られ、中央の 1 カ所は底部中央を支えるためのものかもしれない。

五花平底皿（12）は、うすい黄色味をおびた白色を呈した透明釉が全面に施釉され、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入が入る。底部裏には布痕と縁辺にピン痕が 5 カ所と中央に 1 カ所見られる。

なお平底皿と五花平底皿では、鉄分の吹き出しが黒・茶の斑点となって見られた。

向付（24 ～ 28）は、淡い黄色味を帯びた白色の透明釉が全面に施釉され、口縁下に涙痕といわれる釉溜まりが見られることから、覆焼（伏せ焼き）で焼かれていた。全面に細かい貫入。内底面（見込）部分が広い。

今回紹介した器種以外に、五花平底皿（写真 13・14）、高台付五花鉢が見られた。

写真 13　五花平底皿　口径 16.5cm　器高 3.4cm

尾張徳川家（徳川美術館）には、白磁刻花蘭文皿（5 客）、白磁刻花竜雲気文皿（5 客）、白磁刻花龍文皿（8 客）、白磁刻花蘭文皿（5 客）、白磁刻花龍雲気文皿（10 客）がある。端反皿には小さな削り出し高台のもの（113.42）と平底（114.44）がある。二重の蓮弁文が外側に型押しされた皿と無文の皿があり（41.99）、蓮弁文型押しの高台内には輪トチンのような痕跡が見られるが、無文には無い。尾張徳川家の伝世品は、「鳥の子」の中でも優品といわれるものであろう。

定窯の製品をまねた倣定器は俗に土定とも呼ばれており、「鳥の子」は土定である。景徳鎮周辺で焼かれており明代には磁州窯でも少量焼かれているという。

伝世品にみられた平底皿と腰折れの端反皿に類似する器形が、堺環濠都市遺跡と一乗谷朝倉遺跡より出土している。堺環濠都市遺跡では茶道具蔵と考えられる建物の焼土層から出土しており、慶長 20 年（1615）に被災した建物で天正元年（1573）以降に建てられたと考えられている。一乗谷朝倉氏遺跡は天正元年（1573）に織田信長の焼き討ちにより朝倉氏は滅亡している。一乗谷朝倉氏遺跡から、天正元年（1573）以前にすでに「鳥の子」があり、堺環濠都市遺跡から、天正年間（1573 ～ 1592）に堺でも「鳥の子」があったことがわかる。

茶会記に記載された「鳥の子」の最初は、天正 3 年（1575）の津田宗及の茶会である。天正 3 年（1575）から天正 8 年（1580）までの 6 年間に「鳥の子」の茶会が多いが、遺跡と同様に天正年間である。

写真 14　五花平底皿　裏　底径 14.6cm

一方で日明貿易の末期を知る貴重な資料『策彦入明記初渡集』に記載された「トリ皿」は天文6年（1537）、天文16年（1547）の二度遣明船で明に渡った禅僧策周良の陶磁器購入記録の中に見られ、「トリ皿」と呼称される。「トリ皿」の記述から、早ければ天文6年（1537）、遅くとも天文16年（1547）には「鳥の子」の呼称があったと考えてもいいように思われる。

しかしこの頃の遺跡出土の白磁皿には伝世品に類似のものはないのである。陶磁器の購入記録にそれまでの白磁の製品と区別するために「白トリ皿」と記載したか、一般的な呼称ではなかったのかもしれない。

砂澤祐子編「茶会記に見る会席の陶磁器一覧」には、天正2年（1574）2月3日朝、主が上様（織田信長）、官用皿/鳥皿『天王寺屋会記』宗及他会記に、織田信長が「鳥皿」を使用した記述がある。岐阜城での茶会である。この「鳥皿」がいくばくかの影響を与えたことであろう。これを期に「鳥の子皿」が広まっていったように思われる。

伝世品の箱書の箱底に『くわんにゅう　大皿拾』『貫入鳥乃子皿　十　金フクリン』『元和七年(1621)(削られ不明)〇〇辛酉　正月吉日』の紀年銘があり、元和7年(1621)での「鳥の子」である。腰折れ端反皿（13～23）で、黄色味を帯びた乳灰濁色の釉で外面に鉄分の吹き出し斑点が多くみられる。釉が乳灰濁色で白磁と思えないような釉調で器厚が全体に厚くなっている。

寛永17年(1640)オランダを巻き込んだ「寛永大恐慌」といわれる不況に続き、寛永19年(1642)の大飢饉が当時の経済構造に、その土台を揺るがす激震として作用し、甚大な被害を与え、その結果「初期豪商」が没落し、国内市場の再編成がなされた時期でもある。それまでの豪商から新しい価値観・美意識をもった新興商人への交代である。

茶会記では正保3年（1646）の石井宗有「鳥子フクリンキク皿」が一番新しい記述となり、この後に記述はない。1640年代「初期伊万里」が本格的に染付磁器を生産し流通がはじまるが、美濃では織部が終焉し、その後は雑器生産窯として低迷する。17世紀中頃には「鳥の子」も忘れさられた白磁の別称となっていたのかもしれない。

なお江戸の遺跡東京都千代田区『神田淡路町二丁目遺跡』に「鳥の子」が出土していると鈴木裕子氏よりご教示があった。報告書の遺物説明より 写真66－2（第167図－11）「白磁の碗。薄手である。釉は灰白色で厚めに掛かり、黒色の貫入が全面に入る。胎土は白に近い白色で緻密な土であるが、露胎部は橙色に発色している。

10. おわりに

『策彦入明記』と『松屋会記』、『天王寺屋会記』、『神屋宗湛日記献立』、『槐記』の、茶会記より、茶会では「鳥の子皿」が使用されたのは天正3年（1575）から天正8年（1580）までの6年間に「鳥の子」の茶会が多いこと、堺環濠都市遺跡から、天正年間（1573～1592）に「鳥の子」が出土しており、天正年間の茶会に使用されていたことはうなずける。一乗谷朝倉氏遺跡は天正元年（1573）に朝倉氏が滅亡していることから、天正元年（1573）以前にすでに「鳥の子」が存在していたことは明らかである。

「トリ皿」の記述は、早ければ天文6年(1537)、遅くとも天文16年（1547）には使われており、五山文学の巨匠ともいわれ織田信長も帰依した禅僧策彦周良が購入した「白トリ皿」を、天正2年（1574）の岐阜城での茶会に織田信長が「鳥皿」を使ったのを機に、広く知られるようになり、茶会で「鳥の子」が広まっていったと考えられなくもない。

そして茶会記では正保3年(1646)の「鳥子」を最後に見られなくなるのである。

唐物から和物への変化の中で見いだされ、定窯の白磁製品に対する「白いやきもの」への憧憬が連綿と続いていたように思われ、17世紀中頃、初期伊万里が本格的に染付磁器を生産し流通がはじまると「鳥の子」も輸入されなくなり、忘れさられた「やきもの」白磁の総称となっていったのかもしれない。

伝世品について蛍光X線分析の結果、定窯澗磁村、燕山の出土品との相違が明らかになっ

たが、定窯出土品と「鳥の子」伝世品の差異は窯場の違いであると思われる。1. 端反皿は伝世品の中では一番古い時期で、三角ダイアナグラムの CaO（カルシウム）に偏りがみられるが、透明釉が定窯出土品に近い成分の釉になっていたが故にと考えられなくもないのである。そして覆輪が真鍮製であることも成果の一つといえる。

本稿を作成するにあたり、貴重な資料の提供をはじめ、ご指導とご教示を頂戴した鵜飼雅弘、江﨑　武、鬼頭　剛、佐藤公保、鈴木正貴、鈴木裕子、武部真木、永井邦仁、永井宏幸、松浦繁蔵、水村伸行、吉田光春の各氏に、記して謝意を表するものである。

引用・参考文献

長谷部楽爾 1972『原色日本の美術第 29 巻 請来美術（陶芸）』小学館
田賀井秀夫 1974『入門やきものの科学』共立出版
森田　勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』
上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』
小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代について」『貿易陶磁研究 No.2』
関口広次 1983a「小山富士夫先生採集の定窯窯址陶磁片について」『定窯白磁』
関口広次 1983b「定窯窯址採集陶磁片考察表」『定窯白磁』
江本義理 1983「定窯磁器の材質について」『定窯白磁』
小野正敏 1985「出土陶磁よりみた 15、16 世紀における画期の素描」『MUSEUM』No.416
米原正義 1989「茶の湯」『織田信長事典』新人物往来社
高嶋廣夫 1994『陶磁器釉の科学』内田老鶴圃
稲垣正宏 2008「遺跡出土の 14・15 世紀茶道具」『野村美術館研究紀要 17』
水澤幸一 2009『日本海流通の考古学 中世武士団の消費生活』高志書院
加藤榮一 2012「オランダ船と陶磁器貿易の変遷 ー十七世紀初頭から明清兵革までー」『出光美術館 館報第 158 号』
川添昭二編 1988『よみがえる中世 1 東アジアの国際都市博多』平凡社
小野正敏・水藤　真編 1990『よみがえる中世 6 実像の戦国城下町越前一乗谷』平凡社
王莉英・穆青 2009　富田哲雄訳『定窯瓷　中国名窯シリーズ 6』株式会社二玄社
第 34 回貿易陶磁研究会研究集会 2013『近世都市江戸の貿易陶磁 発表要旨』日本貿易陶磁研究会
関西近世考古学研究会 2016『関西近世考古学研究 24 歴史資料としての近世貿易陶磁』
五月書房 1980　昭和 55 年覆刻版『陶磁大辞典』「定窯」
吉川弘文館 1985『国史大辞典 6』「策彦周良」
講談社 1995『クロニック戦国全史』「策彦周良」
根津美術館 1983『定窯白磁』
京都国立博物館 1991『特別展覧会 日本人が好んだ中国陶磁』
根津美術館 1998『華南のやきもの　- 黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて - 』鑑賞シリーズ 1
堺市博物館 2006『茶道具拝見ー出土品から見た堺の茶の湯ー』
財団法人五島美術館 2009『向付 茶の湯を彩る食の器』 特別展「向付　茶の湯を彩る食の器」図録
大阪市立東洋美術館 2013『国際交流企画展 定窯・優雅なる白の世界ー窯址発掘成果展』
鎌倉市教育委員会 1988『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4「北条時房・顕時邸」』
堺市教育委員会 2004『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告　ー SKT263・甲斐町東 2 丁ー』 堺市文化財調査概要報告　第 103 冊
福井県教育委員会 1983『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』第 35 次調査報告
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1997『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅵ　第 29・30 次、第 57・58 次、第 83 次調査』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2001『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報Ⅷ第 44・17 次調査』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2007『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅸ第 49・50 次調査』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2010『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅹ　第 51・52 次調査』
淡路町二丁目西武地区市街地再開発組合　株式会社四門 2011『神田淡路町二丁目遺跡』
福岡市教育委員会 2013 『史跡 鴻臚館跡　鴻臚館 20　- 南館部分の調査（2）』福岡市発掘調査報告書第 1213 集

研究記要　第19号

発行年月　2018年5月

編集・発行　(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　一柳印刷株式会社

本書は再生紙を使用しています。

＊書籍出版後に文字等の修正を実施したPDF です。（2018.6.27）